

NO. 50  
SUMMER  
1975

# 英語展望

*ELEC BULLETIN*

特集：英語教育の  
現状と改革の方向(3)

(対談) 平泉渉・鈴木孝夫

インタビュー：外国語教育の周辺

永井道雄・國弘正雄



**ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL**

# 英語展望

NO. 50  
SUMMER  
1975

*ELEC BULLETIN*

Edited by Fumio Nakajima  
The English Language Education Council, Inc., Tokyo



【インタビュー】

外国語教育の周辺……………永井道雄・國弘正雄 2

【国際展望】

離れてつく……………鹿野 力 8

オーストラリア、バブア・ニューギニアを旅して……………中野道雄 11

【特集】 英語教育の現状と改革の方向 (3)

対談：英語教育への直言……………平泉 渉・鈴木孝夫 13

日本の英語教育……………海江田 進 20

アンケート：英語教育改善のために(2)…………… 22

英語学習23年日に思う……………齊藤造酒雄 24

真の英語教師とは……………中山祖詠 25

バラッドの世界(その2)……………平野敬一 26

Challenge and Response [西山 千・國弘正雄

小林祐子・松下幸夫] …………… 31

Thinking in English は可能か／幼児の英語教育の

効罪／英語に敬語はあるか

【新刊書評】『文法論Ⅱ』……………斎藤武生 40

『英語前置詞活用辞典』……………國弘正雄 42

『閉ざされた言語・日本語の世界』……………下村誠二 43

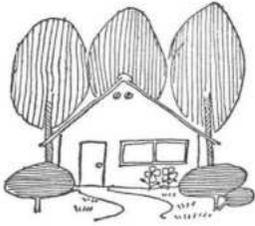
新刊紹介…………… 45

展望通信…………… 48

表紙デザイン

太田英男

## 外国語教育の周辺



### 日本文化の特色—受容型

國弘 文部大臣にご就任、ご苦労さまです。いや、おめでとうございます、と申し上げるべきでしょうか。先生の文相ご就任は、何といても三木さんの一大クリーンヒットだったわけですから。長年、お近づきをいただいている私としても、嬉しく誇らしいことに存じます。

実は、先日も旧友のTBSエンサイクロペディア・ブリタニカのギブニー社長と話したのですが、ブリタニカ事典の日本語版に、新内閣の3人の閣僚が執筆している。これは稀有なことだということなんです。ブリタニカといえば世界的な事典ですが、3人も有力閣僚がそれぞれ署名入りで寄稿しているというのは新内閣の文化レベルと国際性の高さを示すというわけです。

そのお一人が永井先生で、「福沢諭吉」の項を担当しておいでである。いま一人は宮沢喜一外相で「池田勇人」の項を、そしてさいごになりましたが三木さん自身、「尾崎行雄」、憲政の神様といわれた伊藤博文のことで、の項を執筆している。こんなオンパレードは世界のどの国でもなかったことだよね。彼、感激していました。先生もむろんギブニー氏とはお親しく、彼の『人は城、人は石垣』の出版記念会に足をお運び下さった。とても喜んでいましたよ。

ところで私、ここに *Los Angeles Times* 紙の1月23日号をもっているんですが、サム・ジェイムソン特派員の東京電として、先生の外人記者クラブでの講演要旨を大きくのせています。見出しが“A Plague in Japan: Discommunication” というのですが、この中で、日本人は他者から吸収することには馴れているが、どうも一方通行で、こちらから他者への伝達は弱い。これを何とか変えていきたい、と抱負を述べておいでなんです。この点については、私も全く同感で、先生の驥尾に付しているいろいと発言してきたのですが、まずこの一方通行、片貿易という点についてご意見をちょうだいできればと思います。

(ゲスト) 永井道雄 (文部大臣)

國弘正雄 (国際商科大学教授)

永井 私は、日本において片貿易という伝統は悪くないような気もするのです。つまり、人の国へどんどん教えるという逆の片貿易があって、伝統的にいえば、たとえば神聖ローマ帝国がそうですね。現代ではアメリカとソ連がわりにそういうタイプでしょう。それは非常にいい文明を人に伝えるという効果もありますけれども、しかし受け取る側からいうと、それが力と結びついていたりすると押しつけみたいになる。

それに比べると日本は男女関係になぞらえると非常に女性的で受容型です。古くは中国文化とか仏教文化を受け入れた。最近ではオランダの文化とか、次にヨーロッパの文化、それからアメリカの文化を受け入れた。これは世界秩序の形成という点からいうとちょっとおもしろい形ですね。

ぼくは日本人は突然人をつかまえて説教するという姿にならないほうがいいと思います。というのは、おそろくなりえないと思うのです。文化的に受容型になったのは、きのう、おとといの話でなくて、もうほとんど日本という文化の形をなしたところからそうなんですけれども、そういうのをもう十何世紀やっているわけです。急にちがうことをいい出したらおそろくうまくできないと思うのです。やはり人間にスタイルがあるように、文化にもスタイルがあると思うのです。だからそこはそう変えなくていいのではないかと。問題はそれに即してどうくふうするかということだと思のです。その場合いろいろ方法はある。1つは呼び屋方式というのがある。たとえばアメリカの例ではベイルートに American University というのがある。イギリスだったら香港大学というのがある。自分の国のことばで教育しているわけです。日本もそういうふうにとったらどうですかという人もいます。事実最近国会でそういう質問もあったのです。しかしぼくはそういうことはちょっとありえないと言った。つまり日本人がかりにカラカスに日本大学をつくって日本語でしゃべり出すとどうということになるか。まず学生が集まらないでしょう。だからそういう鶴のまねをするカラカスみたいなことはしないほうがいい。

それで呼び屋方式というのは日本へ世界中いろいろなとこの人に来てもらって、そしてみんなが思っていることや考えていることを日本人と一緒に協力して研究したりする。その場合も日本語でない。こういうやり方ですね。それが国連大学だと思うのです。ぼくはやはりこういう方向を主張したわけです。この場合も受容型を変えるわけではないのです。

それからもう1つは、Image Communication というのをもう少しふうしていいのではないかと思うのです。これはNHKが今度で10回目でしたか、教育テレビでコンテストやって Japan Prize を出しています。あれは非常にいいねらいなんじゃないでしょうか。いろいろなイメージで日本を伝えていくというやり方。日本人というのは美的表現みたいなものがすぐれている。わりに絵を書いたりするのがうまいですからね。映画もなかなかいいものをつくっている。ですから日本人の意識というものを伝える場合にイメージによる方法が1つあると思います。これは今後もっとやったらおもしろいのではないかと思うのです。

第3番目は伝えるとして何を伝えるかという問題があるのです。その場合ぼくが考えるのは、日本人は気がつかない間に世界史の中で案外おもしろいことをしているのかもしれない。

きのう築地の見本市に行ったのです。Danish Pastryの自動生産機械ができたのです。日本製です。群馬県の製菓会社でつくったのです。すべてオートメーションでパイが出てきたりする。出てくる菓子はなかなかりっぱなんです。こんなものをつくっている国なんて世界中に絶対ありえない。それで Danish Pastry をオートメ化してみんなで食べようという。

要するに日本という国は西洋を見ない国ですから当然西洋的でない文化があるわけです。それでまた東洋的かというところでもなくて、ずいぶん中国の影響受けましたけれども、女の人は中国服着なかった。いまでも着てない。それから食べるものは昔から中華料理ずいぶんはやっているけれども、しかし日常生活は和食である。何か人のところから受け入れたものを異質な文化とまぜ合わせてなかなか統合には到達しないんです。混乱の中でごちゃごちゃやっている。

それからいまの世界でいうと、いわゆる先進後進とい



永井文部大臣(左)、 國弘正雄先生(右)

うことばもあるし、ぼくは最近先発後発ということばが好きなんだけれども、そういうところで一番気になる問題というのは、GNPとか生活程度でしょう。これもある程度達成した。ただ達成する過程で戦争してみたり、公害が出たり、いろいろ失敗もする。それからぼくの感じでは将来おそらくこの程度の経済力を持った国で核兵力を持たない唯一の国で残るでしょう。これはアメリカ文化ともちがうし、ソ連の文化ともちがうし、イギリスの文化ともちがうわけです。

ぼくは文部大臣ですけれども、文部大臣の給料なんか手取り50万いくらです。60万円ぐらいもらっていたのだけれども、最近三木総理大臣が10%引きと決めちゃったものだから50万になった。だけど50万円ということになってくると、日本の民間の会社なんかみると、ぼくと同じ給料もらっている人はいくらでもいる。それからフリーランサーで仕事をしている人でもいます。なかなか民主的ですよ。Income's distribution の点でこれは大抵のアジアの国あるいはアフリカの国よりいいと思うのです。西洋と比較しても相当いいと思います。日本の文部大臣の収入というものは。

ずいぶん具体的なことばかりいいましたけれども、要するにそういう文化というのは世界にあまりないので。何を伝えるかというところ、こういうことを伝えるのですね。伝えて、できるならば分析したらなおもしろいと思います。これは一種の人類の実験ですね。

### 英語学習のための心構え

國弘 非常に広い立場からのご発言、ありがとうございます。私もたしかに日本文化のありようというのは

「たおやめ型」であって、「ますらお」ぶりではないと思うのです。女性というのは受容型ですからね。そして受容型、たおやめぶりのもつ良さというのはたしかにありますし、日本人が「ますらおぶり」を発揮しようとしたときには、手ひどい失敗をした。戦前の大陸経営のまがまがしさは、その1例だったといえましょう。世界の警察官を目指したアメリカの挫折も、まじかにあることですし……

ところで永井先生、これは大臣としての永井文相にお訊ねするというよりは、日本で数少ない国際的に通用する有識者のお一人としての永井道雄博士にうかがいたいのですが、さきほどの講演でもご指摘のように、受容型のよさ、やさしさ、を踏まえつつも、他方ではやはり国際社会との風通しをよくしていかなければならない。そこで、日本の中高の外国語教育——とくにこの雑誌の場合には英語教育なのですが——をどう位置づけたらよいか、事実上の義務教育としての中高レベルでの英語教育の重要性といった点についてご見解をお洩らし下さいませんか。

永井 中高の子供をどうするかということですね。ぼくはもちろん英語を勉強したらいいと思っておりませんが、どうも英語だけ勉強するというのはあまり賛成でないのです。日本人に欠けているかもしれないことは、異質な文化に対する観念ですね。ぼくはつくづく思うのは、たとえば中華人民共和国、あるいはソ連邦、ヨーロッパ諸国、それからアメリカ合衆国、こういうようなところは大体において異質な文化との接触の国内研修がきくのです。別に飛行機に乗って外国へ行かないでも、ヨーロッパ諸国というのはちょっと汽車に乗ったらすぐちがう国に入れる。それからソビエトもいろいろな民族の集まりだし、アメリカもそうだし、中国は案外そうでないと思っている人がいるけれども、中国はいま少数民族53あるのです。全部寄せると5,000万人です。つまり日本の人口の半分です。

日本は国内研修がきかない。日本民族が大多数だ。日本にいる少数民族は朝鮮半島出身の人が60万人、それから中国人が3万人、あとは東京あたりへいくと西洋人とか、そのほかアフリカ出身の黒人とかいろいろいる。日本人はどうも国際関係というと、ただちに飛行機で外へ出ることを考えるけれども、ぼくは大学生にしょっちゅう言っているのは、国内研修をやったらどうかということ。たとえば一人朝鮮人と親しくなってもいいんです。あるいは中華料理食いにいったらそこで中国人と仲よくなればいい。

それから実はアフリカ出身の外交官なんか非常に困

っている。日本人が黒い人を見るとアレルギー性反応を起こして住宅事情もそのおかげで不便だ。だから東京に何年もアフリカの人があると大抵反日になるといわれる。だからアフリカ出身の外交官の家をたずねていったりすると非常にいいのです。そういうことをやろうと思えば案外近くにあるので、こういうことをやってみたらどうか。

2番目には、いま必要だと思うのは、中高あたりの学科——地理とか社会科、経済——の教え方の問題が非常にある。つまり日本人はニューヨークのこと、あるいはシャンゼリゼのことは案外よく知っている。ところがデリーがどっち向いているとか、スリランカはこの国ですかとか、そういうことをいい出すわけです。ぼくだって150の国の名前いえといわれたらいえませんよ。だけど、おおよそどこにある国はどのような文化だとか経済状況だとか、どういうふうなことに苦しんでいるとかいう見当はつくわけです。やはり日本人は文字どおり世界は世界だという方向で学習するということが大切です。

いま中等学校の英語は選択ですね。しかし事実問題99%教えてますよね。外国語は英語だけじゃなくて、フランス語もある、特に中国語なんて大事ですね。実をいうと非常に大事なのは朝鮮語ですけれども、日本に1,000も大学がありますけれども朝鮮語を教えている国立大学は大阪外大であったり、私立で天理大であるというようなことでしょう。大体朝鮮人が日本語を覚えちゃいいので、日本人なんか朝鮮語覚える必要がないという考え、この考えで英語を学習していると絶対によくなるはずがない。だからもう少し国際的平衡感覚というものをつける必要がある。

つまり、いま心がまえみたいなのをたくさんいいたけれども、そういうふうになってくると、英語を勉強しようというときだってもう少し psychological な、あるいは cultural ということになるのではないかという気がするのです。もちろん英語を書いたりしゃべったりという場合にはあまり文法まちがえないとか、ある程度単語を知っているというのは大事だと思うのですがしかしそれより大事かもしれないのは communication ということでしょう。全部文法的に合っていて気持が通じないということがあるわけですね。しかし相当まちがえても気持が通ずるということもあるわけです。

この間、吉川幸次郎先生が北京へ行って帰ってきたけれども、吉川先生はたいへん中国語のうまい人で、とにかくひさしぶりに行って大体通じた。通じたけれどもどうも語感がだめだということです。吉川先生だからああい



永井文部大臣

うことをいわれるので、それだけ吉川先生は中国語ができるのです。そういう問題があるので、さっきいった下敷をつくるとぼくは英語の教育あるいは英語の学習なんていうのは目ざましくよくなると思っております。

大体日本人ほど長い間英語を勉強している国民は世界にざらにいない。その間に何冊も何冊も本買って、英語研究して shall と will の使い方なんていう本も出る。shall と will の使い分けなんて英語国に行ったってろくに知らない。普通のイギリス人なんか聞いたってどこで shall と will と区別するか知らない。シェイクスピアの研究している人は別ですけども。しかし日本人は中学生で知っているんですね。そして高校生も知っている。そしてことばが通じない。こういうおもしろいことがなくなるのではないかと思う。だから目ざましくよくなるかもしれない。

いまたいへん評論家的な話をしたのですけれども、たとえば文部大臣がこれをどうするかというところへくるといつもハタと困るわけです。そしていままでの教え方があるのです。教科書もできているし、試験制度もあるし、それをどう変えるかという問題なんです。そこで文部大臣がウワッと騒ぐと、あれは行政的圧力ということになる。そしてやることもやらなくなる。そこで文部大臣という職業は仲人のようなもので、強制的に政略結婚させるといはいけませんね。大体相思相愛の人の恋心が芽ばえてくるのをみて、そしていまが潮時ですというようなことをいう係なんです。もどかしいことをいうようだけれども、実はそれ以上ではだめだし、また教育というものはやはりある程度もちろん政府が条件整備やらなければならないけれども、しかし最終的なことはやはりそれぞれの人が自分を変える気がなかったら変わらないのです。だからどうするか。

英語をどうやって変えるかというようなことでずいぶんいろいろな流派がいろいろなことをやっているでしょう。私は文部大臣になる前に COLDT という団体をつ

くったのですが、この COLDT や ELEC なんかでは Intensive Training なんていうやり方で、ずいぶん効果を上げている。大学でもこうした団体をもっと利用したらいいと思う。そういう組織でなくてももっと小規模でおもしろいことをやっている人がたくさんいるし、國弘さんの英語もあるし、そういうものをどういうふうにいまの学校の教科の中に入れ込みながら根気よく変えていくかという問題になってしまうのです。これがどうも王手かもしれませんね。そして現場でやっていらっしゃる先生がなるほどと思っただけで変える。大体人間は変えるのはめんどうですから、なるほどと思っただけで変えない場合が多いのです。それもよくわかるのですけれども、もっといろいろなやり方をくふうしていいのではないか。現在非常に機械を使った学習方法がありますね。これはいいかもしれない。だけどもいろいろな可能性を考えると、よく映画を見るという方法案外いいかもしれませんね。シナリオを読んで、シナリオを覚える、そして同じ映画を10回見る。action と language がつながった形で出てきますから案外いいかもしれない。そういうことをちょっとやってみたらいいだろう。

## 世界の中の日本

永井 世界にいろいろな国がありますね。いま大抵の先進工業国というのはみんな悩んでいるのです。日本人は日本人だけで悩んでいると思うのが好きですね。それは悪いことではない。日本人が悲壮な気持ちになって、かつては後進国とって苦しむ。それから公害とって苦しむ。いろいろ苦しむのが好きなんだけれども、それが日本人の受容性と関係ありますから悪いことでもないのですけれども、しかし実をいうといま大抵の国が苦しんでいる。そこには似た理由もありますね。管理社会とか、organization man とか。しかしちがう理由もあると思います。たとえばアメリカ人ですと一種の world power でしょう。その world power というものがいろいろなところで行き詰まります。これはたいへんなことで、日本なんていうのは world power になったことないけれども、しかし太平洋、アジア大陸である程度広まったことがある。そのあと戦争に負けると虚脱感で何年も苦しみました。だからそれから考えるといまのアメリカ人の frustration は察するにあまりあるものがあります。

ソ連はどうかというと、これは国際社会主義論というおりましたけれども、東欧との関係はなかなか苦しい。ヨーロッパ諸国はどうかというと、これはかつての

glorious powers ですけどもいろいろたいへんです。生産も落ちてくるしね。だから日本だけが苦しんでいるわけではないのです。むしろ日本なんかの利点をいうと、ともかくいまだに核兵器はない。そしてこの程度の economic power で、そして核兵器を持たないというのはいまでもユニークですけども、これで10年20年たつと、ちょっと世界史におもしろいことになる。

ただ問題はやはり日本という国のことを考えて先行きどうなるかなと思うのは、どのぐらい人のことがわかるかということ。西洋のことには敏感です。だけだと例えば中国で何やっているか、ベトナムはどうか、インドネシア、お隣の朝鮮のことはどうか、非常に不安です。これはこっちのことを説明しないまでも、まずわかるという問題についてはどのぐらいわかるか非常に不安だ。さらに高望みをすると、わかった上で向こうに伝えるということがあります。その辺になってくるとよけいにたいへんだ。最近カンボジア、ベトナムで起こっていることがらで、カンボジアの人、ベトナムの人がどういうふうを考えているかわからない。わからないと困るのですね。もちろんアメリカ人が考えることもわからなければいけないのですけれども、そういう意味でちょっと国際的には communication の断絶の中に孤立している感じですね。

そして日本人の behaviour というのは外国人からみるとどう感じるかということ、黙っていたやつが飛行機に乗っておりにきて、繁華街の office にいて、何か月もいて、銀行の金だけ持ってさよならしちゃう。何となく火星みたいになってきちゃうところがある。そして気味が悪い。だからこれをどう変えていくかということが非常に大事なんです。なかなか簡単に変わるわけがないけれど、ただこれはへたするとアキレスの踵にはなるのです。だからやはりそういうことを意識する人がふえなといけないとは思いますがね。

### 義務教育としての英語教育

國弘 日本がとにもかくにも世界的には経済的工業的に西欧型で、GNPも大きく、工業文化というか経済主導型のビジネス・カルチャーにどっぷりとひたっている。にもかかわらず、どうもその心底がつかめない。どういう心の動きをしているのかが垣間見られぬままに、結果としての経済行為だけがあらわに表に出てくる。だから何とも得体が知れない、という思い。全くご指摘のとおりだとおもうのです。ところで英語教育ということに話を移しますと、さきほど必ずしも英語でなくていいじゃ

ないかという趣旨のご発言があった。私それにも全く同感なんで、朝鮮語にしても現代中国語にしても大学レベルにおいてすらほとんど等閑視されているという実状、アメリカと比べてすらさらに低いという状況はこれはちょっと極端ですね。

ただここで1つ問題になるのは、最近一部の人たちの中で、いわゆる義務教育段階において外国語学習、この場合事実上は英語なんですけれども、とっぴらってもいいんじゃないかという議論が出てきている。たとえば英語にかわるに中国語をもってせよとか、あるいは朝鮮語をもってせよというような議論があるのです。ところが私の感じでは、いままでの英語教育というものが100年やってきてなおこの状態でしかないというときに、より経験の少ない、よりいろいろな意味での条件が整備されていない朝鮮語か中国語をやったらもっとむごい目に会うのではないかと。まず先生がいない。いろいろな条件もない。そこで英語教育を義務教育段階からとっぴらえという極論がもしかりにあったとした場合に、それに対してはどういうふうにお考えですか。

永井 それはぼくは賛成じゃないですね。いま選択ですけども、やはり義務教育段階に英語教育があっていると思います。ただああいういい方はショック療法的なところがあって、いままでのようなやり方をまた繰り返して shall と will をやっているという、それはいくらか正論といえる。ただ朝鮮語、中国語、これは先生なかなか得がたいのですが、義務教育で入らなければ高校で入れてくるとか、これはやはり必要と思います。だけど義務教育段階で全然外国語が姿を消すというのは感心しない。

それからもう1つ、國弘さんがぼくと似た経歴ですけども、文部省に大学などから来たら自民党の人に疎外されて、文部省の役人にも疎外されるんじゃないですかと心配される人がいる。それを非常にご親切にいわれる。自民党の人は大体自民党の線で考える。文部省はこれまで歴史がありますから、初めからぼくと意見が一致するはずがない。それでぼくが考えたのは、ぼくは大学は日本で2つなんです。それから外国の大学は教えたりなんかという形で長くいたのは6つなんです。これで8つでしょう。それから朝日新聞で9つ、今度文部省で10になる。そうすると、ぼくのほうは、たとえばコロンビア大学へ行って日本のことを教えるというときは初めから向こうの人はアメリカ人が多いですから日本についての感じ方はぼくとちがうと思って行くわけでしょう。同じだったら行く必要ないですからね。ですから感じ方のちがう人に教えるというのはあたりまえだと思ってい

る。ぼくにとっては新しい職場にくるとちがう考え方の人や、感じ方の人がいるというのはあたりまえなんです。ぼくはいろいろ偶然が作用してそういう経歴になったのですけれども、たとえば外国語の学習にそれと同じ問題があるのではないか。だからさっき日本の中で異質な文化といったときに中国人とつき合ったらいいといったけれども、日本人同士もいいのではないか。英語の学習のために、少しちがう会社の人と日本語でつき合うとかね。心理とか文化の問題ですね。これをやらないと国際性の問題は本式ではないですね。そういう意味からいって、たしかに義務教育に語学があるのもいいし、その中でみんなとちがう学校の子供なんかと少し接触するという方法もいいと思いますね。

國弘 いや長時間、どうもありがとうございました。日本の外国語教育のいわば文明論的基礎とでもいうべきものを、実に明快に指図していただき、私としても大変に得るところがありました。また、義務教育から英語をとりはずすことには賛成でない。選択だけでもやはりあってよい。というお説には多くの現場の先生方も一安心されたことと思います。ただ、瑣末主義に陥ち入らぬようにとのご忠言、もっともなことで、トリビアリズムはもうそろそろ打ち止めをせねばならない。その通り

(p. 10 からつづき)

を以てこと足れりとし、英語ではないものを英語と呼ぶ、しかも、それが堂々と学校で教えられ、入試で人材ふるい落し的手段として使われているように思います。それでいて、この国の人たちは、英語国民なら当然英語が書けると錯覚しているようです。日本に來ている英語国民のうち、学者、学生、宣教師、新聞記者等を含めて、まともな英文の書ける人は、おそらく20パーセントに満たないのではないのでしょうか。日本研究で PhD をとったアメリカ人学者ですら、翻訳者としては失格の人たちが少なくありません。しかも、その原因が、日本語の知識の不足というよりも、彼らの母国語での表現力、文章構成力の問題であることが多いのです。私どものところへ Fulbright Postdoctoral Fellow としてアメリカ人大学教授が毎年ひとり派遣されてきますが、過去6年間の実績では、人柄の上では申し分のない人たちばかりでしたけれども、中には *The Japan Interpreter* の必要とするレベルの翻訳能力に欠ける人もありました。Sussex 大学の Ronald Dore のような天才は、世界中に数えるほどしかいないのです。それだけに、日本人が一層奮起して、実力ある英語国民と協力しつつ、人

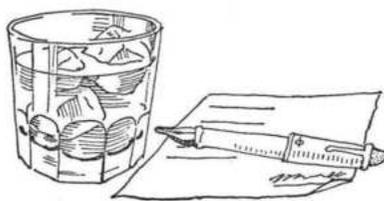
だと存じます。

いま一つ、日本人が国内でそれぞれのタコソボにとじこもって異なった sub-culture 間の意志疎通がいかにも不十分だ、というご指摘も適確なご指摘だと思います。学界、教育界、政界、財界、ジャーナリズムなどがそれぞれ己が城に固執して、人事の交流もなくいわゆる思想や気質の cross-germination (相互触媒) が足りない。国内にこんなに discommunication があるようでは、とても対外的な communication をよくするなんて及びもつかない。本当ですね。先生の例の講演でもその点を強く衝いておられましたし、私もこの雑誌にアメリカへのキャラヴァン講演旅行記を寄せた際に、同じことを書かせてもらいました。

その点、日本、アメリカ、香港、メキシコと全世界にまたがり、学界、ジャーナリズム界で一流のおしごとをなさり、いまや行政・政治の第一線におられる先生のご活躍に期待する面は大へんに大きいわけで、くれぐれもご壮健でと申し上げたいのです。あわせて日本の英語教育に関しても、こんごともよろしくご支持ごべんたつ——選挙演説みたいになって恐縮ですが——をおねがいするものです。

類の共有財産となるべき邦語文献のすぐれた翻訳を次々に生み出す努力をしなければならぬはずなのですが、残念ながら、この種の地味な事業に対する社会の認識は浅く、公的な援助も十分ではありません。また、翻訳者の方も、先述のエピソードの大学教授のように、英語の知識はあっても、肝心の思想の内容理解ができない、いわゆる「英語屋さん」が多いのではないのでしょうか。ちょうど、英会話はできるが、語るべき思想を持たない日本人が増えつつあるように。

(*The Japan Interpreter* 編集長)



# 離れてつく

KANO TSUTOMU

鹿野 力

諸外国の人々のために、現代日本の知的状況を説明し、解釈する目的で、*The Japan Interpreter: a journal of social and political ideas* と称する季刊誌を始めてから、もうかれこれ13年になります。幾度か廃刊の危機に見舞われながら、いろんな方のお力添えでなんとかここまで持ちこたえてきたのですが、この雑誌は国内よりも海外での知名度が高く、多くの日本研究者から “the best English-language journal coming out of Japan” と評価されております。もっとも、日本で出されている英文雑誌のレベルが極めて低い現状では、その中で一番いいとほめられても、手放して喜んでいるわけにはまいりません。私自身の願いは、*The Japan Interpreter* を The American Academy of Arts and Sciences の *Daedalus* のような超一流誌と肩を並べ得るものに育てていくことにあります。単に「日本」を売りものにしたり、日本から出ているという「稀少価値」によりかかることなく、その内在的価値、つまり、そこに盛られた ideas 自体の価値が国際的に認められるのでなければならぬと考えております。なぜなら、私たちの究極の目標は、日本人の学問的成果や思想的営為の所産を、全人類共通の財産目録の中に組み入れていくことにあり、その前提として、特殊な日本の発想や日本近代のユニークな体験に根ざした ideas と雖も、普遍的なものに繋がっており、従って、外国語による伝達が可能であると信ずるからであります。

*The Japan Interpreter* が海外で高い評価を得ているのは、大きく分けて2つの理由があります。一つは、その論文選択の方針が、特定の class interests や派閥を縦割りのように反映したものではなく、あくまで個々の論文のもつ内在的価値を基準とし、それぞれの視点を多少とも学問的に有意味な枠組の中で位置づけようとしている点であります。結果的には、自民党代議士の論文も、共産党支持の学者の評論も載せるのですが、それはそれぞれの党派の代表として取りあげるのでもなければ、左右のバランスをとるためでもありません。そういう static なイデオロギー的枠組によって知的状況を把えるのは、少なくとも学問的とは言えないのであって、思想をもつ

と functional なものと考え、それぞれの視点や理念のもつ有効性（現実批判の機能といってもよい）の観点から論文を選んでいくわけですね。日本の思想状況や政治・社会の現実をどうダイナミックに把握するかは、私たちが国際理解なり文化交流を推し進める上での基本的な問題点の一つなのですが、詳しく論じ始めると与えられた紙数がついてしまいますので、別の機会にゆずることにいたします。

さて、*The Japan Interpreter* が評価される第2の理由は、その英語の質であります。各号に一、二篇は外国人学者からの寄稿を掲載しますが（それも送られてきた文章をそのままの形で載せるのではなく、こちらで徹底的に edit し、場合によっては、著者に部分的な書き直しを要求したり、補足説明をさせます）、*The Japan Interpreter* の主体はあくまで既発表論文の英訳であります。もともと内向けに書かれたものを翻訳して海外に紹介するには、それなりの意味があるわけで、この日本の社会ほど、家庭・部落から会社・国家にいたるまでのさまざまなレベルにおいて、内と外との間のコミュニケーション落差の大きいところは、世界でも珍しいのではないのでしょうか。従って、日本人の内向けの発言 (in-group communication) を外に開放することは、自ずからそのギャップを埋める働きをすることになります。外から見ると、日本ないし日本人が一体なにを考えているのか、よくわからないわけです。そこで、日本人の外向けの発言よりは、むしろ what the Japanese are saying to each other を外国の知識人は知りたがっているのです。

このように、*The Japan Interpreter* は主として既発表の邦語論文の英訳を集録した雑誌ですが、私たちはその翻訳が原文の真意を正確に伝達しているのみならず、表現、文体、論旨の展開、構成等において、一篇の英語の論文としての自己完結性を具えたものでなければならぬと考えています。読者に翻訳であることを意識させないほど readable であって、しかも accurate であること、これが *The Japan Interpreter* におけるミニマムなスタンダードであり、そのために、私たちは「離れて

つく」という翻訳の大原則を徹底的に実践しております。原文にべったりの literal translation では、文法的には正しくとも、natural な英文、英語らしい文章にはなりません。日本語の言葉遣いに捉われる限り、その独特の語法 (Japanism) に影響され、読み手や聞き手に抵抗感を与えずにはおかないのです。明治以来、欧米先進諸国の学問や文学の翻訳・輸入に専念してきた日本人とは違って、欧米の読者は読みづらい translationese には決して寛容ではありません。最初のパラグラフで投げ出してしまおうのが関の山でしょう。

そこで、word-for-word translation を排し、wording ではなく meaning を英語に置き換えることが必要になります。俗にいう直訳か意訳かの図式からすれば、意識主義をとるわけですが、私たちの場合、「仮りにこの著者が a native speaker であれば、どう書くであろうか」という想定のもとに翻訳するのですから、単なる意識主義の域を超えています。まず、日本語の文章をできるだけ深くかつ具体的に理解するために、その字句に捉われることなく、さまざまに読みかえます。個々の単語や成句の字引きの知識を寄せ集めてみても、それが直ちに文そのものの理解にはならないわけで、それらが使われている文中の機能によって、つまり、特定のコンテキストの中で理解されねばなりません。また、個々の sentence にしても、その意味や重みは論文全体の中で位置づけられねばならず、従って、その sentence が著者の真意の伝達に何ら寄与していなかったり、かえってその論理的展開の妨げとなっている場合には、躊躇なく省いてしまってもよいし、他の sentences と位置を入れ替えても一向に差し支えない、と考えます。逆に、著者の真意をより正確に伝えるためには、しばしば原文には書かれていないことを付け加える必要もあります。さらに、日本語の論文の場合、個々のパラグラフをとってみても、specific な事柄から general な statement へ進むことが多いのですが、翻訳では、そのパラグラフの一番重要なポイントをまず前面に出した上で、その statement の具体的な肉づけをする、あるいは、それを qualify するという展開の仕方に変えてしまいます。

こういう風には書くと、ずいぶん乱暴な翻訳をやっているように聞こえるかも知れません。“Translator is traitor” (反訳者は反逆者なり) というイタリアの格言があるそうですが、これぞまさに traitor ではないか、*The Japan Interpreter* ならぬ *The Japan Traitor* ではないかとお叱りを受けそうです。かつて、ある著名な思想家の文章を翻訳して校閲をお願いしたところ、その思想家の教え子で、中学、高校の英語教科書の著者として名を列

ねておられる大学教授が著者にかわって校閲を引き受けられ、私どもの英訳を全面的に書き直して送り返してこられたことがありました。それを見ると、原文の一字一句を忠実に訳出してあり、さすがに文法上の間違いはあまりありませんでしたが、私どものスタッフの native speakers of English が読んで、ほとんど意味が通じませんでした。この先生の場合、その英語力は抜群なのでしょうが、論文の意味内容をほとんど理解できなかったのではないかと思います。そうとしか考えようのない翻訳でした。結局、著者の諒解を得て、私どもの訳文を全面的に掲載したのですが、私は、「(原文に) 忠ならんと欲せば、(反訳者は) 反逆者たらざるを得ず」と考えるものです。「離れてつく」とは、まさにこのことを言ったものであります。

翻訳のあり方を、いくら抽象的に論じても you get nowhere に終わることは経験の教えるところですので、以下に具体例を挙げて、大方の批判を仰ぎたいと思います。

例文 1 これはある著名な宗教指導者が最近ニューヨークで行なったスピーチの中の一節で、(A) が *Kenkyusha's New Japanese-English Dictionary* に従って逐語的に訳したもの、(B) が私どもの訳で、実際のスピーチに使われたものです。

「20世紀後半の人類がもたなければならない価値観とは、単に一つの社会、国家に基盤を置いた狭隘なものではなく、全人類的な視点、全地球的な視野に立ったものでなければならない」

- (A) The sense of value that mankind must have during the latter half of the twentieth century must not be so narrow as to be based simply on one society or state, but must be based on the viewpoint of the whole human race, that is, on a global vision.
- (B) In the remaining twenty-five years of this century we must discard the narrow values of a single nation-state or society. We must reach instead for values that are universal in perspective and global in scope.

読者諸賢には、どちらの文章が英語らしいか、どちらが原文の真意を正確に伝えているか、お判りいただけると信じます。詳しい説明は省きますが、この文章では、単に狭隘であってはならないとか、どういう視点に立っていなければならないといった「状態」の形容が意図されているのではなく、発言者が自分自身をも含めた人類に反省と決意を呼びかけるという明確な主体と、一つの

積極的な行動原理の表明となるように表現すべきだと考えて、(B)のように訳したことを付け加えておきます。

例文 2 昭和46年3月13日付朝日新聞「天声人語」の一節です。(A)は翌々日に *Asahi Evening News* に訳載されたもの。(B)は鹿野訳です。

『社会部(記者)には特有の社会部的発想があって、理性より情緒、思考より感覚が先行し、挑発的、断定的な傾向がある』そうだ。だから、社会部記者に会うときは十分注意すること、と続く。

通産省が作った『広報雑記帳』からの引用である。実践的マスコミ操縦術で、新聞の読み方、夜間取材にくる記者の撃退法など詳しい。官庁街のベストセラーになり、海賊版まで現われたという……

(A) It is reported that in the “city desk (reporter) there is a peculiar social conception so that emotion takes precedence over reason and feeling over thinking, and there is a provocative and decisive trend.” This is why it is necessary to be very careful when meeting reporters from the city desk.

The above is a quote from the “Public Information Notebook” produced by the Ministry of International Trade and Industry (MITI). It is a practical manual on how to deal with mass communication media, and it describes in detail how to read newspapers and how to chase away reporters who come for interviews at night. It is reported to be a best-seller in Government offices, and that even a pirated edition has appeared.

(B) “City editors and reporters have their own approach to reporting; unlike their colleagues in other departments, they tend to be more emotional than rational and they prefer sensationalism to thoughtful journalism. Their style is all too often provocative and their judgment, self-righteous and one-sided.” This passage is quoted from *Public Information: Do's and Don'ts*, a handbook in Japanese compiled by the Ministry of International Trade and Industry (MITI). The author of the manual warns his readers—apparently government officials who deal with the media—to be extra cautious about what they tell a reporter on the city desk.

To its intended audience, the MITI handbook should be as instructive as it is informative. It provides guidance on how to interpret and

evaluate newspaper reporting and gives careful instruction on how to graciously avoid or get rid of reporters who “drop in” on the official at home on one of those night rounds. The rumor is probably true that the book is being widely read by officials, and that even a pirate edition is now in circulation.

(A)の AEN 訳は『英和対照「天声人語」第14集』(昭和46年、原書房刊)に転載されていますが、同書の「はしがき」には、「(AEN 訳が)単に原文の意味を伝えるだけでなく、格調高い英文で」しかも、「英語の教材として使っている大学も少なくない」とあります。しかしながら、少なくともここに掲げた訳文に関する限り、格調云以前の、お義理にも英文とは呼べないしろもので、こんなものを教材に選ぶ教師の見識を疑わずにはおれません。もっとも、これを英作文の「反面教師」として扱うとか、あるいは、国語の教材として使うのであれば、私はむしろ双手をあげて賛成いたします。

(B)の拙訳も決して完璧なものではありません。これが *The Japan Interpreter* の記事であれば、この上さらに editing の専門家(アメリカ人)が polish してくれることでしょう。しかし、このままでも意味は明確に通じますし、少なくとも磨くに値するだけの英語らしい文章になっていると思うのですが、いかがでしょうか。

ここに挙げた2つの例文は、いずれも内容的には理解の容易なものです。これが丸山真男、竹内好といった戦後の代表的思想家の極めて奥行きのある文章になると、こう簡単にはまいりません。私など、持てる「知性と教養」のすべてを動員しても、自らの理解の未だ及ばざることを心の中で詫言ながら翻訳することが、しばしばあります。著者の真意などにお構いなく、直訳して涼しい顔をしておられるものなら、何の苦勞もないのですが。

私がこの小論で指摘したことは、日本語を外国語に訳す場合に限らず、外国語文献の和訳についても、当然あてはまります。例えば、Paul Valéry 作 *M. Teste* の小林秀雄訳(「テスト氏」)は、フランス語の先生方から見れば誤訳だらけだそうですが、一方では、これ程の名訳はないと言われます。それは、小林秀雄という偉大な知性が Valéry の精神を深部において理解し、その内容をすぐれた日本語に表現し得たからにはほかなりません。矛盾に満ちた日本近代にとって数少ない救いの一つは、こうした第一級の知性が欧文文献の翻訳や解釈の勞をとってくれたことであります。ところが、不幸にして、その逆は必ずしも真ではないようであります。

この国では、縦に書かれたものを横にただけの翻訳  
(p.7 へつづく)

## オーストラリア、 パプア・ニューギニアを旅して

NAKANO MICHIO

中野道雄

春休みを利用して、オーストラリアとパプア・ニューギニア（以下PNG）を旅行した。収穫の多い楽しい旅であった。しかし帰国するとあわただしい新学期が待っていて、集めた資料もまだ整理していないが、旅行中に記したフィールド・ノートから、communication（以下com.）ということについて感じたことを、書き写してみよう。

### 南太平洋のネットワーク

シドニーのホテルについて、ポーターの案内で乗ったリフトの中で、ボタンに“OPEN DOORS”と書いてあるのが目についた。ドアはひとつしかないのに、複数形とはこれいかに、と英語教師の悪いくせで考えている内に、ある階について、うしろの壁と思っていたのが、さっと開いて、ボーイがルーム・サービスの料理を持って乗ってきた。つまりこのリフトは、奥の壁にあたるところが開くようになっていて、調理場に通じる階にくると従業員が用いるのであるらしい。

さて、このボーイに、ポーターが「おや、君は新入りだな。どこから来たの?」とたずねた。ボーイが「Baliから」と答えたのを聞いて、なるほど南半球に来たわい、と感じたものである。この第一印象は、その後なんども確かめられた。日本人かなと思って話しかけると、マレーシアやフィリピンの人であったり、オーストラリア人と思っていた人が南アフリカ共和国の人であったりした。南阿などという国は、日本から見ると、アフリカの果てにあって、オーストラリアとはカテゴリーが違うが、この両国どおしでは、地理的にも近く、つながりがあるのだろう。

そして、これらの国を結びつけているのが英語である。われわれにとって英語とは、イギリスやアメリカの英語であって、このように南半球にはりめぐらされた英語のネットワークは視野に入っていない。しかし、それは視野のせまい英語教師の世界でのことであって、日本は、これらの国々、特にオーストラリアとPNGとは、強く結ばれている。東京とシドニーを直航便9時間35分

で結ぶカンタスの機上には、日本のビジネスマンが沢山乗っていて、早速名刺を交換している光景が見られる。PNGのホテルでも、宿泊客の半分が日本人ということがたびたびあった。この両国の対日感情も良好で、オーストラリア人は日本人をこれからの大切なパートナーと考えているし、日本についての知識も相当なもので、たとえば「どこから来ましたか」と問われたときは、“From Japan.”というだけでは充分でなく、日本人だということははじめからわかっているのだから、日本のどこからということに答えなければならぬ。PNGでも対日感情はすこぶるよく、日本人とわかれば“Pren!”(Friend)とって握手され、ビールやコーラをおごってくれるほどであった。

### 英語が通じるときと通じないとき

オーストラリアに行くというと、同僚の英人や米人から「あそこの英語は私たちにもわからないくらいだから、君は苦労しますよ」とおどかさされた。オーストラリア英語の特徴として today が to die のように発音される、などということがよくいわれる。たしかに、この特徴は、オーストラリアに着くとすぐ耳に入ってくる。しかし、このことが com. を邪魔するということはほとんどない。買い物をして [aiti sents] といわれたものを [eiti sents] と転換して聞くのは、まったく容易なことである。この音の違いで、誤解したり苦労したりしたというのは作り話であろう。

私の場合、旅行の主目的であるオーストラリアおよびPNGの研究者との交流において、それから一般の人でも、落ち着いて話しこんだ場合は、com. は十二分に成立したとまず記しておこう。しかし、ホテルのボーイとか、店の売り子とかいった人の簡単なことばがわからなくて「えっ?」と聞き返すことはときどきあった。しかし、そんなことは、前にイギリスに行ったときにもあったことで、別にオーストラリアだからというわけではない。これは私が、その土地での言語生活になれていなかったからだと思う。

あるとき、ホテルにいたとき、私が便を予約していた TAA というオーストラリアの航空会社から電話があった。何やらペラペラと喋ってきたが、私にはわからなかった。“Pardon?” と聞きかえすと、今度は cancel, endorse, Ansett という 3 個の単語がキャッチできた。それで意味がわかった。TAA の便は cancel されたので、裏書きをするので Ansett (もうひとつの航空会社) に行き予約をし、その便で飛んでくれ、という意味である。この場合、飛行機を利用するときのそういうしくみ、そして重要な上記の単語を知っているということが、com. が成立する条件となっている。

学校文法では、たとえば、群島の名前には定冠詞がつくとかつかないとかを教えることがあるが、飛行機の機長が「ただいま、フィリピン群島の上空を飛んでいます」と英語でいったとき、それを理解するには、定冠詞の有無ではなく、Philippine という語そのものを知っているかどうかが決手となるだろう。われわれは、com. における語彙のはたす役割をもっと認識し、固有名詞をふくめて、語彙をもっと豊富に与える教授法を考えるべきであると思う。

#### ピジン・イングリッシュ

PNG に行く、というとき「あのヒトクイ・ジンシの国ですか」とあきれられた。これはオーストラリア人でも同じで、「3 年前に head hunting がありましたよ」と新聞の切り抜きを見せてくれる親切な人もいた。しかし、私には、住民がこれほど純朴で、治安がよく、親日的である国は、めったにないのではないかと思われた。(もっとも、観光客に接する人たちの中に多少の例外はある。)

あるとき、3 人のアメリカの婦人と私でハイヤーをやって観光にでかけたことがあった。運転手のジョンさんは、ハダシだが、英語が話せる。3 人のアメリカ婦人が、いれかわりたちかわり浴びせる質問を快調に受け答える能力は、私などの遠くおよばないところ。彼がたった一度わからなかった単語は、Peace Corps であった。

その彼に、私が、ピジンは話せるかと聞くと、“Of course. We are Pidgin people!” と答えた。“Just as you can speak Japanese.” と言いたかったのかもしれない。そこで私が、娘の写真を取りだして、“Em i liklik pikinini meri bilong mi.” (This is my little daughter.) とピジンで話しかけると、私の「ピキニーニ」という西洋語ふうの抑揚を、「ピキニニ」とテンポの速い、フラットな抑揚に訂正してくれた。それは、しかし、まちがっているから教えてあげよう、という意図的な行為でな

く、自分たちの自然な発音と違うので、思わず正しい発音が口について出たというかんじであった。

この通称ピジンは、PNG での圧倒的に有力な共通語である。旅行案内書などには、「英語と現地語がまじってできたカタコト英語。だれでも 3 日もあれば覚えられる」などと書いてあるが、もちろんこれはでたらめ。言語学で定義された術語でいえば、pidgin というより creole であるが、むしろそのどちらでもない興味深い言語である。ある専門家のレポートによれば、53 万人の話し手、1 万人の native speaker がいるということだが、私の、短い旅ではあるが、現地でえた印象では、この数はもっと多いという気がする。

PNG に入国するとすぐ耳に入ってくるのがピジンである。タクシーの運転手の無線で交わす会話、ホテルの従業員どうしの会話、訪れた家庭での家族どうしの会話、とにかく、都市部での現地人どうしの会話では、圧倒的にピジンが多い。その文法構造的安定度、発話のスピード・流暢さは、とても「カタコト」とか「3 日で覚えられる」といったものではないことはもちろん、相当数の native speaker の存在に支えられたものであると感じさせられる。

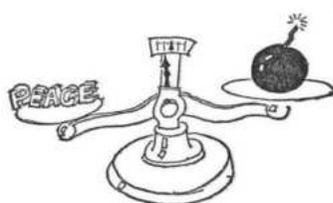
ピジンに wantok という語がある。「ことばを同じくするもの」という意味である。PNG には数百の異なる言語がある。そのような言語状況の中で PNG は本年中に独立を迎えようとしている。今、PNG にとってもっとも必要なもののひとつは、国民をひとつに結びつける、だれでもが話せるひとつの言語である。その意味で wantok という語は象徴的な合いことばとなっている。PNG にとっての wantok はピジン、英語、最有力部族語の Motu 語のいずれであるのか。この問題については、かつて論議がかわされたが、Cornell 大学の Robert A. Hall 教授をはじめとして言語学者は、ピジンは PNG の国語として充分ふさわしい言語であり、また事実そうなるであろうと主張した。

現在ピジンは、新聞、文学作品、標準書記法を有して、vernacular の域をこえつつある。また PNG の国会で、もっとも優勢な使用語である。

PNG と日本の関係は順調に深まりつつある。ピジンの習得は、英語にくらべて、容易であることは事実であるが、われわれは 3 日より少し多くの日数をかけて、「カタコト・ピジン」でなく「スタンダード・ピジン」をマスターする必要がある。

(神戸市外国語大学助教授)

## 対談 英語教育への直言



### 現代的課題は何か？

鈴木 英語教育の現状を分析し、あわせて将来に関する見通しと提案を示したいと思いますが、いままで平泉先生はじめいろいろの方が、この問題に関して発言されていて、その際実用主義、実用英語という表現が用いられそれに対して教養としての英語というようなことばが対比されている。そこでこれからの英語は実用を目的とするべきか、それとも教養を主とすべきかというような論争になるわけですね。私はそういった議論を有効なものにするためには、ちょっと遠回りのようだけれども、もう少し戻って、議論の前提の予備知識みたいなものを整理する必要があると思います。そこで私は日本における英語教育の問題を考えるための、4つの点を指摘したいと思います。

第1番目には、日本という国の国内の状態、ようすが非常に変わって来ている。それをはっきり認識しなければいけない。明治以後、大正、昭和にかけて日本は欧米先進国の文明を必死になって吸収した。そのプロセスは一言でいえばものを受け入れる受容型の姿勢であるということだと思います。ところが1950年を境として日本が飛躍的に経済的に take off した。そしてGNPが世界第3位という1970年代の現在に至っている。日本はもう技術的に吸収するものはほとんど吸収してしまった。ものによっては輸出もできる。輸入だけしている場合は、日本の立場や考えを積極的に外の世界に伝える必要はあまりない。だが今度は輸出もするということになる。向こうの都合、こちらの都合というような相互のいろいろな問題を考えなければいけない。つまり交流型の時代が到来した。これが1つですね。

第2番目は、第1番目と密接に関係がありますけれども、日本の教育が量と質の両面で大きく変化したことです。戦前の教育は少数精鋭主義、大学、高校の数は数えるほどしかなかったし、中学でさえ一部の人しか行かなかった。それが現在においては高等学校でさえ90%の就

平泉 渉 (参議院議員)

鈴木 孝夫 (慶応義塾大学教授)

学率で、ほとんど義務教育です。そして大学は3人に1人というふうな大衆一般教育時代に入っている。だから当然頭の悪い人もいい人も大学に来る。大学に対する要求、期待も多様化している。これが質の問題。

第3番目は、国際情勢、世界情勢が昔とすっかり変わってしまった。戦前の世界は欧州を中心として動いていた。つまり英独仏中心の外交であり、政治であり、軍事であった。日本は地理的な特殊性から対ロシア、対シナという問題をそこに付け加えたわけですけれども、しかし欧州中心の力関係からは抜けられなかった。ところが現在は「国連中心主義」なんていうスローガンで象徴されるように明らかに多極化である。日本が直接交渉を持つ国は単にイギリス、フランス、ドイツというような国だけではなくて、アメリカ、ソ連、中国は勿論、インドネシアもマレーも韓国もアラビアもというふうに変わってきた。

第4番目に、英語という当面のわれわれの主題であり、目標である言語それ自身がこれまで述べたような問題との関連で変わってきた。戦前の英語は英国を主とし、米国を従とする、そういう特殊な国の国語であった。ですから私たちが英語を勉強するということは、七つの海を支配する大英帝国の文明、軍事技術、政治技術、文化、そういうものを学ぶということと表裏一体だから英語とは何かを反省する必要もなかった。それに日本の場合には1925年から30年にかけてアメリカがどんどん比重を増してきた。これも英語国ですね。そういうことで、戦前において英語といえば、英国及び米国をセットとした2つの国の言語という受け止め方でよかったわけです。ところが現在の変化した国際社会において英語とは何かというと、それは好むと好まざるとを問わず、lingua franca 世界の共通補助語として一種の universal な言語であることを認めないわけにはゆかない。戦前の英語すなわち英国そして米国の国語という意識で育った現在の英語の先生だけに英語の問題、日本における、これからの英語教育というものをまかせておいてよいものかという問題が当然出て来るわけです。

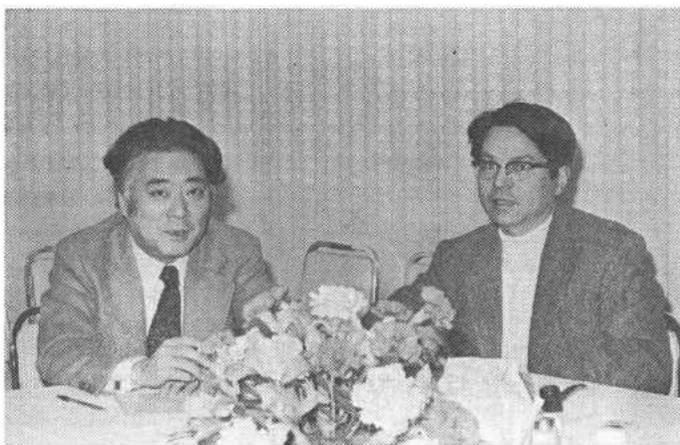
この4つの問題をある程度歴史的客観的な事実としてお互いに共通の常識として認め合った上でないと、さて日本における現在の英語教育の目的は何であるか、将来どうなるかという評価なり見通しが立てにくいのではないか。ところが私の見るところではこの種の議論は実は英語の先生が一番弱いところなんです。ただ何でもかんでも英語は必要だとか、英語教育は日本においていままですら充分役に立って来たといった散発的で防禦的な議論に終始するくらいがあった。非常に簡単にいえば、戦前と戦後とは英語というものに対してわれわれはちがう態度で臨む必要があるということです。

たしかに受信国家であった場合にはしゃべれる人がなくなると、あれだけの文献を日本人が読みこなし、この経済大国をつくる基礎をつちかっただという意味では私も戦前のいわゆる高等学校を中心とする読解主義は十分効果があったと思います。ただそれがこれからの開放型、交流型、発信型国家の日本にとってそのまま踏襲されていい方法かどうか、そこをきょうはお話したいと思うのです。

## 国民教育と外国語

平泉 いまお話しの内容非常に賛成のことが多いのですが、戦前という問題はまたそれぞれに分けなければいけない。読解主義でもいいからとにかく読みこませるようにはしなければいけないというのが私にいわせれば大体明治前半です。たとえば正則英語学校と変則英語学校というのがありました。正則というのは発音からちゃんと教える。変則は発音はどうでもいいので、とにかく内容が読めればいいのだ、こういうのがあった。一刻も早く専門的なことについて、その中の必要な術語をバツバツと読んでとにかく内容の見当だけつかんで現実に船が動かせばいいという、いわゆる日本人が必要とする部分だけ取り出してしまうということです。そういう時代の場合の語学という問題があります。それからその次には技術的なものをこえて文学あるいは文化的なもの『ローマ帝国衰亡史』とかを読まなければならないということになれば、これはその中のエッセンスだけというわけにいかないからちゃんと読まなければならない。

こういう段階までは教育される人の数もかなり少なく、すでに漢学は5歳のときからという江戸時代のエリートの世界というものの延長になってきている。き



平泉 渉先生（左）、鈴木孝夫先生（右）

わめて限られた人物で、しかも向学の念に燃えた人が学んだ英語であって、それはいわば漢学にかわる洋学であり、蘭学にかわる英学であるという、英学時代ですね。これもはや明治後期になるとだんだんにちがってきた。もう昭和に入ってからの高等学校あるいは大学の人たちの語学力はあれだけ外国語やったわりには実は伸びていない。

たとえば私の行っていた東大の法学部の教授は、たとえば国際法のこの問題についてはケルゼンのどういう本があるということを黒板に書かれるけれども、図書館に行くと原書を引っぱり出して読むなんていう語学力は大部分の学生にはない。少なくとも法学部へ行く人にはもはや原則として原書は必要ない。日本語で足りてきたわけです。日本語だけでも民法学なんてたいへんですからね。もはや明治の末年から大正、昭和にかけてのわが国の語学教育の実体というのは非常に変わってきている。

そこで問題なのは、ではその場合の語学教育というのは、何だったんだということになります。それは装飾的な element が強いと思うのです。たまたま比較的に経済力があるということによって、あるいはそのときの社会の何らかの援助システムによって高等教育を受ける恵まれた selected few の立場に立った人たちが明治の伝統の形式だけをつづけてきたのにすぎなかったのではないか。高等学校の学生といえば、破れた帽子とレクラム版の本を持っている。しかし読めるのかといったら全然読めない。それで実際は岩波文庫の赤帯を読み始める。原書を読めるのだったらレクラム版を読んでいけばいいわけです。大正・昭和の翻訳文化全盛時代というのは、翻訳をするごく少数の人はいるし、外国文化に対す

る一般の関心は高まったが、しかも、大部分の人は語学ができないということを証明しているのです。

鈴木 私は非常に大ざっぱにということを上申しあげましたけれども、たしかに詳しくみれば明治初年のボアソナードが来てフランス語の法律を日本語で発布するという時代の切実さというのは大正に入ったらずない。明治の後半になり、日露戦争時代だったら学問の分野によるでしょうけれども、もう自給自足が始まっている。それはお雇い外国人の増減をみても、間に合ったものからどんどんお雇い外国人——俸給が当時のお金で500円とか1000円の月給ですね——をどんどん切っているということからみても一丁あがり主義で、すんだものは切っているわけです。最後まで切れないのは英文学、仏文学というもので、向こうの国の人でなければ永遠にハンディキャップの残る語学は依然として現在も細々と外人を使っているわけでしょう。それ以外の外人教師のいるコースってないんじゃないですか。

### 語学力の低落下傾向

平泉 その中で非常に心配なのは、語学力の絶対的低下です。この問題を squarely にみなければいけない。明治の前半の人はとにかく変則だろうがとにかく読みぬこうとした。後半になってだんだん装飾的なものになってきた。みんなが語学をやると称して実際はだれもやらなくなってきて、全く形だけになってくるとほんとうはだれも読んでない。読んでいる人はむしろ明治の前半に比べれば数の割合においては大きく減ってくる。高等教育を受ける人の数が飛躍的にふえるに従って語学のできる人の割合が減ってくるということを放置しておいていいのかというのが私の試案の一つの大きな眼目です。

もう一つの眼目は、それではほとんど全員に及ぶようになった中等・高等教育というのはどういう体系になるか。私はほんとうにやりたい人は自分がやりたいものやっつけていける体制をつくっていかなければ高等教育はますます形骸化していく。かっこうだけは何かも教えていますというが、実は内部はがらんどろだという形骸状況を示している。これが語学だけじゃなしに全部に及んだときはわが国の国民教育の体系というのは崩壊してしまう。いわゆる西ヨーロッパ及びアメリカで行なわれたラテン語、ギリシア語教育の問題ですね。まだ私の知っている時分のフランスですらラテン語は国民必修の状態だったわけです。現在はちがいます。膨大な時間、数をかけて、大体私の世代のフランス人はラテン語をやらされたのです。そういう中で、ラテン語をやらなければ

フランス語は理解できない、正しいフランス語というのはラテン語をやらなければならないと称して、現実にはだれもラテン語ができないというギャップができてきた。これと似ているのですね。結局ラテン語の先生方の膨大な大軍は表面的には正しい proposal をしながらそれが現実でないという問題なんです。英語のできる人が世の中にたくさんあることは非常に望ましいことであるけれども、それが現実にはできないことであるならば、せめてすべての人に求めて何もかも得られないよりは、現実にはできる人をとにかく確保し、その人たちの数をできる限りその中でふやしていきたいということを主張したい。いまいったラテン語、ギリシア語については実に長い論争がフランス、イギリス、ドイツ、イタリア、スペイン、アメリカで行なわれてきたのです。

日本における英語はまさにそういう問題になりかけてきているのではないか。しかも英語の場合はラテン語とはちがってほんとうにできる人がいなくなったらたいへんです。

鈴木 私もそう思います。ですから私も先生と同じことを私の本\*の中で書きました。病人か健康人かの見解なく、必要の度合いもきめないでただ総合ビタミン剤を毎日みんなに飲ませているのだから効果が上がっている筈だと信じているようなもので、そこにどれだけの無駄があり、害があるか。やはり必要な人を見きわめて、その人に合った手段で英語というものを使えるところまでもっていく。活用というときすぐ会話ですかとくのが大まちがいで、向こうで出た文献をバツと日本語と同じ早さで読みこなして内容を日本語にするとか、そういうことも含めているわけです。ですから私は実用ということばを最後の最後まで出したいくないのは、どうも実用、活用というとき会話のイメージで話がそれていく。役に立つと言うよりも身につく英語ですね。実学としての英語、それに対していまの日本は実用は完全にあきらめて教養主義にたてこもっちゃった。教養主義なら教養主義で実利が上がっていればいいけれども、それも上がっていないんじゃないかとちょっと残酷だけれども私の追い討ちはそこまでいくわけです。

平泉 そのためにもやはり何とかしてここで、極端に言えば明治の後半から始まっている語学教育の形骸化、これを改めないといけな。やはり学問というのはほんとうに努力して身につけているものである。身につけていない人はおれは身につけてないのだということをはっきり自覚しているということが大事です。そのかわりお

\* 鈴木孝夫『閉ざされた言語・日本語の世界』（新潮社）

これは別のものをやるという自覚も生まれてくるわけですから、その辺のところをこの際日本は、はっきりふんぎりをつけなければいけない。

## 外国語の重さ

平泉 私の試案が出てからELECでアンケートをとられた。私あれを見て非常に心配なのは、英語を教えることを専門にしていなくて概して賛成、英語を教えている方が概して反対なんです。これはほんとうは逆でなければいけない。ほんとうは英語を専門にしている方方こそこういう教育の問題をほんとうに感じていただきたいと思うのです。ところが私の議論は user side だけの議論で、教育の現場というものの苦勞を知ってないじゃないかというふうなことを言われる。これは私自身からいうと非常に不本意なんで、そうではなくて、こんなに学生ができなくていいのかという疑問をまず先生が出していただきたいという感じがするのです。

鈴木 そうですね。英語というのはそんなになまやさしい、だれでもできるものではないんだという一種の自分の専門としての職業に対するプライドとか自負、こわさというものを一番知っている人は英語の先生であるということが望ましいので、それが英語の先生の英語に対する認識が甘いから、おれも間に合っているのだからみんなも同じぐらいの知力があれば間に合うと思うのはさかさまじゃないかと思うのです。特別に努力したか、英語が好きで好きでたまらない人だけが英語の先生になっているので、大多数の学生は脱落しているのですよ。

平泉 私はいままでアンケートも見せて頂き、また、個人的に手紙をずいぶんいただきました。その中に、君は英語はいかんというけれども、英語がいかなのならばほかの科目だってみんないかん、全部やめたらどうか、こういうのがあるのです。こうなるとまさに感情論で、まず第1に重要なことは、どうしてそんな感情論が起こるのか。おれをつぶすなら数学もつぶせというような議論が起こってくる。その深い原因は何か、それはひょっとすると私の議論が非常に的を射ているとお思っているからではないかという感じがする。それから、ではほんとうの議論として、数学や社会科や歴史とどこがちがうのか、これはやはり掘り下げたいと思うのです。私は語学というものは何をかいても初めは技術だと思

のです。まず語学を覚えるということは膨大な量の記憶と戦うことである。その意味では語学というのは中途半端な知識は不必要だ。不必要であるのみならず waste of time and energy である。

だから語学はやる以上はどんなこととしてでもある一定の程度までは到達しなければ意味がない。それに対して数学というのはどの程度までやってもそれなりに役に立つ。それから社会科の知識は piecemeal な知識としてでも役に立つ。語学というのは私はドイツ語の単語を100は知っていますといっても全然意味がない。

鈴木 そうですね。語学というのは本質的にはある目に見えない線を越すか越さないかで決定的にちがう。つまりその目に見えない線を越さないうちにやめた語学というのは一般的にいうとやらないのと同じになってしまう。その線を越すと5年10年やらなくてもある程度 brush up するとまた相当復元してくる。例えば自転車とか水泳と非常に似ている面があると思うのです。つまりある線を越すまでやらなければ語学教育というのはいつか役に立つかもしれないための予備軍養成としてできても意味がない。そのためには非常に短期間にその線を越すところまでクイ打ちのように深いところまで達しておかなければいけない。それを浅く10年間、20年間やった。極端にいうとNHKのロシア語入門講座を10年間ずっと聞いてますという人がいて、そういう人がNHKに投書して、今度の先生はいいとか悪いとか、実はそういうことは全く意味がない。ただ長く外国語に接しているだけではだめなんです。接し方と程度を問題にしなれば。

だから100人の学生がいて100人が語学をとりたいたいといっても果たしてその100人の学生のなぜしたいのかという理由とか、それに耐えられるだろうかとか、いろいろな意味でむしろ先生のほうが discourage して少数を残すことが望ましいのに、おだててみんなに必要なだといって全部にやらして、そのあげくいまの学生はレベルが低いから本も読めないという泣き事を今度は先生がお



平泉 渉先生

『英語展望』No. 49 在庫僅少 480円

特集：英語教育の現状と改革の方向 (2) パネル・ディスカッション：國弘・平泉・小笠原・山岡・田村



鈴木孝夫先生

しゃるとい  
は実に理解  
できないの  
です。おれ  
のやること  
はそんなじ  
よそこらの  
頭じゃでき  
ないんだ、  
なまじっか  
な決心では  
できないの  
だから、そ  
ういう決心  
のあるやつ  
だけついて  
こいと、つ  
まりオリ  
ンピックで「  
お

れについて  
こい」とい  
うのがあり  
ましたけれ  
ども、あの  
ような発想  
が語学教育  
に一番必要  
なのではな  
いか。けが  
したり足折  
ったり、実  
際語学の発  
音を一生懸  
命練習する  
と、たとえ  
ばフランス  
語のRのの  
どから出す  
発音なんか  
やると血が  
出ますね。それでもやり  
たいのだというやつ  
がやればそれでもいい  
のではないですかね。

平泉 私の提案  
の中で中学校  
で英語をやる  
場合に程度  
を下げて、中  
学1年程度を  
3年間でやる  
というのが  
ありまして、  
それにかん  
り反論がある  
のです。いま  
でも中学は  
選択科目す  
ね。ほんとう  
はやらなくて  
いいのだけ  
れども高等  
学校で試験  
があるから  
やる。私は基  
本的には選  
択をうんと  
強化しなさい  
ということを  
ただいって  
いるだけな  
んですけれ  
ども、もの  
すごい反対  
論があるの  
は、選択  
ということ  
をほんとう  
はみとめて  
ないわけ  
です。

### 総英語教育の神話

鈴木 中学1年  
で目標にし  
ていること  
が現実にほん  
とうにそこ  
までみんな  
がいけばす  
ね。けれど  
日本人の1  
億がそこま  
でいく必要  
もなければ  
、いってほ  
困るのでは  
ないのです  
か、逆に、  
1億人がほ  
かの外国語  
をしないで  
、英語をや  
られちゃ困  
るんだし、  
また国民全  
部に何か外  
国語一つは  
やってほし  
いと望んで  
いる国なん  
かどこもな  
い。非常に  
象徴的な例  
を申します  
と、フランス  
で日本研究  
がいまわり  
あい盛んな  
んです。わ  
りあい盛ん  
というけれ  
ども何人ぐ  
らいやって  
いる人いま  
すかといた  
ら、毎年20  
~30人であ  
ろう、それ  
以上多かつ  
たらフランス  
では需要な  
いし、フラン  
スという国  
と日本の関  
係は20~3  
0人で十分  
なんだとい  
うことをあ  
るフランス  
の学者がい  
ってました  
けれど、や  
はりそれが  
現実であろ  
う。フラン  
ス人が全部  
中学1年程  
度の日本語  
をやらなけ  
ればいけ

ないなんて  
考えませぬ  
ね。第一ど  
この国でも  
相手にする  
国が世界の  
何十か国で  
すから困っ  
ちゃうわけ  
です。なぜ  
日本だけが  
英語だけは  
国民全部が  
知らなければ  
いけない  
と思込ん  
でいるのか  
。その辺を  
じっくり私  
は英語の先  
生と話して  
みたい。こ  
の前提がま  
ちがって  
いるのでは  
ないか。私  
は外国語を  
全然知らない  
日本人がい  
てなぜ悪い  
のだ。事実  
どこの国  
でも国民の  
大多数が外  
国語のがの  
字さえ知ら  
ないし、自  
国語さえも  
満足にでき  
ないのをた  
くさんかか  
えている。外  
国のことを  
よく知って  
いる人間は  
どこの国、  
どの時代  
でも常に少  
数であり、  
それでいい  
のじゃない  
かと思う。日本人は  
むしろ日本  
のこと、自  
分の言語  
にもっと眼  
を向けるべ  
きです。

平泉 いまは  
とにかく中  
学3年の程  
度まで教  
える。程度  
が高いか低  
いかという  
問題はやる  
人の学習意  
欲との関係  
にある。や  
りたい人  
にとっては  
こんなもの  
なんてやさ  
しいのだら  
うと思うだ  
らうし、や  
りたくない  
と思うと、  
なんでこん  
なばかなも  
のを習うか  
ということ  
になるので  
これは一概  
にいいきれ  
ない問題だ  
。それを日  
本の場合  
では英語を  
強制してい  
るからこれ  
はやはり程  
度が高いの  
ではないか  
。もう一つ  
の問題とし  
て、中学で  
はとにかく  
世界の言語  
と文化の常  
識みたいな  
ことを是非  
とも教えて  
欲しいと思  
うわけす  
ね。

鈴木 実はその  
話で実用か  
教養かとい  
う今まで避  
けていた問  
題がだんだ  
ん出てきた  
と思うので  
す。われわ  
れが学校の  
英語は実際  
に役に立た  
ないのでは  
ないかとい  
う議論を進  
めると、あ  
れは教養な  
んだ。つま  
り異なった  
文明とか文  
化とか、ち  
がった国の  
人のものの  
考え方を知  
るという意  
味で、実際  
英語をやっ  
たからとい  
ってイギリ  
ス人、アメ  
リカ人に会  
って話がで  
きできない  
とは関係な  
いんだとい  
う議論が最  
近とみに盛  
んですね。私  
は教養主義  
で語学をや  
るのならも  
っとやりよ  
うがある。つ  
まり中途半  
端だから教  
養としても  
なっていない  
と言うので  
す。ここに  
私は最近の  
『東京新聞』  
の切り抜き  
を持ってきた  
のですが、「  
南極犬100  
匹射殺にな  
ぜだんまり  
」という記  
事です。こ  
れは簡単に  
申しますと  
、日本の愛  
知さんが外  
務大臣でイ  
ギリスに行  
かれたとき  
に、日本人  
は犬をいじ  
めるのでし  
からんじゃ  
ないかと新  
聞記者にか  
こまれたと  
きに返事が  
できなかった  
という。そ  
れから加藤  
シズエさん  
。こういう  
超一流の教  
育のある方  
で、現在日  
本動物愛護  
協会の理事  
長されてい  
るのですが  
、この方が  
最近イギリ  
スで南極基  
地を縮小す  
るにあたっ  
て南極犬10  
0匹を鉄砲  
で撃ち殺し  
たことを、  
あのイギリ  
ス人にして  
、私には理  
解できない  
、第一彼ら  
は日本の南  
極隊がやむ  
をえず脱出  
するとき犬  
を置いてき  
たというの  
で国際的に  
非難の世論  
を起こした  
張本人なの  
に。今度は  
自分たちの  
南極隊

員が100匹も殺しておいて1つも新聞記事にならない。日本のときだけ目くじらたてて理解できないというような記事なんです。そこで、こういった日本の超一流のインテリがイギリスは理解できないとか、イギリス人に質問を受けて困るというのは平泉先生がおっしゃっている外国文化とか外国人の価値観、世界観はどういうものかということも中学、高校で語学とは関係なしに教えておけば、立て板に水の説明ができて、日本の立場もなるほどと理解させられる。つまり日本とイギリスの動物観のちがいであるとか、残酷という概念に関する相対性であるとか、そういったおもしろい問題がたくさんあって、それを教育のどこかの段階で世界の文化、民族、価値なんていうふうな講義をやっておけばそういうことをとうとうと説明することによって日本というものの理解も深めることができる。それがだんまりになってしまうと、やっぱり日本は文明開化したようでも野蛮人だという印象をまたここで残してしまふ。ところが現在の英語教育で教養主義として英語をやっている場合に、こういう問題がいつ出てくるかということ永遠に出ずじまいに終わっちゃうわけなんです。ですから教養ということで語学を選ぶのなら選びようがあるし、またさらには語学じゃないほうが効率も高いこともあるだろう。だから結局語学教育を教養とか人格の陶冶とかそういうふうにとんどん逃げ回っていくことは賢明じゃないので、やはり語学というのは本来の国際交流、知識の交換ということを主眼におくべきで、その他の副産物はもちろんあるけれども、しかしそれに主眼をおくのだったら語学教育からは必ずしも多くを望めないということを理解すべきではないか。

平泉 そうですね。ことにおかしいのは、それならなぜ英語だけやるのか。

鈴木 そうなんです。そこでさっき申し上げた国際情勢の変化、日本が相手とすべきものはイギリス、アメリカだけではないという問題に目をつぶっている英語の先生の立場というのはいかしくないではないか。まさに日本で一番やるべきなのは中国語と韓国語、ロシア語です。それからインドネシア、タイ、マラヤ、それから石油ショックのアラブ。イギリスは簡単にいえばもうすんだわけです。私たちはイギリスに対しては、すでに一丁あがったわけですね。

## 英語の国際性

平泉 アメリカは重要ですね。ただそういう意味でやはり世界のいろいろな情勢を知るために、もっといろいろなことばをやるべきだろうと思う。ただ私は高等学校

の課程として一応英語をやってもいいんじゃないかと思うのは、とにかくその中ではやはりいまのところ日米関係というものが、英語の世界におけることばとしての地位というものは異常なほど高い。ソビエト・ユニオンにおいても第一の外国語はもちろん英語ですからね。その意味では世界史に先例をみない。まさに世界が一つになりつつある段階における、最も国際性のあることばは英語です。それから外国語というものは一つの外国語をほんとうに苦勞して覚えると全然語系がちがったことばでもことばに対する感応が生まれますからね。

鈴木 そうです。それで非常におもしろいことは、東南アジアに技術指導に行く係長クラス以下の人、英語も満足にやらなかった人が向こうの言語をうまく学べない。つまり日本語に対しても動詞とか名詞とか変化とかいうことを反省してないわけです。ところが英語をやったホワイトカラーはけっこう早くやろうと思えばできる。ですから結局一つの言語をやることによって自分の国の言語も反省し、かつよその言語に乗りかえられる一つの窓口があく。

平泉 そのときの条件はそのことばがほんとうにできることなんです。だからいいかげんな英語をやっておいてそれで世界の窓なんていう議論はだめなんです。そうするとまず実益もあり、ほかの外国語に対する階梯にもなる、という意味で英語をみっちり教えてほしい。それを中学からやるか高等学校からやるかというのが私の案なんです。私は中学は義務教育なんだから、もっと広やかな常識をまずつくる時間におおむねあけておいてほしい。そしてほんとうにこういう苦勞した道に入るのは高等学校で十分だと思います。

鈴木 私そう思います。つまり人格形成ができてからでなければだめだ。

それから何をどうやるかという事になりますが、一つの勉強法として英字新聞を読むことをすすめた。これは体験から言うのですが、25年前のことですが、*Japan Times* を私はすみからすみまで全部6時間も声出して読んだ、何か月もそれをやったことがある。もうあとはその段階越すと新聞でもパッと見ると何を書いてあるかわかるようになりました。

平泉 新聞をすみからすみまで読むのは非常にいい語学の勉強になりますね。私はそれは森有正さんに聞いた。どうやってフランス語を勉強したらいいかと私がフランスへ行った時に聞いたら、フランスの新聞をすみからすみまで全部字引をひいて読め、そうすると6か月で卒業できるのだという話だった。たしかにめっちゃくちゃに語学力がつくのです。

鈴木 なぜかという、たとえばきょう起きたカンボジアとアメリカの戦争の問題いろいろなことで耳に入るでしょう。それがそこに書いてあるわけです。インフレで苦しんでいるときはインフレのことが書いてある。きょうは選挙だという選挙の話が出ているわけです。ですから結局非常に裏づけと実感のある言語教育になる。

### 発信型への脱皮を

平泉 どうですか先生。私どもの考えているほんとうの語学修業としての語学をやるべきではないのでしょうか。『エリア随筆集』とかそういうようなものを80年間もやっているのはやめてね。

鈴木 だから私は文学だけは語学のテキストからはずせと非常にしつこく書いた。あれはまさにそこなんです。つまり文学ということを残しておく、シェイクスピアのほうが文学としては高い。マコーレーがいい、エリアがいいといってどんどん高等晦渋なところへ逃げていかれるから、ほんとうは文学だって使えるものがあるのだけれども、あえて文学というのは残しておくウツと有象無象がかくれみのに使う心配がある。だから100ページ足らずのテキストで注が50ページついているのを1年のろろと読んで一体何がわかるのかということをして私はいうわけです。が大学の教科書というと1年1冊250円定価で先生の注が30ページでテキストが80ページなんていうのは一晩分ですよ。

平泉 日本の語学教育の先生方は大体戦前の語学教育を受けられた方々ですね。私の高等学校時代思い出してみてもドイツ語なんかやると第1年の1学期で文法あげちゃって、2学期から『若きウェルテルの悩み』、2年目になると『プラグへの旅のモーツァルト』3年になるとゲーテの『ファウスト』とか、あの時間数と教授法でそんなものは読めるはずがないのです。判じものですよ。こういうものはドイツ語がそれこそたて横十文字にやれて、そして初めてゆっくり楽しむべきものではないですか。それを高等学校の生徒にやらせるということになるとまさに語学教育だか装飾だか分らぬ文学を冒瀆し、語学を冒瀆するもので、これこそ私は最もけしからんことだと思います。

鈴木 私そう思います。一番いけないことは、英語の先生でもよく出来る方は、そのことを百も承知でおられるのに、いざ公開討論になるとしゃあしゃと別のことをいわれるということです。今迄でも英語教育は何んとかしなければいけないという認識が、良心的な英語の先生の研究会などで、しばしば取り上げられているのに、社

会的に大きく取り上げられるようになったら、今度は急に英語弁論が多くなってしまったのは残念ですね。

平泉 いまの英語の先生とっておられる方々も実はほんとうは英語の先生をやっているよりは、イギリスの文化、area studyの専門家としての道が開けるならそのほうが好きな人もずいぶんおられる。あるいは英語よりは海外に出て日本語の先生をやりたいという方もおられるのではないかと。その方々に英語を母国語とする人々に日本語を教える専門家になっていただくということも考えてもらいたいと思うのです。

それから、たとえば、フランス政府は膨大な予算をかけて、実に200年にわたる伝統をもって海外にフランス語の教育というものをフランスの対外政策の根幹をなすものの一つとしてやっている。私は国際文化交流基金というものをつくる発端になった、参議院での1時間にわたる質疑の中でわが国の対外文化交流事業という問題を取り上げました。そのときに私は国会で関係者の人々に証言してもらったことは、フランスの対外文化活動というものに使っている予算は日本の対外文化活動に使っている予算の1千倍だということです。ことに語学教育を中心として、フランスではほとんど語学教育です。大体1千倍の教師を外国に送り出している。

鈴木 たとえばNHKのフランス語のテレビのフィルムはほとんどフランス政府のを使ってますね。

平泉 ああいうものを全部含めてちょうど日本の1千倍になるんです。それで国家のGNPは向こうは大体日本の8割程度です。逆ですね。そういうことを考えますと、フランス人で外国へ行ってフランス語を教えている人というのは原則として現地のことばができないんです。私はフランス政府の人たちについてもいっているのですけれども、それはまさに文化的帝国主義の雰囲気だということです。そして一方、たとえば日本の英語の先生が日本語の先生としてアメリカ、イギリス、その他の英語を母国語とする地域に入った場合、まさに理想的な先生になるのではないかと思うのです。自分はイギリス、アメリカのことばが好きで、その国の文化に深い理解をもつ人が日本の先生としてたとえばカナダのウィンベグへ行くとか、オーストラリアのパーズに行くとか、そういうことでやってくれたらほんとうに素晴らしい結果が生まれる。アリアンス・フランセーズのような文化的帝国主義のような雰囲気は出てこないだろうと思うのです。

鈴木 同感ですね。

(速記：上山采子)



## 日本の英語教育

—改革は慎重に—

KAIEDA SUSUMU

海江田 進

### 1

本誌が取り上げた問題『英語教育の現状と改革』は、筆者が深い関心を持っている問題である。英語教師のひとりとして、この問題に深い関心を持たないわけにはいかない。

筆者は、昭和6年(1931年)以来、もう44年間も学校で英語を教えている。現在も学校の教室で一般的な英語(いわゆる訳読・英作文・英文法)を教えている。先生たちが敬遠しがちな英作文を教える機会が比較的多かった。

40何年ものあいだに、実にいろいろのことがあった。私はいろいろの時代をパスした。最初が大正デモクラシーのなごりがあって、英語が歓迎されていた時代、次が大不景気の時代、次がファシズムの時代(英語が敵性語というレッテルをはられ、学校の英語の授業時間が制限され、筆者は一時失業した)、それから戦後の解放時代、英語がさかんすぎるほどさかんな時代、などをパスした。

いま『英語教育の現状と改革』という問題に接すると、私は長いあいだにいろいろの経験を持った英語教師として、ひとつの意見一感想を持たないわけにはいかない。その意見を述べてみよう。私の意見は単純な経験から割り出されたもので、私自身、それがいわゆる客観的に正しいものかどうか疑問だと思っているのだが、まあ、あえてペンをとる。

### 2

英語教育の改革を語る場合、私たちは、まず、現在現実に学校の教壇に立って、日々熱心に若い人々を指導しているおそらく5~6万に及ぶ中学校・高等学校・大学の英語教師の存在を考えなければならない。このかたがたは、一部の高等学校の研究日や大学の自由というものを除くと、一般に毎日朝8時半ごろから夕方4時ごろまで学校に勤務し、大学の場合は別としても、だいたい週16~25時間の授業を受け持ち、種々の形の、想像もつかぬほど多くの教育事務にたずさわ(こまかいことを言うようだが)仕事の一部分を家庭へ持ちかえって処理し

ているのである。

そして、この全国にいる英語の教師たちが、日々若い人々を指導し、現在の日本文化をシッカリとささえているのである。私たち英語教師の英語は、全体として、いわば日本式であり、スムーズネスを欠き、プラクティカルな方面で弱いかもしい。私たちみずから反省し、現代のコンディションを考え、私たちの英語が時代おくれのものとならぬよう、改革すべき点は改革するために私たちは最大の努力を払うべきである。

しかし現在数万の英語教師が毎日朝から晩まで一生けんめい働き、日本の文化をささえていることは事実であり、英語教育には改革すべき点が多くあるとしても、この事実を無視して、アイディアリスティックな観点から、あるいはあまりにも実際的な観点から、現場を離れている人が、一般的抽象論を言うのはよくない。

### 3

次に英語教育の改革を行なおうとする場合、改革案の発言者・提案者は、自分の身の辺のことだけ考えずに、日本人全体のことを考えなければならない。たとえば、たまたまアメリカに留学して帰国し、日本で英語を教えたり、会社で仕事をしたりしている人々、国際会議に出席して、英語の必要を痛感した政治家・公吏・実業家・学者、その他海外活動をしている人々は、現代が国際時代であり、英語時代であることを強く認識しているのだが、こういうクラスの人々の国民全体に対するパーセンテージはきわめて小さく、こういう人々が英語(実用英語)の必要を感じたからといって、その感覚を直ちに海外に行ったこともなく、国際時代の実感がそれほど強くない多数の人々に押しつけるのはよくない。

英語教育は、語学を真に必要とする一部分の国民に集中的に施すのが能率的であり、また国民にとって有益であるという論もあり、そのことについては、筆者はあとで述べるが、現代は文字どおり国際時代であり、一般国民がそれを強く認識しようが、認識すまいが、英語はコモンスenseとして、すべての人々に、ある程度教えなければならない。語学そのもののみならず、現在の中学校

指導要領にもあるとおり、英語をとおして  *firsthand*  に、英語国民ほか諸外国国民の生活や、ものの見方の基礎的理解を学ばせることが必要なのである。

しかし一般国民の場合、ほとんどすべての義務教育終了者が高等学校に進み、高校卒業生の3分の1以上が大学に進学するという現在においても、実用英語の必要は、中央・地方を含めた全国的スケールで見れば、たまたに外人と会話をするとか、道を聞かれて英語で答えるとか、海外旅行をするまれなチャンスに恵まれたとき、用を弁ずるとかいう程度にすぎず、ただその目的のために、英会話を学校で長期間システムティックに学ぶ必要はない。

#### 4

むしろ日本の中央・地方全体について考えた場合、単に小手先の社交会話を学ぶようなことではなく、私たちが国際時代の雰囲気の中に包まれ、あらゆる国民が直接間接その中で呼吸している際、私たちは、現在高校・中学校でやっているように、国際語である英語のいろいろの面（文語と口語・言語材料と内容など）を多角的に学ぶ必要を持っている。米英人に直接接する必要のない多数の人々の場合、英語は（人々によって意見は違うだろうが）純粹のプラクティカル・イングリシとして学ぶより、一種の教養英語として、あるいは教養英語の要素を濃くしたものとして、学ぶのがよい。英語とは性質が違うが、他の教材について考えてみても、学校を出てすぐ役に立つという実用面のみにはウェートの置かれている科目はないのである。

とはいえ、日本の英語の授業を、いまのままの形にしておくのはよくない。たとえば、筆者がある大学で、ひとりの学生の背中をたたき

Where is X Station?

と聞き、少なくとも6年以上英語を学び、複雑な構文の英語を解釈することのできる者が、直ちにスラスラと英語で答えることができなかつたとしたら、これは実に不思議な現象であると言わなければならない。これでは英語が円満な姿になっていないのである。

#### 5

自慢するわけではないが、筆者はいままで、世界のいろいろの国に行った。英語国以外では、アフガニスタン・イラン・イラック・エーゲ海地方・エジプト・エチオピア・ケニア・ザンビア等の国々に行ったのである。どこへ行っても都会では英語が通じ（内陸では通じない）、その英語は、耳を澄まして聞いたら、いわゆる文法的には、きわめて不正確なものではあろうが、スラスラと通じるという点では、日本の大学生の英語よりすぐ

れていた。日本の英語は（私の英語もそうだが）、一種独特なタイプのものである。

私たち英語の教師は、私たちの英語をもう少しスムーズなスピードのあるものに変え、英会話がまったくできない学生など私たちの教室からひとりも出ないような教育を行なうべきである。かつて植民地であった国々と、日本の場合とは、事情が違うが、今日のような国際時代に、長年月の訓練にもかかわらず、口のきけない学生が存在するというのはいかにも変であり、この点では、私たち英語教師に改めるべき点があれば、外部の者からかれこれ言われぬよう改めるべきであろう。

同時に、いわゆる生きた英語が真に必要なならば、外国へ行く理由のあまりなさそうな人々が多数海外に出かけている現在、日本の英語教師もいまよりはるかに多数英語諸国へ派遣されるべきであり、そういう用意をしないで、教室の英語を批判してもはじまらないのである。

#### 6

さて、一部分の国民に集中的に、能率的に英語を教えることだが、平泉渉氏の試案によると、国民の約5%、600万人を特別に訓練するのだという。この案を実施する場合、どういふ人がその5%の中にはいるのかというところに問題があるが、現在のように事実上あらゆる国民が英語を教えられ、しかも学校で英語を教わった者が皆英語ができないというのでは、こういう考え方が出てくるのも当然である。

ただ平泉氏その他の人々が考えているように、国民中の一部分の者にだけ英語の知識を授け、他の大部分の者には、これを授けない、あるいは少ししか授けないのはよくない。むしろ現代やっているように、国民全体に教養の源のひとつである英語を教え、その上で一部分の者にエキスパートとしての英語を集中的に習わせるのがよいだろう。つまりすべての国民に、英語の常識（相当幅の広い常識）を与え、そのあとで少数の専門家を養成するのである。

とにかく一部分の人々の考えで、性急に現在の英語教育体制を一挙に変えてしまうようなことをしてはならない。教育関係の事務で、性急な試みをして、成功したためしがない。改革は専門家が十分考え、多数の現場の教師の意見を尊重し、ゆっくりと慎重に行なわなければならない。これが長いあいだ教師をしている筆者の現在の考えである。

(明星大学教授)



## アンケート 英語教育改善のために (2)

前号に引き続き、自由民主党国際文化交流特別委員会副委員長の平泉渉参議院議員から提案された「外国語教育の現状と改革の方向」(本誌49号 pp. 26-27全文掲載)を接点に

1. 英語教育の現状への見解
2. 改革への具体的提言について

各界識者からご意見をお寄せいただき、転機に立たされている英語教育の改善の指針を探ってみました。(掲載は原稿到着順)

### Comprehension の向上を

斎藤 美津子

最近、私は文部省から中学、高校の英語の教科書を一通り目を通してみた。コミュニケーション学の分野から英語教育の方法を考察してみたからである。16冊の教科書の内容は非常に慎重にあらゆる点から検討されて作られているのがよく分かり感心した。また私は戦後30年継続して日本の英語教育にたずさわってこられた文部省の専門家に英語教育の現状分析をしてもらった。それによると、戦前に比べて一部の人は Oral の面ではかなりの成果をあげているし、一般的には発音もよくなってきている。ただ、読解力を含めて理解力が落ちているのではないかということであった。英語教育とは現在、専門に取り組んでいないとはいえ、このことは、ばく然とではあるが、私の感じてきたことである。

コミュニケーションの観点からすると、「Comprehension が低下している」ということは致命的なことなのである。「戦後の英語教育の成果はあがっていない」と有識者の中から声があがっているが、その根本は Comprehension の能力が身につかなかったということではなからうか。Expression の能力が上昇しても、英語でコミュニケーション出来るとはいえない。言うまでもないことであるが、相手との意志疎通をはかり、お互いに理解することがコミュニケーションの目的である。もし英語を通して相手を理解することが出来ないのなら、たとえどんな素晴らしい教科書があっても、効果のあ

る教育がなされてきたとはいえない。戦後、英語教育の方向はいささか誤ったのではないだろうか。発音も文法も表現力も重要である。然し、最も基礎的なものは Comprehension——読解力を含めた理解力なのである。

戦後、Pattern Practice に始まり細かいところにまで力を入れすぎたために、内容の意味を全体的に把握することをおろそかにした嫌いがあるとはいえないだろうか。問題は教員養成にあると思う。現職教育にも助けをかりて、教員養成のカリキュラムの内容(英語学6単位、英文学6単位、会話及び作文3単位を含めて)の再検討を急がなければならない。Comprehension の能力の低下は、日本が国際舞台で孤独な存在になることを助長していくだけである。(国際基督教大学準教授)

### 外国語教育を大衆のものに

名和 雄次郎

中等学校における英語教育の廃止と共に大翻訳局の設置を唱えた藤村作の再来とも映る平泉氏の発言は、政治家のものであるだけにその影響力は大きいものがある。私たち英語教育者にとってはありがたい仕合わせである。私たちの中には英語教育の改善など茶飲話にはしても、しかるべき所で発言したり、実行しようとする人は数えるほどしかいないのだから良い刺激になろうというものである。

しかし私は平泉試案に全面的に賛成しているわけではない。まず教育観、言語観の偏狭さは否定できない。改革の推進者たるべき教員の養成、再教育にふれていない。教育環境、施設の問題を無視している。すべては政治家としての姿勢から来ているようである。平泉氏は教育は大衆のものであることを軽視されているのではなからうか。国民の95%の外国語教育を中心に据えて考えれば、平泉氏がのぞまれる5%の実用能力保持者は自然と生まれてくるものである。95%が「世界の言語と文化」

や中1程度の「常識」としての外国語などでお茶を濁されたのではかなわない。エリート高校生以外の生徒の教育をどうしようというのか。平泉氏の改革案は外国語教育のみならず教育全般をいっそう歪める危険性が多分にある。改革は私たち教師の手ですすめられるべきである。

改革への具体的提言：(1) 外国語教育を国語と合わせて大きな言語教育の中でとらえなおすこと、(2)外国語教育の目的・目標を根本的に考えなおすこと。言語は暗記の記号体系というような単なる技能ではない。(以上のことに関して『現代英語教育』6月号を参照されたい。)(3) 中学の英語は現在の2年程度までのものとし、高校の英語は科目も程度も多様なものにする。(4) 大学入試制度の改革もさることながら、まず高校入試から英語を除くこと。(5) その他のことについては、日本英語教育改善懇談会のアピール(本誌49号掲載)を支持する。

(都立第二商業高校教諭)

## 思いおこす藤村作の悲劇

Okano-Atunobu

**A**：平泉英語科廃止論をきいて、藤村作先生の英語科廃止論を思い出す人が多いね。

**B**：トシがわかっちゃいますよ。ここに40(昭和15)年の本があります。

**A**：白水社刊というところがおもしろいね。雑誌にでたのは、27(昭和2)年だね。

**B**：ええ。でも本になってから5年間に、藤村提案は、事実上実現しますね。藤村さんは、快哉をさげんかでしょうか。

**A**：本にした時は、いくらか、どうだ、という気もあったかもしれない。しかし、敗戦直前にベキンから帰ってきたときは、あんたんたる気もちだったろうね。なにしろ、英語科もろとも教育全体がふっとんじゃったんだから。

**B**：平泉試案に対して、英語科だけの問題としてとらえず、教育全般、むしろ社会全般のこととしている人が多いようですね。

**A**：それはさんせいだね。藤村さんの悲劇はひとごとじゃない。ボクなんかまちがってばかりいたような気がするよ。

**B**：共犯者心理で平泉試案もまちがいだらけですか。

**A**：そんな気がするね。平泉試案で、英語科廃止のかわりに60万人の英語ペラペラ人を作ろうというのは、藤

村さんが、国立大翻訳所を作ろうといったのと同じ発想です。どこかの国では、じっさいそうになっているんじゃないか。

**B**：規模はちがってもそうでしょうね。発想が全体主義国家的ですね。

**A**：英語教育不振の原因にローマ字教育の影響をあげた人があったね。

**B**：古い神話がまだ生きていますね。ローマ字教育はそれほど強力かしら。

**A**：中国のローマ字教育が中国の英語教育に有害だという話はきかないね。

**B**：有害だとしてもかまわないわけです。中国人は、日本の英語教師のように姓名を逆にしたりしません。

**A**：中国人は、自分の文化に自信をもっているね。英語科廃止論というのは、実は卑屈な排外思想のうらがえしじゃないか。

**B**：そうでしょうね。それをせまい国粹主義でかざっている。日本の英語教師は、ヘボン式ローマ字を使うことに何の反省もしていないけれど、日英文化の切点として研究してもらいたいですね。アメリカやイギリスの日本語学者は、ほとんど訓令式を使っているんですから。

(くろしお出版社長)

## 言語に対する繊細な感覚を

刀根 健志

ある女子中学生が英語の音声的側面に関して信頼できる指導を受けていたとしよう。日常生活においてその中学生は、母親から、「何ですか！女の子のくせに大きな声を出して、はしたない！」としかられないとも限らない。

私がELECでのパネル・ディスカッションを傍聴し特に attend した点は、「外国語を学んでいると日本人としての属性が危ぶまれることがある」という平泉議員の発言とそれに対する聴衆の反応であった。上記のような、日本のしつけと全く相反する例、我々の思想的、文化的側面と相反する諸々の例をこれまで私の経験から実感として持っていたからである。

1. その発言の賛否を問題にしているのではない。驚いたのは大勢の英語教師で構成されていた聴衆がその発言の意味がわからず、説明を求めようとまでしていたことであった。現在、英語教育の問題点が議論されているが、私は、1クラスの数が多いとか、視聴覚教材をも

(p.39 へつづく)

## 英語学習23年目に思う

——平泉案などに関して



斉藤 造酒雄

### 投稿

『英語展望』No. 49 は異常な興味をそそってくれた。特に、私は東北の高校教師故に言いたいことが山ほどある。以下私自身の体験を交えながら雑感を述べさせてもらいたい。

中学1年の時から英語気遣いのように勉強をしてきて23年目、そして教師になって13年目の私は、①「NHK ラジオ英語会話」を高1から毎日聞いて丁度20年目、②毎日最低10ページの英語読書を実行してきて16年目、③大学でESS会員として4年間、最近では毎週1回神父さんに英語を習いに行き8年目、なのである。

上の3点からいっても私は自分なりに努力はしてきたと考えている。ところが「話す」「書く」は何とか出来ると思っているが、「読む」「聞く」は今なお分からぬことばかりで困っている。以上は勿論自慢話をしたのではなく、英語とはこんなに難しかったのかと歯痒い気持ちで書いている。

さて、こうした私が英語を教えて13年目にあたって考えることは――

「外国語を習得するということはたいへんなことである、人間が変わることなんだ」(『英語展望』No. 49, p. 12)あるいは「ほんとうに外国語の発音をするときには、ことばというものは魂の世界に入ってくるのです」(同 No. 48, p. 16)という言葉にみられるように、ほとんど完全に外国語を習得することは不可能に近いということである。それにもかかわらず、この山形県でさえ、90%以上の中学生が入ってくる高校生全員に英語を教えることに一体意味があるのだろうか。「英語A」「英会話」の教科書を使用したところで、さっぱり分からない高校生が日本中に氾濫しているという事実。

私の学校でも3年前から必修クラブという時間を設けて週一時間をそれにあてている。私はそのうち「英会話」という名のクラブを担当している。英語の好きな筈の生徒のみが10名ぐらい入ってくるが、毎年1の教科書も

終われずに3月をむかえる。英語会話などというクラブ名は、「中1英語をやり直すクラブ」とでもしたいといつも考えている。まして普通の授業においてはほとんどの生徒が予習をしてこない。

もう一つの例を挙げよう――

先日(4月23日)45ページにわたる参考書(『英語の基礎』)の一部を春休み中の宿題にしておいて、その中からのみ問題を作成して実力テストをした。新2年生172名の平均点は17.8であった! 私の言いたいことはもう理解していただけたと思う。これと似た高等学校が日本国中に無数に存在しているに違いない。

『英語展望』などには、偉い先生方の難しい話だけが載せてあるような感じがするのは私だけだろうか?

「私が話していて一番おもしろくない、つまらない連中というのは実は英語の教師なんで…」などと言われるのもよからう。ただ上述したような現実も知ってほしかったのである。こうした日本語も読めない生徒に、毎日命をかけて英語を教えている教師が沢山いることを知ってもらいたい。英語教師をおもしろくない種類の人間にするのは何なのかを、先に考えてもらいたい。

\* \* \*

英語を流暢に話せない先生は不適格というのならば、各種学校をでた英語の上手な人に、教員の資格を与えればよい訳だ。(私の経験では、日本人で英会話がうまい人というのは、少し変わったところがあったり、変に度胸があったりする者が多い。少し英語をしゃべれるぐらいで、異常な優越感をもったりする。従って女性なら、おとなしい型の人には流暢に英語をしゃべる人はほとんどなく、同様に、静かに悩む生徒と語り合うようなタイプの教師には、しゃべることが下手な人が多いのかもしれない。)

三流の会話をマスターするために大学の英文科に入るのには、ソロバンを習いに大学に入るのに似てはいないだろうか? 大学に学ぶ目的とは何だろうか? 中尾氏の言われる理想論(本誌 No. 49, p. 30)がなければ、大学生の教養はなお浅くならないだろうか。

現実をみて、しかも大学の理念を保ちながら、平泉案を考えてゆくべきではないだろうか。そこから立派な教師も生徒も生まれてくると思う。

(山形県立酒田北高校教諭)

## 真の英語教師とは



中山 祖詠

### — 投 稿 —

私はつい3年前まで高校生であり、また中学生の時の英語のA先生とも、今でもよく「現実の英語教育」を論じ合い、私自身英語が好きでたまらず、同時に英語教育に非常に興味を持っております。自分の教育観から本誌の「英語教育の現状と改革の方向」を拝読いたしました。大きな問題として次のようなものがあります。

1. 英語教師の質
2. クラスサイズ
3. 生徒の意欲
4. 大学入試

A先生が隣の英語教師にある英文の疑問点を尋ねたところ、「あなたの英語は米語で全然わかりません」と言われ、あきれ果てて物も言えなかったと、先日私に話してくれました。これを聞いて「教師の質」というのを改めて考えさせられました。A先生はアメリカ育ちで家族の方々がアメリカに住んでおられ、時々里帰りなされるので生の American English に近いことは確かなのです。初めて英語を習う中学1年の時、何と言っても重要なのは「よい教師」にめぐりあうことだと思います。私の言う「よい教師」とは大体次の条件を満たしている人のことです。

1. 生の英米人の書いた(すなわち、日本の学生向きに書きおろしたものでない)英文は、特に専門にわたらない限り、ノーマルな速度で読解できる。
2. 自己表現をほとんど英語でできる。
3. 英米人がノーマルな速度で話しても、ほとんど聞き取ることができ、かつ日本語・英語で要約できる。
4. 英語(単語、イディオム、諺、文化、身ぶりなど)に関する豊富な知識をもち、イディオムなどの使用レベルを現代英語で可能な限り、わきまえている。

現に英語教師の中で、英語を「人間の話す言葉」と思っていない人が少なくありません。つまり「暗号」と考えているのです。また英語(外国語)というものは、母国語で教える限り、比較言語学をかなり専門的に学んでいないと、生徒に日本語の破壊という悪影響を与えたいと思います。真の英語教師なら状況に応じて、日本語的発想も英語的発想も両方できなければならないと思います。英語そのものに関心を持つと、日本語へのそれもない

や増すことは自明の理であります。それから、伊村氏も述べておられるように(本誌 No. 49, p. 33) 1 クラスを20名ほどにして、「よい教師」が独自の体験に基づいて、中学1年から1、2年間はオリエンテーションをするのがよいと思います。そうすれば「生徒の意欲」も出てきて、他の諸問題は付随的に解決されるだろう。柵木氏は「そもそも実用性とはなんであるか、簡単には規定できない」(同 p. 32)と書いておられますが、実用性とは他ならぬ「よい教師」の条件として先述した1~4のことであると私は考えています。こういう実用性を備えた英語教師を養成するために、坂西氏の「中学や高校の英語教師を一年英米に留学させる。そうでなければ毎年数か所まで集中訓練を行うことである。」(同 p. 25)には全面的に賛成ですが、平泉試案に欠けていたのはまことに不思議であります。

次に「大学入試」の問題、この害を最大に被っているのはやはり受験校でしょう。こういう受験校の本音は○大学にX人入れることなのですから、大学入試を諸氏が述べておられるように、実用英語に重きをおいた four skills の能力判定にすれば、高校側がそれに合わせるのは絶対確かであります。

一方中学校の教師の悩みの種は「授業時間不足」ということであります。A先生もこのことを嘆いておられましたが、他の教科の先生は「語学の習得がはらむ性質」を全然理解してくれないらしい。

平泉試案のV.1. は見方が間違っていると思います。私の考えの大前提は、学問というのは決して分割し切れないものだという事です。また数学のテストがよいことと、その人が真に数学的発想をしているかは全くの別問題です。現に数学を暗記している人がほとんどであり、本当に数学的発想を身につけている人は、英語の場合と同様ごくわずかであります。その意味で「言葉」を暗記するというのは、数学を暗記するのが本質的におかしいように、おかしいのであります。もしある数学教師が、真に数学に生きがいを感じていれば、生徒ははだでその意気込みを感じるし、数学に対して興味をもつ。英語においてもまた然り。その意味で平泉試案に教師養成の問題が取り上げられていないのは、まことに遺憾であります。以上をまとめると次のようになります。

1. 英語教師の養成(山岡氏の言葉で言えば「実用主義プラス教養主義」の観点から)
2. クラスサイズをもっと小さくすること。
3. 大学入試を four skills にわたってすること。
4. 授業時間数の増加。(特に中学校の場合)

(p. 47 へつづく)



## バラッドの世界 (その 2)

—「ロード・ランダル」(チャイルド12番)をめぐって—

HIRANO KEIICHI

平野 敬 一

### 童謡とバラッドの関係

英語の子供の唄を総称するものとしての伝承童謡と、一応は大人の物語り唄と考えていい伝承バラッドとのあいだに、どういう関係があるのだろうか。伝承されてきた唄という点で共通点は多分にありそうだが、対象が大人か子供かというのでは、両者の区別としてあまり役立ちそうもない。マザー・グースの唄の数々が必ずしも子供を対象にした幼い唄でないことを、マザー・グースの愛好家ならだれでも知っているからである。ロイドの定義<sup>1)</sup>を借りるなら、バラッドはまず第一義的に folk tale —すなわち物語り—であるという点が、童謡とのいちばん大きな差異であろう。童謡は、たとえば眠らせ唄とか手叩き唄の例にみられるように、かならずしも物語りの展開を必要としないからである。したがって総じてバラッドの方が童謡より長くなるのである。しかし、たとえば「蛙の求婚」(“A Frog he would a-wooing go”)のようにちゃんと物語りが展開する童謡も少なくないのである。こういう唄をバラッドと称しては、いけないのだろうか。いけないことは少しもない。チャイルド教授の眼鏡にかなった 305 篇だけをバラッド、あるいは伝承バラッド、と窮屈に考えるのなら話は別だが、「蛙の求婚」のような唄は nursery rhyme であると同時に ballad である、といささかルースに考えていて、いっこうに差し支えないのである。数々の童謡の中にはバラッド的なものも入っており、数々のバラッドの中には童謡的なものも入っているのである。

オービー夫妻編の『オックスフォード童謡集』<sup>2)</sup>をみると、その第9章には ‘Ballads and Songs’ の見出しの下に55篇の童謡が収録されている。バラッドと民謡 (folk song) とを区別せずに一括しているわけだが、この章には童謡であると同時にバラッド (あるいは民謡) でもある作品が入っているのである。どういう作品かという、たとえば「3人の陽気なウェールズ人」(“Three Jovial Welshmen”), 「エイケン・ドラム」(“Aiken Drum”), 「笛吹きの息子トム」(“Tom, The Piper’s Son”), 「だ

れがコック・ロビンを殺したか?」(“Who Killed Cock Robin?”), 「キツネの出撃」(“The Fox’s Foray”), 「くーくー鳴くハト」(“The Croodin Doo”) などなどであるが、いずれも数十行の長さを有し、いちおう物語りの展開があり、物語り唄 (つまりバラッド) としてのていざいは整っているのである。伝承バラッド研究家は、こういう物語り童謡までをバラッドの中に含めることにあるいは反対を表明するかもしれないが、なにも、そうきゅうくつに考える必要はないであろう。童謡、伝承バラッド、民謡あるいは俗謡などといったジャンルの境界線は、もともと曖昧なものなのである。

### “Lord Randal”

今回取り上げることにした「ロード・ランダル」(Lord Randal) というバラッドの場合、特にその感を深くする。この作品は、もっともオーソドックスな代表的なチャイルド・バラッドであることは言をまたないが、同時に伝承童謡の世界にも深く根を下ろしているからである。

まず童謡の世界からみていこう。オービー夫妻編の『オックスフォード版・童謡辞典』に次の童謡が出ている。

Where have you been today, Billy, my son?  
Where have you been today, my only man?  
I’ve been a wooing, mother, make my bed soon,  
For I’m sick at heart, and fain would lay down.

What have you ate today, Billy, my son?  
What have you ate today, my only man?  
I’ve ate eel-pie, mother, make my bed soon,  
For I’m sick at heart, and shall die before noon.<sup>3)</sup>

1) “The folk ballad is a folk tale put into verse and set to music.” (A. L. Lloyd)

2) *The Oxford Nursery Rhyme Book* (以下 ONRB と略す), 1955

3) *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes* (以下 ODNR と略す), 1951, p. 75.

(lay=lie; ate=eaten. 大意:「きょうはどこへ行っていたの、息子のピリーよ? きょうはどこへ行っていたの、わが一人息子よ?」「彼女に会いに行ったんだよ。お母さん。すぐベッドを用意して! 胸が苦しくて、横になりたいんだ。」/「きょうはなにを食べたの、息子のピリーよ? きょうはなにを食べたの、わが一人息子よ?」「ウナギのパイを食べたんだよ、お母さん。すぐベッドを用意して! 胸が苦しくて、お屋までもちそうもないんだ。)」

一人息子のピリーが外出先から帰ってくるとどうも様子がおかしい。聞いてみるとウナギ・パイを食べて、ひどく具合が悪い、正午まで命は持ちそうもない、というおだやかならぬ唄である。なぜこれが「童謡」になるのか、人はいぶかるかもしれない。しかし、これはオービー夫妻がかってに童謡として採択したわけではなく、すでに19世紀前半にハリウェルがその『イングランドの童謡』<sup>4)</sup>に上記引用のとはほとんど同じ形(違うのは eel-pie に不定冠詞がついている点だけ)で採録しているのである。分類好きのハリウェルは、この唄を「第14類:恋と結婚 (Love and Matrimony)」の中に入れ、例えば「巻き毛のお嬢さん! わたしと結婚してくれませんか!」(Curly locks, Curly locks! Wilt thou be mine?)の唄などと並べているのである。ハリウェルがこの唄の中に、たんなる子供の食中毒でなく、男女の恋のもつれを読みとっていたことは言うまでもない。博学のハリウェルのことだから、この「童謡」がバラッド「ロード・ランダル」(チャイルド12番)のヴァリエーションであることをもちろん知っていたと思われる。知っていたからこそ「恋と結婚」の分類の中に入れたのである。

オービー夫妻とハリウェルとが、共に「童謡」として採録したこの2スタンザ8行の唄は、チャイルド教授のあの記念碑的な(オービーはこれにさらに「退屈な」という形容詞をつける)『イングランドとスコットランドの民衆バラッド集』<sup>5)</sup>の分類によれば、チャイルド12番のGヴァージョンであり、出典は Weber, Jamieson, Scott 共編の *Illustrations of Northern Antiquities* (Edinburgh, 1814) (『北方古事考』くらいか?) ということになっている。チャイルドはそれに「元来、サフォーク州の牧師の娘から聞いたもの」と補注している。とにかくGヴァージョンはこの2スタンザだけであり、それでは話としては、いかに不完全なので、このバラッドの標準ヴァージョンとみなされている全部で10スタンザからなるAヴァージョンを挙げてみよう。(キンズリー編『オックスフォード版バラッド集』もホジャート編『フ

ェーバ版バラッド集』もこのヴァージョンを採用している)

'O where ha you been, Lord Randal, my son?  
And where ha you been, my handsome young man?'  
'I ha been at the greenwood; mother, mak my bed soon,  
For I'm wearied wi hunting, and fain wad lie down.'

'An wha met ye there, Lord Randal, my son?  
An wha met you there, my handsome young man?'  
'O I met wi my true-love; mother, mak my bed soon,  
For I'm wearied wi huntin, an fain wad lie down.'

'And what did she give you, Lord Randal, my son?  
And what did she give you, my handsome young man?'  
'Eels fried in a pan; mother, mak my bed soon,  
For I'm wearied wi huntin, and fain wad lie down.'

'And wha gat your leavins, Lord Randal, my son?  
And wha gat your leavins, my handsome young man?'  
'My hawks and my hounds; mak my bed soon,  
For I'm wearied wi hunting, and fain wad lie down.'

'And what becam of them, Lord Randal, my son?  
And what becam of them, my handsome young man?'  
'They stretched their legs out an died; mother, mak my bed soon,  
For I'm wearied wi huntin, and fain wad lie down.'

'O I fear you are poisoned, Lord Randal, my son!  
I fear you are poisoned, my handsome young man!'  
'O yes, I am poisoned; mother, mak my bed soon,  
For I'm sick at the heart, and I fain wad lie down.'

'What d'ye leave to your mother, Lord Randal, my son?  
What d'ye leave to your mother, my handsome young man?'  
'Four and twenty milk kye; mother, mak my bed

4) *The Nursery Rhymes of England*, Collected by James Orchard Halliwell (1842), p. 187.

5) *The English and Scottish Popular Ballads*, 5 vols. (1882-98). Reprinted by Dover Publications, New York, 1965 (以下 ESPB と略す).

soon,  
 For I'm sick at the heart, an I fain wad lie down.'  
 'What d'ye leave to your sister, Lord Randal, my son?  
 What d'ye leave to your sister, my handsome young man?'  
 'My gold and my silver; mother, mak my bed soon,  
 For I'm sick at the heart, an I fain wad lie down.'  
 'What d'ye leave to your brother, Lord Randal, my son?  
 What d'ye leave to your brother, my handsome young man?'  
 'My houses and my lands; mother, mak my bed soon,  
 For I'm sick at the heart, and I fain wad lie down.'  
 'What d'ye leave to your true-love, Lord Randal, my son?  
 What d'ye leave to your true-love, my handsome young man?'  
 'I leave her hell and fire; mother, mak my bed soon,  
 For I'm sick at the heart, I fain wad lie down.'<sup>6)</sup>

(語注: ha=have; mak=make; wi=with; an=and; wad=would; wha=who; huntin=hunting; gat=got; leavins=leftovers; becam=became; d'ye=do you; kye=cows. 大意: 「お前はどこへ行っていたの、息子のランダルよ! どこへ行っていたの、わが美しき若者よ?」「緑の森へ行っていたんだよ、お母さん。ベッドをすぐ用意してくれ。猟で疲れて、横になりたいんだ」/「そこでだれと会ったの?」「恋人と会ったんだ」。「彼女になにをもらったの?」「フライパンで焼いたウナギなんだ」/「残りものを何にやったの?」「ぼくの鷹と猟犬にやったんだ」/「それで鷹と猟犬はどうなったの?」「足をつっぱねて死んじゃったよ」/「お前さん毒を盛られたようだね」/「そうなんだ。毒を盛られたんだ」/「お前はお母さんになにを残すつもり?」「24頭の乳牛を残しましょう」/「妹になにを残すの?」「ぼくの金貨と銀貨を残しましょう」/「弟になにを残すの?」「ぼくの屋敷と土地を残しましょう」/「では恋人になにを残すの、息子のランダルよ?恋人になにを残すの、わが美しき若者よ?」「地獄の火を残すんだ、お母さん。すぐベッドを用意してくれ。胸が苦しくて、横になりたいんだ」) 始めから終わりまで母子の間答だけで、動きはなにひとつないのだが、ここここに至るまでの男女の情念と愛憎のすさまじい起伏が、かえってなまなましく読者にせまってくる。このラ

ンダル郷は何者だろうか。このバラッドはどういう起源をもっているだろうか。チャイルドの「バラッド」からハリウェルやオービー採録の「童謡」への転移を考えるまえに、そういうことが気になってくる。

### “Lord Randal” の起源

この「ロード・ランダル」の考証をはじめたら、それこそ広義のヨーロッパ比較文化——ヨーロッパ・バラッド学——の世界に踏みこまざるをえなくなってくるのだが、いま、そのゆとりもないので、最小限の史(?)実をなぞっていくにとどめたい。

ロード・ランダルのモデルとして、いままでイギリス史の人物が何人か挙げられてきた。14世紀にすでにラングランド (Langland) によって言及されているチェスター伯ラナルフ (Ranulf), 有名なロバート・ブルースの甥マリー伯トーマス・ランドルフ (Randolf) あるいはランダル (1332年に戦死), さらににはジョン王 (1216年に毒殺されたという説がある) などがモデルに採せられたりしたが、そういう推定がまかり通ったのは、このバラッドのイギリス起源説が信じられていたからである。ところが、現在、このバラッドのイギリス起源説を裏づけるような文献はないのである。ここに挙げたAヴァージョンはエディンバラのマクマス (MacMath) 氏所蔵の稿本にもとづくが、その稿本の中でいちばん古い筆蹟 (チャイルド教授の推定による) でも1710年ごろのものであり、“Lord Randal”の筆蹟はそれよりずっと後代になるという。イギリスに現存のロード・ランダル文献の初出年は、だいたい18世紀から19世紀へかけてである。ところが、イタリアでは、すでに1629年と年代がはっきりしているヴェローナのブロータサイドに「ラベレナート」(‘L’Avvelenato’) すなわち「毒殺された人」という題名のこのバラッドのイタリア語版 (あるいはオリジナル?) がみつかっているのである。イタリアの他にドイツ、オランダ、スウェーデン、チェコスロバキア、ハンガリー等にも、このバラッドのさまざまなヴァージョンが広く流布しており、それらが大体イギリス版より年代が古いの、このバラッドのヨーロッパ (そしておそらくイタリア) 起源は否定しがたくなっている。

「ロード・ランダル」というバラッドは、このように起源的には外来のものかもしれないが、よほどイギリス人の好みに合ったとみえて、そのさまざまなヴァージョンが、イギリスの伝承童謡や伝承バラッドに広く深く根

6) *ESPB*, vol. 1, pp. 157—158.

を下ろしたのである。そして前回紹介した「酷き母」とならんで、現在も、いわば 'living process' としてこのバラッドは強靱な生命力を誇っているのである。

### マッコールの "Lord Randal"

現在の英米のフォーク・ソングの歌手で、このバラッドをそのレパートリーにもたない者のほうが少ないのではないかという感じさえする。「ロード・ランダル」の名唱として、スコットランドのマッコール(Ewan MacColl)、アメリカはケンタッキーのリッチー(Jean Ritchie)、黒人のブルース歌手ホワイト(Josh White)などの歌ったものがすぐ思い浮かぶが、その他音声資料としてわたくしの手許にあるこのバラッドのさまざまなヴァージョンだけでも、十指を下らないはずである。その中の代表格としてマッコールの歌うヴァージョンを挙げてみよう。

'Oh, where ha ye been, Lord Randal, my son?  
Oh, where ha ye been, my bonny young man?'  
'I've been to the wild wood, mother, mak' my bed soon,  
For I'm weary wi' huntin, and I fain would lie down.'

'Where gat ye your supper, Lord Randal, my son?  
Where gat ye your supper, my bonny young man?'  
'I dined wi' my true love, mother, mak' my bed soon,  
For I'm weary wi' huntin, and I fain would lie down.'

'What happened to your bloodhounds, Lord Randal, my son?  
What happened to your bloodhounds, my bonny young man?'  
'Oh, they swelled and they died, mother, mak' my bed soon,  
For I'm weary wi' huntin, and I fain would lie down.'

'What gat ye to your supper, Lord Randal, my son?  
What gat ye to your supper, my bonny young man?'  
'Oh, I gat eels boiled in broth, mother, mak' my bed soon,  
For I'm weary wi' huntin, and I fain would lie down.'

'I fear that ye are poisoned, Lord Randal, my son.  
I fear that ye are poisoned, my bonny young man.'

'Oh aye, I'm poisoned, mother, mak' my bed soon,  
For I'm sick at the heart and I fain would lie down.'

'What will ye leave your brother, Lord Randal, my son?  
What will ye leave your brother, my bonny young man?'

'The horse and the saddle that hangs in yon stable,  
For I'm sick at the heart and I fain would lie down.'

'What will ye leave your sweetheart, Lord, Randal, my son?'

'What will ye leave your sweetheart, my bonny young man?'

'The tow and the halter that hangs on yon tree,  
And there let her hang for the poisonin o' me.'

大意はかかげるまでもなからう(最終スタンザの'tow and halter'は絞首用の索のこと)。前のヴァージョンの'eels fried in a pan'が、こんどは'eels boiled in broth'(肉汁でゆでたウナギ)に変わり、あとに残す物の品目が多少変わるというだけで、大筋は変わらない。チャイルドの分類をあてはめるなら、はじめの5スタンザはDヴァージョン(*Minstrelsy of the Scottish Border*, 1803による)、あとの2スタンザはBヴァージョン(*Kinlock's Ancient Scottish Ballads*による)ということになる。マッコールは、このヴァージョンをスコットランドのパートシャー(Pertshire)出身の母親に習ったというが、短調と長調とを交錯させたその一種独特の荒涼とした哀感のこもった迫力ある歌いかたは、余人の追隨を許さないものがある。紙上に再現できないのは残念であるが、マッコールの歌いぶりに比べると、あとの歌手たちの「ロード・ランダル」からは、すべて美しすぎるか、やさしすぎるか、おだやかすぎる、といったような印象を受けるのである。

### ヴァージョン間の異同

現在伝わっているさまざまなヴァージョンのあいだのこまかい異同を並べてみても、あまり意味がないかもしれない。現実に伝承されている以上、変わるのは当然なのだから。ただ、このバラッドで恋人の毒殺に使われた食べもの(あるいは飲みもの)を並べてみると次のようになる(括弧の中は歌手)。eels boiled in broth (MacColl, Ritchie); eels boiled in brew (A. Moser); eels

7) *English and Scottish Folk Ballads*, Sung by A. L. Lloyd and Ewan MacColl (Topic Records, 12 T 103) より。

fried in eel-broth (Oscar Brand); fried eels and fried onions (F. Proffitt); eels fried in butter (S. Cleveland); a quart of cold poison (L. Older); a cup of cold poison (J. White) などなど。チャイルドが挙げている諸ヴァージョンには小さな魚 (wee wee fish) やマス (trout) が登場するが、圧倒的にウナギが優勢のようである。古いイタリア版もウナギになっている。しかし、なぜウナギがこの毒殺と結びつくかとなると、必ずしも明確でない。ウナギは古くから phallus のシンボルであり、「ロード・ランダル」に登場するウナギについてデ・ヴリース (Ad de Vries) はその『象徴とイメージャリの辞典』(1974)の中で 'the sexual connotations are obvious' (性的含意は明確である) と判定しているのだが、なにか阿部お定的な含意でもあるのだろうか、わたくしには、いっこうに「明確」でない。

殺害者についても、毒の種類と同じく、ヴァージョンによって異同がある。恋人 (true love あるいは sweet-heart) がいちばん多いが、継母も結構多いのである (チャイルドの J, L, M, N, O の各ヴァージョン)。祖母や妻も登場するから女性はすべて男性の加害者たりうる素質もっていると考えた方がいいのかもしれない。

### “The Croodin Doo” について

それはともかくとして、ここでもう一度このバラッドから派生した童謡へ戻ってみよう。オービー夫妻の童謡辞典とハリウエル編の童謡集にそれぞれ収録されている2スタンザの童謡が、このバラッドのGヴァージョンであることはすでに述べた。しかし、Gヴァージョン以外の形でもこのバラッドは童謡の世界に顔を出しているのである。たとえば同じオービー夫妻編の『オックスフォード童謡集』には “The Crooding Doo” (くーくー鳴く鳩) という唄が採録されている。第1スタンザを挙げてみる。

Where hae ye been a' the day,  
My bonny wee croodin doo?  
O I hae been at my stepmother's house;  
Make my bed, mammie, now, now, now!  
Make my bed, mammie, now.<sup>18)</sup>

(hae=have; a'=all; wee=little; croodin=cooing; doo=dove. 大意: 「一日中どこにいたの、わたしの可愛い子よ?」「ママ母のところにいたんだよ。ベッドを用意して、お母さん! いますぐ、いますぐ!」)。一読して「ロード・ランダル」の別形であることが分かる。第2

スタンザ以下、繰り返しの箇所を省けば次のようになる。

Where did ye get your dinner?  
I got it in my stepmother's.

What did she gie ye to your dinner?  
She ga'e me a little four-footed fish.

Where got she the four-footed fish?  
She got it down in yon well strand.

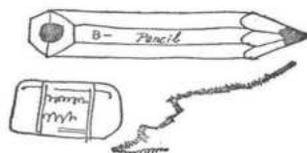
What did she do wi' the banes o't?  
She ga'e them to the little dog.

O what became o' the little dog?  
O it shot out its feet and died!

(語注: gie=give; ga'e=gave; four-footed fish=newt (?); well-strand=stream from a spring; wi'=with; banes o't=bones of it. 大意: 「食事をどこでとったの?」「ママ母のところですよ」「食事になにを出してもらったの?」「小さな4つ足の魚ですよ」「その4つ足の魚をどこでとってきたの?」「泉のところの小川からとってきたのです」「その骨をどうしたの?」「小犬にやりました」「小犬はどうなったの?」「腹ばいになって死にました!」) この「4つ足の魚」は多分イモリだろうと解されている。チャイルド教授の分類では、これはチェンバーズ (Chambers) 編の『スコットランド俗謡』にもとづくMヴァージョンになっている。オービー夫妻は、これでその『童謡辞典』(ONDR)にGヴァージョンを、『童謡集』(ONRB)にはMヴァージョンを、と「ロード・ランダル」のバラッドを再度「童謡」として登場させたわけである。ということは、オービー夫妻にとって、そしてまた19世紀のハリウエルにとっても、バラッドと童謡の境界線は、それほど割(?)然としたものでなかったということなのである。

もう一つ「ロード・ランダル」の系統を引く童謡に「ビリー・ボーイ」(Billy Boy) というのがあるが、それについては次回に考えてみることにしたい。(この項つづく) (東京大学教授)

8) ONRB, p. 203.



# Challenge & Response

広く読者の皆様が、時の話題、解決困難な問題等に challenge していただくための討論の広場として、本号から“Challenge and Response”欄を開設することになりました。

この欄の構成は、読者からの質問に答える形式のものと読者の意見を発表する形式のものからなり、その内容は英語教育問題に限らず、広く社会・文化・国際問題等の人文科学に属するすべての分野にわたることがらを扱うことにしております。

皆様から寄せられた質問に関しては上記7名の先生方にレギュラー解答者として健筆をふるっていただくことになっておりますが、問題によってはゲスト解答者の登場も考えております。

ふるってご質問およびご意見をお寄せいただきたく存じます。

## 「英語で考える」について

よく、英語上達には「英語で考える」のが一番だという意見があります。また、平泉渉氏は昨年8月、ELECでのパネル・ディスカッションで、英語を本当に勉強すると日本人としての identity が失なわれるという趣旨の発言をしておられます。この問題について、日本人が世界に向かって英語で自己主張することの重要性を常々説いておられる國弘正雄先生の見解をお伺いしたいと思えます。  
(神戸市・黒田道彦)

トインビー教授の Challenge and Response という用語にヒントを得たこのコラムだけあって、大へんな挑戦を受けました。ごもっともなお訊ねと思えます。

お訊ねは2つの部分、つまり「英語で考える」ということの是非、もしくは可能性の有無と、平泉議員の提言についての私の見解、の2つから成り立っているように思われます。

第1の点については、実は私もよく判らないのでし

## 担当

- 前田 陽一 (国際文化会館専務理事)  
西山 千 (国際コミュニケーター)  
太田 朗 (東京教育大学教授)  
平野 敬一 (東京大学教授)  
國弘 正雄 (国際商科大学教授)  
小林 祐子 (東京女子大学短大教授)  
松下 幸夫 (ELEC企画部長)

て、確固たるお答えはできないのですが、一応次のように考えています。

まず、私には、「英語で考える」というテーゼが、英語習得の到達目標、つまりあるべき、もしくはありうべき境涯を示すのか、それとも、その道程における具体的な方法を指すのか、必ずしも判然としない、という感じが拭えないのです。それも、「英語で考える」という説を長いこと唱えてこられた松本享博士の場合は、さすがに大先達の言として了解できる面が多いのですが、ふりの英米人、しかも母国語としてたまたま英語をしゃべるだけで、成人してから、いわば不自然な環境の中で人為的に外国語を身につけた原体験を有しない本国人が、きわめて気軽に think in English を口にする際には、何ともいえない「はぐらかされた」思いを抱かされるのです。

日本語といわず、スペイン語であれ、中国語であれ、外国語を大人になってから物にした英米人の言には重みがあります。われわれとほぼ同質の体験をしているからです。彼らの体験談には聞くべきものがあります。でも、単に英米人だからというだけの理由で、彼らのかいなでの発言にあまりに信をおきすぎるのは、見識不足も甚だしいと思うのです。もっとも、英人の故ハロルド・E. パーマーのように、正規の語学者で、この説を唱導していた人のあることも知らぬではありませんが、それにしてもスローガン化しすぎて、両者の区別ならびにハウの詰めがいささか甘いように私には受けとられます。

では到達目標としての「英語で考える」はどう考えるべきでしょうか。実はこの点に関して、かつて大脳生理学者の故時実利彦先生に伺ったことがあるのですが、言語と思考の関連についてはこの当代一流の碩学も、まだ判らないことだらけで、と頭をかいておられました。つまり平たくいうなら、人間が言語で考えるのかどうか、はっきりしないとされたのです。もし仮りに、人間が言語で考えないとすれば、この助詞は重要な意味を

もってきます。というのは、英語が明らかに一つの言語である以上、英語で考えることは日本人にとってもあり得ぬことになってしまうからです。ましてや英語にとっての外国人にそれが簡単にできるとも思われません。スローガン化した「英語で考える」に私が若干の留保を抱くのは、一つにはこういう背景があるのです。

しかし、この種の本質論はしばらくおくとして、到達目標としての「英語で考える」とは果して可能なのでしょうか。私も在日外国人や日本人学生に対し、英語で講演する折がままあります。一昨年はニューヨークの外交問題評議会 (Council on Foreign Relations) の日本セミナーに講師として招かれましたし、昨年は Japan Caravan を組織、全米5都市で25回ほど講演、NBC テレビで25分ほどのインタビューも受けました。私は講演の折に、原稿をつくとどうもうまくいかぬものですから、日本語であれ英語であれ簡単なメモ程度でそれ以上のことはしない流儀ですが、どうやら一通りの話ができるところからみると、確かにルーズな意味では「英語で考えて」いるのかもしれませんが、頭の中でいちいち和文英訳をしていないことは事実です。ですから松本享博士が、翻訳をはなれて英語を英語として、という意味あい、think in English をおっしゃっておられるのは納得できます。私が小著『英語の話しかた』の中で、一通り意味のわかった英文を繰り返し朗読もしくは筆写し、内部表現形式と外部表現形式の一体化を奨め、これこそが最大の「言語活動」である旨を訴えたのも、翻訳という作業を乗り越えんがための、具体的な方途としてでした。従来の訳読形式にあきたらぬものを覚えている点では、松本博士と同じ次元に在るとも確信しています。

ただ、これらの手続きを踏まずにやみくもに「英語で考える」といわれても、学習者、なかでも初心者には途方に暮れるのではありますまいか。そのあたりをはっきりさせることが、学習者に親切なゆえんではないでしょうか。どうやら「英語で考えている」らしくなるための、how-to をお互いに工夫しあいたいと思い、その一助として、私のささやかな原体験に基づいて、只管朗読、只管筆写ということを主張したのでした。

\* \* \*

ここで話題を平泉説に転じることにします。たしかに英語で話していると、何か、われならぬわれのあらわれ来て、という思いに捉えられます。それぞれのことばのもつ零囲気が明らかに異なるからです。英語の方が自己主張の強いことばであるともいえましょう。作家の安岡章太郎氏が、私も同席したあるNHK教養番組で、

「英語をしゃべるのは、何か自分を偽っているような気がするから嫌だ」とひとりごちておられたのも、この辺に原因がありましょう。よく判るような気がします。もっとも私は、「仮面をかぶる楽しみ」と言い換えることもできるではありませんか、と申し上げたのですが、そしてそれがひいては日常性の打破、さらには創造性の発揮にも連なるのではないかと、思われるのです。このあたりの事情については本誌73年の春季号で「ことばとコミュニケーション——日本人の場合を中心に」と題して長文をしたためましたし、昨年10月号の『国際問題』誌に「外交交渉と言語」というかなり長い論文を寄せてありますので、ご興味のある方はそちらにおつきいただきたく存じます。なお後者が入手不能の場合には、お申しこし下されば喜んでゼロックスコピーをお送り申し上げます。本誌の73年夏季号に転載された“Indigenous Barriers to Communication” (英文) も、あるいはご参考になるかもしれません。

それはとにかく、日英両語間の気分のちがいはたしかにありますし、言語的伝達のはたす社会的機能や、それへの評価が日本と英語国ではかなり違いますから、ある種の identity crisis が、とくは学習途上において惹起されうことは認めざるを得ぬように思います。

しかしここで1つの疑問と、1つの反論を平泉説に対して呈示しておきたいと思うのです。疑問とは、一体 identity crisis をおこすまでの集中的な学習が実際にいまの日本で行なわれているであろうか、という点です。私にはそうは思われたいのです。おそらく平泉議員は、大学のESSなどに蝸集しがちなペラペラ族を目して、そう呼んでおられるのでしょう。同氏の苦々しい思いは、私も完全に共有するところです。通じさえすればよい式の薄手の実用英語が横行しているのには、何ともやり切れぬ鬱憤を抱いている一人として、同氏の腹立たしさはよく判ります。でも、それは英語、ないしは外国語に限ったことでもありません。日本人の一大特性を、軽薄さへのエネルギーと措定したのは司馬遼太郎氏ですが、同種の現象は他の分野にもひしめいているではありませんか。

むしろ私としては、いまだ少し高級な次元で identity crisis を感ずる英学生が増えてくれることを、とりあえずは願います。横町の英会話に満足せずに、人間としての思いのたけを政治であれ経済であれ文化であれについて、identity crisis の苦渋を噛みしめながら、堂々と英語(なら英語)で表出できる若者が質量ともに増えてくれることを切望します。そしてその数は、たとえばESSのメンバーの中においてすら、徐々おもむろであっても

増えつつあることに、私はひそやかな喜びを覚えています。山本元師ではありませんが、「げに近ごろの若い者はなど申すまじ」なのです。テレビなどをやっているおかけ(?)で、彼らに接する機会は少なくないのですが、これが私の実感ですし、私は私なりにその方向に彼らを押し上げていければ、とも願っているのです。しかもこの種の新傾向が生まれつつある一つの理由は、どうやら裾野の伸び拡がりにあるようです。つまり、お早よう、こんにちわ次元のいわゆる英会話の普及とともに、それだけではどうしようもない、という認識が高まりつつあるらしいのです。であるとすれば、やはり裾野の拡大は望ましいことなのでしょう。量的な拡大は質をも変えていく、というのはやはり人の世の一つの公理であるらしく思われるのです。

とまれ、これらの若者もやがては胸突き八丁にさしかかり、語るべき内実の充実なしに、容れものだけの精緻化に浮身をやつすだけでは不十分なことに思い至り、自らの実存に深まり、自らをとりまく日本とかアジアとかに思いを潜めることにもなりましょう。それは identity crisis の克服ではないまでも、仏教語にいわゆる横超、哲学にいわゆるアウフヘーベンではあり得ましょう。西欧化した東洋人のお互いにとって、identity crisis は永遠につきまとう大問題でありつづけるだろうからです。

さいごに反論を一つ。明治百年を通じ、真の英語の達人の2人に、新渡戸稲造博士と故斎藤博駐米大使を数えることには、平泉議員も賛成して下さるでしょう。このお二人の英語はいまのお互いの域を遙かに超えていました。そのお二人が、それぞれ次のようにいっておられます。

英語学習の一つの意義は、国際場裡に日本の立場を説明主張する点にある。

英米人の真似をやめて、日本人の英語を活かしていくことが肝要である。

この先達の発言が identity crisis の見事な横超の例であると受けとるのは、私一人でしょうか。(國弘 正雄)

---

最近、幼児からの英語教育が流行していますが、その可否、または注意すべき点をご説明ください。

(豊川市・太田利男)

幼児に対する早期英語教育が叫ばれいろいろな教材・器具等も出版されているようですが、外国語学習には効果的なのでしょうか。欧米諸国での外国語の幼児早期教育の現状と合わせてお聞かせ願えれば幸甚に存じます。

(鹿児島市・石井雄三)

幼児の英語教育については、賛否両論が交されていますが、教育の方法と目的によって可否が決まるのではないかと思います。幼児が実際に英語その他の外国語を流暢に話せるように教育するのが目的であるのか、あるいは英語の発音、ヒアリング、語順などに親しみを覚える程度に慣らせて、中学・高等学校の英語教育に備えるためであるか、目的によって論じ方もかわってきます。

英語を自由に話したり読み書きできるようになるためには、幼児から英語の環境のなかで育てると有利ですし、また一般の学科まで英語で勉強させ、成人になるまでか、少なくとも高校卒の年齢まで続ける必要があるでしょう。もちろん日本国内なら日本語も並行して身につける必要もあります。そういう例は、たとえば在京の外人を主として教育しているアメリカン・スクールなどの生徒に見られます。しかし、外国人の場合は、幼児から英語を身につけ、学校も家庭も英語かその他の外国語を使っているから、日本語はあまり上手にならない者が多いようです。日本人なら、家庭で日本語を使うし、多くの日本人と話し合う機会があるから、それほど日本語の上達の妨げにはならないでしょう。ただ大学へ進学するための受験問題は残ります。

また、以上ほど完全に英語による育成に専念しなくても、学齢になっても続けて英語を使うように教育をある程度英語中心にできれば、かなり英語を使えるようになります。

多くの場合は、このように幼児のときから英語を話せるようにさせる目的でなく、英語教育によって中高校の勉強に備える目的を考えると十分ではないかと思えます。幼児のときから英語を聞き慣れていると、ヒアリングや発音の大きな助けになります。また単語の順序も自然に知るようになります。

幼児はもちろん、学童でも興味がなければ学ぼうとしません。いやいやながら勉強させては、効果はありません。「英語を学ぶ」という意識でなく、遊ぶときも物事を知るためにも「英語ということばを通じて」知りたいこと、やりたいことができるという意識が大切だと思います。子供は好奇心満ちて、「知りたい」という気持や、「やりたい」という気持で一杯です。それに必要なコミュニケーションなら、幼児は自分なりに身につけるでしょう。それだから日本人の幼児は2歳から4歳ぐらいまでに日本語をかなりよく話せるようになります。英語もそのようにして身につけられたら理想的ですが、仮にそのような環境がなくても、ある程度英語の環境を作ってやることのできるでしょう。

テレビ番組の「セサミストリート」のように、児童

が楽しめる英語の番組があります。また幼児のときからテープなどで英語を聞かせることもできます。ラジオ放送もあります。ただ英語を教えるテレビ番組などは、幼児に役立つかどうかは、わかりません。もちろん native speakers の英語を聞かせる必要があります。

日本語と英語は全く異なった言語であって、その両語を対応させること、つまり完全に単語と単語を対訳するとか、語句と語句を1対1に対応させることはできません。フランス語やドイツ語、スペイン語、イタリア語などと英語は類似の語源があります。したがって外国でことばを教えている方法が、日本において英語を教える方法に適するかどうかは、まだ論議の余地がありそうです。

「幼児のときから、わざわざ英語で苦勞させる必要はない。むしろ有害だ。そうでなくても日本語の勉強で十分だ」という意見を聞くことがあります。私見ですが、「苦勞させる」なら有害でしょう。ただ幼児は、なにを「苦勞」と感じ、なにを「おもしろい」と思うかが問題です。なんら苦を感じないで、驚くような能力を発揮するのが子供です。多くの場合、大人は子供を大人の考え方で評価しようとするから失敗するのではないのでしょうか。(西山 千)

I. 大脳生理学によりますと、人間の言語習得能力は比較的早く発達成熟して、しだいに凋落するといわれています。母国語の場合には、その習得は幼児期にひととおり終わってしまいます。しかしなお12歳くらいまでは言語の習得能力はまだひじょうに柔軟さを保っているといわれています。従って外国語の学習についても、言語の習得に柔軟さを保っている間に始めたほうがよいと考えられます。この意味で幼児の英語教育は、やり方さえ正しければ原則的に良いことだと言えます。わが国の公立学校ではふつう中学校から始めていますが、上述の観点から言えば、開始年齢をもっと引き下げることが望ましいと考えられます。

原則的には幼時からの英語教育は良いことだとは言えても、学習条件が整っていなければなりません。それは正しい英語を正しい方法で学ぶということです。もしもこの条件が欠けていると、弊害を生じるおそれさえありますから注意を要します。以下幼児からの英語教育についてその有利な点、不利な点、および注意すべきおもしろな事柄を考えてみましょう。

1. 幼児の耳は驚くほど鋭敏で、口はすばらしく柔軟ですから、英語の音声を正しく聞き取って正しく発音することが、極めて容易にごく自然にできます。この

ことが早期言語学習にとっての最大の利点です。従ってこの時期には、特にことばを音声として教えることが大切です。教師はよい発音のモデルを示すことのできる人でなければなりません。ネーティブスピーカー（英語を母国語とする人）の正しい発音を繰り返し聞かせ、口に出して言わせて習慣づけてやることです。最初に悪いくせがついたらなかなか直りませんから、習う英語は正しい発音でなければなりません。

2. 幼児期はまだ心身が未発達ですから、負担過重にならないように注意しなければなりません。大人の考えからあまり大きな効果をねらっても無理です。また子供自身は英語学習の必要を直接感じていないのがふつうでしょうから、子供が興味をもって学習できるようにしなければなりません。子供の生活は遊びが中心ですから、遊びを通して学習が行なわれるように仕組むことです。歌とかゲームとか劇とか、遊びを主として、楽しく学べるように指導することが大切です。環境から身をもって吸収するように仕組むことです。

3. 早期から英語学習を始めても、途中で止めてしまっただけは何にもなりませんから、やる以上は継続することが大切です。中学校に入る頃まで続けて、中断しないようにすることです。また幼児期から長期にわたって学習を継続する場合、せっかくの学習がむだにならないようにするためには、一貫したカリキュラムまたは学習計画がなくてはいけません。理想的に言うなら、早期教育を受けた者と、中学校で初めて学習する者とは、異なったカリキュラムであるべきです。学校でこのことができない場合には、ほかで考えなければなりません。

単に流行だからやるというのではなくて、やるなら真剣に続けてやること、そうして正しい方法でやることです。そうでなければ時間と精力と費用の浪費になるおそれがあります。

II. 最近いろいろな視聴覚教材・教具が開発されて、英語教育にもずいぶん利用されています。特に録音教材、テープレコーダーは音声言語の学習にとって最も役立っているものでしょう。早期英語教育では、特に音声言語としての教育が行なわれなければなりませんから、ネーティブスピーカーの吹込んだ録音教材は、必要不可欠と言っても言い過ぎではないでしょう。このほかに絵画、実物、チャートおよびゲームのための用具なども必要でしょう。幼児の場合は、遊びの中からいろいろなことを覚えていきますから、英語の学習も遊びの中に組み込んで、歌とかゲームなどを通して楽しみながら覚えさすようにしなければなりません。そのためには、いろいろな

教材・教具が必要になってきます。もちろんこれらの教材も教具も、指導者の用い方によって、効果が著しく異なってまいります。必ずしも高価な器具が有効とは限りません。指導者さえ優れておれば、絵や指人形のような簡単な物ですばらしい効果をあげることができます。これらの教材・教具は、あくまでも学習の補助的手段ですから、これを生かすか否かは使う人、指導者の腕次第ということになります。

欧米諸国の幼児早期教育については、わが国のように単一言語、単一民族というのとは異なって、複数の言語、複数の民族で構成されている国が多いので、わが国とは事情がたいへん違っています。例えば、スイスではドイツ語、フランス語、イタリア語の3つの言語が公用語となっていますし、カナダでは英語とフランス語の2か国語が公用語となっています。ひとつの国の国語として、このようにいくつもの言語が同時に用いられている国々もありますし、そうでないまでも、アメリカやソ連などのように多くの民族を容れている国々では、社会環境を通して、いくつもの言語に幼児期から接触する機会が多いのは当然です。従ってこれらの国々では、外国語 (Foreign Language) としてよりはむしろ第2言語 (Second Language) として、幼時から早期教育が行なわれることが必要とされる場合が多いわけです。そうした必要に応じて、多くは自主的に行なわれているわけですが、公教育においても、アメリカでは小学校4年生から、ソ連では5年生から外国語教育が実施され、それぞれ効果をあげています。その他のヨーロッパの国々においても、それぞれの国情に即して行なわれているわけですが、まだその状況はアメリカやソ連ほどには進んでいないものようです。 (松下 幸夫)

---

30歳より英会話を始めて年齢的に遅いでしょうか。ある教育雑誌で外国語の取得は年齢的に遅くは無理という記事をみて非常に悲嘆しています。しかし、外国語の取得は非常に大事であり、それを取得することによって大きい視野が開けると確信している者です。60歳すぎて通訳ガイドの資格をとられた方がありと知りその努力に敬服しております。

もし、30歳すぎて英会話 (外国語全般) の学習を始めたとした場合、若い人達 (15歳~25歳) に負けないようにするには、努力のほかに何か効果的な学習方法がありましたらご教示願います。 (山口県萩市・斎藤良次)

---

年齢と外国語の習得力の関係は、評価の基準をなににおくかによって異なると思います。目的によっては、30

歳以上になって、社会経験と知識を豊富に身につけていた方が、若年層より有利な場合もあるでしょう。

ただ記憶力、発音などの点では若いときから英語を身につける方が効果的であることは確かです。発音は子供のときから英語を話していれば、英語国民と同じような発音ができるようになります。また英語の環境のなかで生長すれば、英語国民と同様自然な英語を話したり書いたりすることができます。

しかし30歳以上でなくても、20歳程度になってから英語を身につけたら、英語国民の発音でなく、なまりを大なり小なり覚悟しなければならぬでしょう。ところが今や英語はアメリカ人やイギリス人だけのことばかりではありません。アフリカ、アジアなどでも英語が国語ないし第2国語として使われている国があります。英語は全く国際語になっていて、「標準の発音」というものはありません。各民族それぞれ特有の英語の発音を必然的にするようになっていきます。もちろん相手にわかるように発音しなければなりません。わかってもらえさえすれば日本人なまりの英語の発音で結構です。

30歳以上の方の効果的な学習方法があるかどうか、無経験の私にはわかりません。ただ、日本語ということばで言語力が固まってしまった方なら、年齢を問わず「できるだけ日本語に頼らず、英語を全く新しい信号方式と考えて言語的に白紙の気持ちで取り組むように」と申し上げたいのです。たとえば、英和辞典は単語の意味の手がかりにするだけで、和訳を日本語の意味で受けとったら、それが100パーセント英語の意味と思わないように注意する必要があります。またある程度英語がわかるようになったら、それからは新しい単語は英語だけの辞書を引いて、英語で表現されている定義によって意味を考えると、日本語に訳そうとしないことが大切です。英語しかわからない英語国民の子供は、英語の辞書の定義に頼る以外に方法がありません。そして定義の文章にわからない単語があったら、それをまた辞書のなかで調べます。そのように語数の知識を増やします。日本人もその同じ方法をできるだけ使用すべきでしょう。

30歳以上なら、なにか自分の専門の知識があるでしょう。その専門分野の英語の記事や書籍を読むことも、一面の助けになります。それも、はじめから専門分野の高度のものでなく、初歩的なものや基礎的なものを読むことから徐々に高度のものへ移るようにするとよいと思います。

会話は、自分から積極的に話すようにしなければ、何年勉強しても向上しません。文法を間違える恐れや、単語の適否の心配をして考え込んだり、日本語で文章を考

えて、それを頭のなかで英語に訳してから話そうとしたのではだめです。句や文章は、その構造を自然に話せるように、型を練習して考えなくても口から出るように身につけなければなりません。テニスのラケットの振り方やゴルフのドライブの練習のように、空振りで体全体が自然に正しい動きをするように型を身につけると似ています。日本語は子供のときからそのように考えずに話せるように、型が身につけているわけです。それを、成人になって、英語についてやらなければならないから、この「ことばの空振りの練習」はなおさら大切です。

その他言語教育の専門家に聞いていただけると、私よりもっと有効なご意見もあると思います。

(西山 千)

ご質問を通して英語の学習に対するご熱意のほどが伺え敬服します。勉強はいつからでも思い立ったら迷わずすぐお始めになるのがよいと思います。「年齢的に遅くは無理」ということばに悲観なさる必要はありません。年齢的に遅く始めると不利な面があるというだけのことです。最近、特に実業界の人々の間では外国との取引や交流が盛んになるにつれて40歳、50歳を過ぎてから必要にせまられて勉強を始めている人々が大勢おります。それらの方々には年齢的なハンディキャップはあっても、それぞれ努力相応に効果をあげて目的を達しております。そういった方々にくらべると30歳という年齢はまだまだ若いと言えます。若さに自信をもって大いに勉強してください。勉強には暦年齢よりも精神年齢が問題です。同一年齢の人々の間でも、肉体的のみならず精神面の若さにおいては著しい個人差もありますので、若さを保つようにつとめることも必要でしょう。

言語の学習には音声面と文法の面とがあります。発音の学習には年齢が若いほど有利です。幼児は耳が鋭敏で口が柔軟ですから理屈抜きで覚えることができます。しかし文法構造の学習についてはむしろある程度年をとっている者のほうが有利です。成人は論理的に発達していますが、柔軟性が少なくなっていますから、発音や機械的な暗記には不利ですが、論理的な学習には有利と言えます。従って発音や機械的な暗記の場合でも、しばしば説明や前後関係など論理で補うことができます。ことばの学習で最も重要なのは、言語構造の体得ということですから理解が先ず第一で、つづいて習熟するまで反復練習しなければなりません。近頃は録音テープや小型のテープレコーダーなどの便利なものができていますから、このような教育機器を利用するとよいでしょう。できれば会話学校などに通ったり、よい先生につくことを

おすすめしたいですが、その場合でもテープでの練習をできるだけ時間を利用して併用されるとよいでしょう。学校に通ったり、先生につくことができない場合でも、ラジオやテレビなどの英語放送番組を利用したり、同時にテープによる練習を併用したりすれば、効果を上げることができます。若い人よりも年齢的なハンディキャップのあることは認めないわけにはいきませんが、それを補うためにはやはり努力以外にはないでしょう。苦しくとも若い人よりもより多くの努力をする覚悟が必要でしょう。(松下 幸夫)

---

日本語のように複雑ではないにしても、英語にも敬語とか丁寧語などがあると思います。以下の点についてご教示ください。

1. 語法またはイントネーションに違いがあるのでしょうか。
2. 例えば「知らない」という場合は、全て“I don't know.”となるのでしょうか。その場合文章中の会話を日本語に訳すためには、前後関係から判断する以外に方法はないのでしょうか。

(岡山市・竹中京子)

---

英語には、相手や場面に応じて、丁寧な口のきき方をしたいとき、どんな表現手段があるのか、というのが質問者の一番知りたいところでしょう。そこで、日英両語の「敬語表現」の特徴的違いをかいつままで説明しながら、順次、質問1、2に答えていきたいと思います。

日本語では、人と話をするとき、話題は何であれ、常に敬語を可能な表現の一つとして意識せざるを得ない仕組になっています。「 $1 + 1 = 2$ 」という客観的な事実には、 $1 + 1 = 2$ 、 $1 + 2 = 3$ 、 $2 + 2 = 4$ 、 $2 + 3 = 5$ 、 $2 + 4 = 6$ 、 $2 + 5 = 7$ 、 $2 + 6 = 8$ 、 $2 + 7 = 9$ 、 $2 + 8 = 10$ 、 $2 + 9 = 11$ 、 $2 + 10 = 12$ 、 $2 + 11 = 13$ 、 $2 + 12 = 14$ 、 $2 + 13 = 15$ 、 $2 + 14 = 16$ 、 $2 + 15 = 17$ 、 $2 + 16 = 18$ 、 $2 + 17 = 19$ 、 $2 + 18 = 20$ 、 $2 + 19 = 21$ 、 $2 + 20 = 22$ 、 $2 + 21 = 23$ 、 $2 + 22 = 24$ 、 $2 + 23 = 25$ 、 $2 + 24 = 26$ 、 $2 + 25 = 27$ 、 $2 + 26 = 28$ 、 $2 + 27 = 29$ 、 $2 + 28 = 30$ 、 $2 + 29 = 31$ 、 $2 + 30 = 32$ 、 $2 + 31 = 33$ 、 $2 + 32 = 34$ 、 $2 + 33 = 35$ 、 $2 + 34 = 36$ 、 $2 + 35 = 37$ 、 $2 + 36 = 38$ 、 $2 + 37 = 39$ 、 $2 + 38 = 40$ 、 $2 + 39 = 41$ 、 $2 + 40 = 42$ 、 $2 + 41 = 43$ 、 $2 + 42 = 44$ 、 $2 + 43 = 45$ 、 $2 + 44 = 46$ 、 $2 + 45 = 47$ 、 $2 + 46 = 48$ 、 $2 + 47 = 49$ 、 $2 + 48 = 50$ 、 $2 + 49 = 51$ 、 $2 + 50 = 52$ 、 $2 + 51 = 53$ 、 $2 + 52 = 54$ 、 $2 + 53 = 55$ 、 $2 + 54 = 56$ 、 $2 + 55 = 57$ 、 $2 + 56 = 58$ 、 $2 + 57 = 59$ 、 $2 + 58 = 60$ 、 $2 + 59 = 61$ 、 $2 + 60 = 62$ 、 $2 + 61 = 63$ 、 $2 + 62 = 64$ 、 $2 + 63 = 65$ 、 $2 + 64 = 66$ 、 $2 + 65 = 67$ 、 $2 + 66 = 68$ 、 $2 + 67 = 69$ 、 $2 + 68 = 70$ 、 $2 + 69 = 71$ 、 $2 + 70 = 72$ 、 $2 + 71 = 73$ 、 $2 + 72 = 74$ 、 $2 + 73 = 75$ 、 $2 + 74 = 76$ 、 $2 + 75 = 77$ 、 $2 + 76 = 78$ 、 $2 + 77 = 79$ 、 $2 + 78 = 80$ 、 $2 + 79 = 81$ 、 $2 + 80 = 82$ 、 $2 + 81 = 83$ 、 $2 + 82 = 84$ 、 $2 + 83 = 85$ 、 $2 + 84 = 86$ 、 $2 + 85 = 87$ 、 $2 + 86 = 88$ 、 $2 + 87 = 89$ 、 $2 + 88 = 90$ 、 $2 + 89 = 91$ 、 $2 + 90 = 92$ 、 $2 + 91 = 93$ 、 $2 + 92 = 94$ 、 $2 + 93 = 95$ 、 $2 + 94 = 96$ 、 $2 + 95 = 97$ 、 $2 + 96 = 98$ 、 $2 + 97 = 99$ 、 $2 + 98 = 100$ 、 $2 + 99 = 101$ 、 $2 + 100 = 102$ 、 $2 + 101 = 103$ 、 $2 + 102 = 104$ 、 $2 + 103 = 105$ 、 $2 + 104 = 106$ 、 $2 + 105 = 107$ 、 $2 + 106 = 108$ 、 $2 + 107 = 109$ 、 $2 + 108 = 110$ 、 $2 + 109 = 111$ 、 $2 + 110 = 112$ 、 $2 + 111 = 113$ 、 $2 + 112 = 114$ 、 $2 + 113 = 115$ 、 $2 + 114 = 116$ 、 $2 + 115 = 117$ 、 $2 + 116 = 118$ 、 $2 + 117 = 119$ 、 $2 + 118 = 120$ 、 $2 + 119 = 121$ 、 $2 + 120 = 122$ 、 $2 + 121 = 123$ 、 $2 + 122 = 124$ 、 $2 + 123 = 125$ 、 $2 + 124 = 126$ 、 $2 + 125 = 127$ 、 $2 + 126 = 128$ 、 $2 + 127 = 129$ 、 $2 + 128 = 130$ 、 $2 + 129 = 131$ 、 $2 + 130 = 132$ 、 $2 + 131 = 133$ 、 $2 + 132 = 134$ 、 $2 + 133 = 135$ 、 $2 + 134 = 136$ 、 $2 + 135 = 137$ 、 $2 + 136 = 138$ 、 $2 + 137 = 139$ 、 $2 + 138 = 140$ 、 $2 + 139 = 141$ 、 $2 + 140 = 142$ 、 $2 + 141 = 143$ 、 $2 + 142 = 144$ 、 $2 + 143 = 145$ 、 $2 + 144 = 146$ 、 $2 + 145 = 147$ 、 $2 + 146 = 148$ 、 $2 + 147 = 149$ 、 $2 + 148 = 150$ 、 $2 + 149 = 151$ 、 $2 + 150 = 152$ 、 $2 + 151 = 153$ 、 $2 + 152 = 154$ 、 $2 + 153 = 155$ 、 $2 + 154 = 156$ 、 $2 + 155 = 157$ 、 $2 + 156 = 158$ 、 $2 + 157 = 159$ 、 $2 + 158 = 160$ 、 $2 + 159 = 161$ 、 $2 + 160 = 162$ 、 $2 + 161 = 163$ 、 $2 + 162 = 164$ 、 $2 + 163 = 165$ 、 $2 + 164 = 166$ 、 $2 + 165 = 167$ 、 $2 + 166 = 168$ 、 $2 + 167 = 169$ 、 $2 + 168 = 170$ 、 $2 + 169 = 171$ 、 $2 + 170 = 172$ 、 $2 + 171 = 173$ 、 $2 + 172 = 174$ 、 $2 + 173 = 175$ 、 $2 + 174 = 176$ 、 $2 + 175 = 177$ 、 $2 + 176 = 178$ 、 $2 + 177 = 179$ 、 $2 + 178 = 180$ 、 $2 + 179 = 181$ 、 $2 + 180 = 182$ 、 $2 + 181 = 183$ 、 $2 + 182 = 184$ 、 $2 + 183 = 185$ 、 $2 + 184 = 186$ 、 $2 + 185 = 187$ 、 $2 + 186 = 188$ 、 $2 + 187 = 189$ 、 $2 + 188 = 190$ 、 $2 + 189 = 191$ 、 $2 + 190 = 192$ 、 $2 + 191 = 193$ 、 $2 + 192 = 194$ 、 $2 + 193 = 195$ 、 $2 + 194 = 196$ 、 $2 + 195 = 197$ 、 $2 + 196 = 198$ 、 $2 + 197 = 199$ 、 $2 + 198 = 200$ 、 $2 + 199 = 201$ 、 $2 + 200 = 202$ 、 $2 + 201 = 203$ 、 $2 + 202 = 204$ 、 $2 + 203 = 205$ 、 $2 + 204 = 206$ 、 $2 + 205 = 207$ 、 $2 + 206 = 208$ 、 $2 + 207 = 209$ 、 $2 + 208 = 210$ 、 $2 + 209 = 211$ 、 $2 + 210 = 212$ 、 $2 + 211 = 213$ 、 $2 + 212 = 214$ 、 $2 + 213 = 215$ 、 $2 + 214 = 216$ 、 $2 + 215 = 217$ 、 $2 + 216 = 218$ 、 $2 + 217 = 219$ 、 $2 + 218 = 220$ 、 $2 + 219 = 221$ 、 $2 + 220 = 222$ 、 $2 + 221 = 223$ 、 $2 + 222 = 224$ 、 $2 + 223 = 225$ 、 $2 + 224 = 226$ 、 $2 + 225 = 227$ 、 $2 + 226 = 228$ 、 $2 + 227 = 229$ 、 $2 + 228 = 230$ 、 $2 + 229 = 231$ 、 $2 + 230 = 232$ 、 $2 + 231 = 233$ 、 $2 + 232 = 234$ 、 $2 + 233 = 235$ 、 $2 + 234 = 236$ 、 $2 + 235 = 237$ 、 $2 + 236 = 238$ 、 $2 + 237 = 239$ 、 $2 + 238 = 240$ 、 $2 + 239 = 241$ 、 $2 + 240 = 242$ 、 $2 + 241 = 243$ 、 $2 + 242 = 244$ 、 $2 + 243 = 245$ 、 $2 + 244 = 246$ 、 $2 + 245 = 247$ 、 $2 + 246 = 248$ 、 $2 + 247 = 249$ 、 $2 + 248 = 250$ 、 $2 + 249 = 251$ 、 $2 + 250 = 252$ 、 $2 + 251 = 253$ 、 $2 + 252 = 254$ 、 $2 + 253 = 255$ 、 $2 + 254 = 256$ 、 $2 + 255 = 257$ 、 $2 + 256 = 258$ 、 $2 + 257 = 259$ 、 $2 + 258 = 260$ 、 $2 + 259 = 261$ 、 $2 + 260 = 262$ 、 $2 + 261 = 263$ 、 $2 + 262 = 264$ 、 $2 + 263 = 265$ 、 $2 + 264 = 266$ 、 $2 + 265 = 267$ 、 $2 + 266 = 268$ 、 $2 + 267 = 269$ 、 $2 + 268 = 270$ 、 $2 + 269 = 271$ 、 $2 + 270 = 272$ 、 $2 + 271 = 273$ 、 $2 + 272 = 274$ 、 $2 + 273 = 275$ 、 $2 + 274 = 276$ 、 $2 + 275 = 277$ 、 $2 + 276 = 278$ 、 $2 + 277 = 279$ 、 $2 + 278 = 280$ 、 $2 + 279 = 281$ 、 $2 + 280 = 282$ 、 $2 + 281 = 283$ 、 $2 + 282 = 284$ 、 $2 + 283 = 285$ 、 $2 + 284 = 286$ 、 $2 + 285 = 287$ 、 $2 + 286 = 288$ 、 $2 + 287 = 289$ 、 $2 + 288 = 290$ 、 $2 + 289 = 291$ 、 $2 + 290 = 292$ 、 $2 + 291 = 293$ 、 $2 + 292 = 294$ 、 $2 + 293 = 295$ 、 $2 + 294 = 296$ 、 $2 + 295 = 297$ 、 $2 + 296 = 298$ 、 $2 + 297 = 299$ 、 $2 + 298 = 300$ 、 $2 + 299 = 301$ 、 $2 + 300 = 302$ 、 $2 + 301 = 303$ 、 $2 + 302 = 304$ 、 $2 + 303 = 305$ 、 $2 + 304 = 306$ 、 $2 + 305 = 307$ 、 $2 + 306 = 308$ 、 $2 + 307 = 309$ 、 $2 + 308 = 310$ 、 $2 + 309 = 311$ 、 $2 + 310 = 312$ 、 $2 + 311 = 313$ 、 $2 + 312 = 314$ 、 $2 + 313 = 315$ 、 $2 + 314 = 316$ 、 $2 + 315 = 317$ 、 $2 + 316 = 318$ 、 $2 + 317 = 319$ 、 $2 + 318 = 320$ 、 $2 + 319 = 321$ 、 $2 + 320 = 322$ 、 $2 + 321 = 323$ 、 $2 + 322 = 324$ 、 $2 + 323 = 325$ 、 $2 + 324 = 326$ 、 $2 + 325 = 327$ 、 $2 + 326 = 328$ 、 $2 + 327 = 329$ 、 $2 + 328 = 330$ 、 $2 + 329 = 331$ 、 $2 + 330 = 332$ 、 $2 + 331 = 333$ 、 $2 + 332 = 334$ 、 $2 + 333 = 335$ 、 $2 + 334 = 336$ 、 $2 + 335 = 337$ 、 $2 + 336 = 338$ 、 $2 + 337 = 339$ 、 $2 + 338 = 340$ 、 $2 + 339 = 341$ 、 $2 + 340 = 342$ 、 $2 + 341 = 343$ 、 $2 + 342 = 344$ 、 $2 + 343 = 345$ 、 $2 + 344 = 346$ 、 $2 + 345 = 347$ 、 $2 + 346 = 348$ 、 $2 + 347 = 349$ 、 $2 + 348 = 350$ 、 $2 + 349 = 351$ 、 $2 + 350 = 352$ 、 $2 + 351 = 353$ 、 $2 + 352 = 354$ 、 $2 + 353 = 355$ 、 $2 + 354 = 356$ 、 $2 + 355 = 357$ 、 $2 + 356 = 358$ 、 $2 + 357 = 359$ 、 $2 + 358 = 360$ 、 $2 + 359 = 361$ 、 $2 + 360 = 362$ 、 $2 + 361 = 363$ 、 $2 + 362 = 364$ 、 $2 + 363 = 365$ 、 $2 + 364 = 366$ 、 $2 + 365 = 367$ 、 $2 + 366 = 368$ 、 $2 + 367 = 369$ 、 $2 + 368 = 370$ 、 $2 + 369 = 371$ 、 $2 + 370 = 372$ 、 $2 + 371 = 373$ 、 $2 + 372 = 374$ 、 $2 + 373 = 375$ 、 $2 + 374 = 376$ 、 $2 + 375 = 377$ 、 $2 + 376 = 378$ 、 $2 + 377 = 379$ 、 $2 + 378 = 380$ 、 $2 + 379 = 381$ 、 $2 + 380 = 382$ 、 $2 + 381 = 383$ 、 $2 + 382 = 384$ 、 $2 + 383 = 385$ 、 $2 + 384 = 386$ 、 $2 + 385 = 387$ 、 $2 + 386 = 388$ 、 $2 + 387 = 389$ 、 $2 + 388 = 390$ 、 $2 + 389 = 391$ 、 $2 + 390 = 392$ 、 $2 + 391 = 393$ 、 $2 + 392 = 394$ 、 $2 + 393 = 395$ 、 $2 + 394 = 396$ 、 $2 + 395 = 397$ 、 $2 + 396 = 398$ 、 $2 + 397 = 399$ 、 $2 + 398 = 400$ 、 $2 + 399 = 401$ 、 $2 + 400 = 402$ 、 $2 + 401 = 403$ 、 $2 + 402 = 404$ 、 $2 + 403 = 405$ 、 $2 + 404 = 406$ 、 $2 + 405 = 407$ 、 $2 + 406 = 408$ 、 $2 + 407 = 409$ 、 $2 + 408 = 410$ 、 $2 + 409 = 411$ 、 $2 + 410 = 412$ 、 $2 + 411 = 413$ 、 $2 + 412 = 414$ 、 $2 + 413 = 415$ 、 $2 + 414 = 416$ 、 $2 + 415 = 417$ 、 $2 + 416 = 418$ 、 $2 + 417 = 419$ 、 $2 + 418 = 420$ 、 $2 + 419 = 421$ 、 $2 + 420 = 422$ 、 $2 + 421 = 423$ 、 $2 + 422 = 424$ 、 $2 + 423 = 425$ 、 $2 + 424 = 426$ 、 $2 + 425 = 427$ 、 $2 + 426 = 428$ 、 $2 + 427 = 429$ 、 $2 + 428 = 430$ 、 $2 + 429 = 431$ 、 $2 + 430 = 432$ 、 $2 + 431 = 433$ 、 $2 + 432 = 434$ 、 $2 + 433 = 435$ 、 $2 + 434 = 436$ 、 $2 + 435 = 437$ 、 $2 + 436 = 438$ 、 $2 + 437 = 439$ 、 $2 + 438 = 440$ 、 $2 + 439 = 441$ 、 $2 + 440 = 442$ 、 $2 + 441 = 443$ 、 $2 + 442 = 444$ 、 $2 + 443 = 445$ 、 $2 + 444 = 446$ 、 $2 + 445 = 447$ 、 $2 + 446 = 448$ 、 $2 + 447 = 449$ 、 $2 + 448 = 450$ 、 $2 + 449 = 451$ 、 $2 + 450 = 452$ 、 $2 + 451 = 453$ 、 $2 + 452 = 454$ 、 $2 + 453 = 455$ 、 $2 + 454 = 456$ 、 $2 + 455 = 457$ 、 $2 + 456 = 458$ 、 $2 + 457 = 459$ 、 $2 + 458 = 460$ 、 $2 + 459 = 461$ 、 $2 + 460 = 462$ 、 $2 + 461 = 463$ 、 $2 + 462 = 464$ 、 $2 + 463 = 465$ 、 $2 + 464 = 466$ 、 $2 + 465 = 467$ 、 $2 + 466 = 468$ 、 $2 + 467 = 469$ 、 $2 + 468 = 470$ 、 $2 + 469 = 471$ 、 $2 + 470 = 472$ 、 $2 + 471 = 473$ 、 $2 + 472 = 474$ 、 $2 + 473 = 475$ 、 $2 + 474 = 476$ 、 $2 + 475 = 477$ 、 $2 + 476 = 478$ 、 $2 + 477 = 479$ 、 $2 + 478 = 480$ 、 $2 + 479 = 481$ 、 $2 + 480 = 482$ 、 $2 + 481 = 483$ 、 $2 + 482 = 484$ 、 $2 + 483 = 485$ 、 $2 + 484 = 486$ 、 $2 + 485 = 487$ 、 $2 + 486 = 488$ 、 $2 + 487 = 489$ 、 $2 + 488 = 490$ 、 $2 + 489 = 491$ 、 $2 + 490 = 492$ 、 $2 + 491 = 493$ 、 $2 + 492 = 494$ 、 $2 + 493 = 495$ 、 $2 + 494 = 496$ 、 $2 + 495 = 497$ 、 $2 + 496 = 498$ 、 $2 + 497 = 499$ 、 $2 + 498 = 500$ 、 $2 + 499 = 501$ 、 $2 + 500 = 502$ 、 $2 + 501 = 503$ 、 $2 + 502 = 504$ 、 $2 + 503 = 505$ 、 $2 + 504 = 506$ 、 $2 + 505 = 507$ 、 $2 + 506 = 508$ 、 $2 + 507 = 509$ 、 $2 + 508 = 510$ 、 $2 + 509 = 511$ 、 $2 + 510 = 512$ 、 $2 + 511 = 513$ 、 $2 + 512 = 514$ 、 $2 + 513 = 515$ 、 $2 + 514 = 516$ 、 $2 + 515 = 517$ 、 $2 + 516 = 518$ 、 $2 + 517 = 519$ 、 $2 + 518 = 520$ 、 $2 + 519 = 521$ 、 $2 + 520 = 522$ 、 $2 + 521 = 523$ 、 $2 + 522 = 524$ 、 $2 + 523 = 525$ 、 $2 + 524 = 526$ 、 $2 + 525 = 527$ 、 $2 + 526 = 528$ 、 $2 + 527 = 529$ 、 $2 + 528 = 530$ 、 $2 + 529 = 531$ 、 $2 + 530 = 532$ 、 $2 + 531 = 533$ 、 $2 + 532 = 534$ 、 $2 + 533 = 535$ 、 $2 + 534 = 536$ 、 $2 + 535 = 537$ 、 $2 + 536 = 538$ 、 $2 + 537 = 539$ 、 $2 + 538 = 540$ 、 $2 + 539 = 541$ 、 $2 + 540 = 542$ 、 $2 + 541 = 543$ 、 $2 + 542 = 544$ 、 $2 + 543 = 545$ 、 $2 + 544 = 546$ 、 $2 + 545 = 547$ 、 $2 + 546 = 548$ 、 $2 + 547 = 549$ 、 $2 + 548 = 550$ 、 $2 + 549 = 551$ 、 $2 + 550 = 552$ 、 $2 + 551 = 553$ 、 $2 + 552 = 554$ 、 $2 + 553 = 555$ 、 $2 + 554 = 556$ 、 $2 + 555 = 557$ 、 $2 + 556 = 558$ 、 $2 + 557 = 559$ 、 $2 + 558 = 560$ 、 $2 + 559 = 561$ 、 $2 + 560 = 562$ 、 $2 + 561 = 563$ 、 $2 + 562 = 564$ 、 $2 + 563 = 565$ 、 $2 + 564 = 566$ 、 $2 + 565 = 567$ 、 $2 + 566 = 568$ 、 $2 + 567 = 569$ 、 $2 + 568 = 570$ 、 $2 + 569 = 571$ 、 $2 + 570 = 572$ 、 $2 + 571 = 573$ 、 $2 + 572 = 574$ 、 $2 + 573 = 575$ 、 $2 + 574 = 576$ 、 $2 + 575 = 577$ 、 $2 + 576 = 578$ 、 $2 + 577 = 579$ 、 $2 + 578 = 580$ 、 $2 + 579 = 581$ 、 $2 + 580 = 582$ 、 $2 + 581 = 583$ 、 $2 + 582 = 584$ 、 $2 + 583 = 585$ 、 $2 + 584 = 586$ 、 $2 + 585 = 587$ 、 $2 + 586 = 588$ 、 $2 + 587 = 589$ 、 $2 + 588 = 590$ 、 $2 + 589 = 591$ 、 $2 + 590 = 592$ 、 $2 + 591 = 593$ 、 $2 + 592 = 594$ 、 $2 + 593 = 595$ 、 $2 + 594 = 596$ 、 $2 + 595 = 597$ 、 $2 + 596 = 598$ 、 $2 + 597 = 599$ 、 $2 + 598 = 600$ 、 $2 + 599 = 601$ 、 $2 + 600 = 602$ 、 $2 + 601 = 603$ 、 $2 + 602 = 604$ 、 $2 + 603 = 605$ 、 $2 + 604 = 606$ 、 $2 + 605 = 607$ 、 $2 + 606 = 608$ 、 $2 + 607 = 609$ 、 $2 + 608 = 610$ 、 $2 + 609 = 611$ 、 $2 + 610 = 612$ 、 $2 + 611 = 613$ 、 $2 + 612 = 614$ 、 $2 + 613 = 615$ 、 $2 + 614 = 616$ 、 $2 + 615 = 617$ 、 $2 + 616 = 618$ 、 $2 + 617 = 619$ 、 $2 + 618 = 620$ 、 $2 + 619 = 621$ 、 $2 + 620 = 622$ 、 $2 + 621 = 623$ 、 $2 + 622 = 624$ 、 $2 + 623 = 625$ 、 $2 + 624 = 626$ 、 $2 + 625 = 627$ 、 $2 + 626 = 628$ 、 $2 + 627 = 629$ 、 $2 + 628 = 630$ 、 $2 + 629 = 631$ 、 $2 + 630 = 632$ 、 $2 + 6$

に直接刺激を与える表現では、対人関係が明瞭に反映されます。目上には、同僚や目下に使わないような丁寧な言葉が使われます。ただその際、英語には日本語のように待遇関係の語い（「来る」対「おいでになる」）や、敬語をうみ出す接辞（「お返事」）、助動詞（「あります」）などの文法的手段がありませんから、普通のことばの組み合わせに依存せざるを得ません。従って、質問1にある通り、言葉遣い、イントネーションが大いに重要になって来ます。

英語で「敬語的」といわれる表現は、相手をたてたいやゆる礼儀正しいことば“polite expression”のことで、ここで「依頼」を例にとり、英語がどのような形で“politeness”を表現するか具体的に検討してみましよう。たとえば、相手にもう少しゆっくり話してもらいたいとき、大体次のような表現が考えられるでしょう。

- 1) Speak more slowly.
- 2) Please speak more slowly.
- 3) Will you speak more slowly?
- 4) Will you please speak more slowly?
- 5) Won't you speak more slowly?
- 6) Won't you please speak more slowly?

1) は相手に服従を強要する命令で、“politeness”ゼロです。これに“please”が加わって、2) は命令調がやわらぎますが、3) と比べると、相手がこちらの依頼を引き受けてくれることを最初から見込んでいるふしが濃厚です。これに対し、上昇調のイントネーションを伴った3) は、引き受けてくれる気 (Will you...? = Are you willing...?) があるかを問い、選択を相手の意志 (willingness) にゆだねている点で、より丁寧といえます。これが更に5), 6) のように相手が「ノー」と言いやすい否定形疑問形に変わりますと、それだけ断わる側の心理的負担を軽くしようとする配慮にとむ表現になります。(一般に“Would you mind...?”を使った依頼形が丁寧といわれるのも、これと同じ理由からです。)

以上1) から6) へと相手への配慮が優先するにつれ、表現は丁寧さを加えていきます。これらの可能性のなかから、それぞれの場面にふさわしい表現を選ぶわけですが、当然の配慮を怠って(‘please’を落とすなど)、横柄な頼み方をすると、“Are you telling me or asking me?” という反発がかえってくるほど、英米人は「命令」と「依頼」の区別には特に敏感です。

陳述の場合、相手への配慮の示し方は、たとえば断定の響きをさけた附加疑問 (“I've got it right, haven't I?”)、むき出しの表現をさけた婉曲表現 (“I don't like it.”) といわずに “It's not the sort of thing that I'd

particularly care for.”) や儀礼的過去 (今知りたくても, “I wanted to know about it.” と過去形にする) などにもみることができます。

お尋ねの “I don't know.” の和訳についてはご指摘の通りです。ただ、英語でも、丁寧に答えたいとき、ですが、たとえば、折角質問して来た相手の期待に応えられない残念な気持ちを表わしたいとき “I am very sorry but I don't know.” という表現をすることもあります。

私たちは、「知らない」も「存じません」も、語句の上から “I don't know.” にしかならないところから、英語に敬語がないと思いがちです。ないのは日本語的「敬語法」であって、相手への配慮を中心とした英語独自の “polite expression” があることを以上の説明から汲みとって頂きたいと思います。ただ、その正しい使い方を覚えるには、英語の問題から一歩進んで、英米の文化、とりわけ人間関係を律する社会慣習といったものを知る必要があることを付加しておきます。(小林祐子)

---

日本語には男性語・女性語の区別がありますが、英語にもそのような区別があるのでしょうか。お教え下さい。  
(東都・中野洋)

---

御質問にひとことで答えるなら、英語は原則として性差がない言語だというべきでしょう。「原則として」とお断わりしたのは、あとで述べますように、英語でも一部の語いの選択に、男女両性の間にいささか違いがみられるからです。

日本語では、男女のことばの違いが一つの大きな特色になっていますが、これは又もう一つの日本語の特色であるセンテンスの構成と切りはなして考えることはできません。日本語のセンテンスは、よく知られている通り、伝達する事柄に話し手の心的態度が結びついて成り立っています。後者を表わすのに感動助詞と呼ばれるものが使われますが、これには男性用、女性用の区別(「早かったナ」対「早かったワネ」)がついています。そのため殆ど発話ごとに話し手の性別が刻印される結果になっています。もしも、男女のことばの相違が名詞、形容詞、副詞などの一部にだけ起こるとすれば、これだけ際立った形で言語を性格づけることにはならなかったでしょう。

日本の文学作品の英訳でよく問題にされるのは、性差のほとんどない英語が、どの程度原作の男女のことばの味わいを出せるかということです。この点に関して、翻

訳家の E. G. サイデンステッカーは、『日本語らしい表現から英語らしい表現へ』と題する本のなかで、翻訳家に残された道は、英語のなかにある女性だけしか使わないことばをせいぜい活用して、日本語の女ことばの味わいを幾分でもだすことだと言っています。

これは、英語から幾つかの女性専用の表現を除けば、男女のことばの区別が大体ないことを示唆しているように思えます。そこで、“women only”のレットルのついた英語の表現を以下に記してみることにしました。

英語で女性的といわれる数少ない表現は、あるものに対する好悪の感情を示す一群の形容詞のなかにみられます。日本語でも、「モノスゴクステキな人」などという大げさな表現は、大体女性に限られますが、英語でも同じことがいえます。少々気分を害するものにも“horrid,” “dreadful” と極言しますし、気に入ったものには、“divine,” “adorable” とほめちぎるといった具合です。

アメリカの言語学者 R. レーコフは “Language and Woman's Place” (*Language in Society*, Vol. 2, No. 1, Apr., '73) で、是認の気持を表わす形容詞を次のようにわけて見せています。

<i>neutral</i> (両性共用)	<i>women only</i> (女性専用)
<i>great</i>	<i>adorable</i>
<i>terrific</i>	<i>charming</i>
<i>cool</i>	<i>sweet</i>
<i>neat</i>	<i>lovely</i>
	<i>divine</i>

たとえば、一寸した好意に “How véry *sweet* of you.” と謝したり、素的な帽子をみれば “what an *adorable* hat!” と溜息をついたり、テニスの腕前一つほめるにも “You play such *divine* tennis.” などというのは、女性に限られます。

レーコフは、上記の論文をアメリカ英語に反映された性的差別という観点から書いていますので、女性の大仰な表現は、実力の世界から疎外された女たちの “small talk” のなかから生まれたという解釈を加えています。女性でも実力の世界で勝負するとき、たとえば、仕事上の提案に “What a *divine* idea!” とやれば、響きをかうのは必至で、女性専用の形容詞は、所詮、実力の世界の外側のたわいのないこととしか結びつかないと言っています。

女性ことばのもう一つの特徴として、強意語 “so” の使い方にもふれなければなりません。これも女性が誇張表現に傾くところから来るのでしょうが、“very” にかえて “so” に強いストレスをおき “I am só glad,” “It's so nice.” などとするのが特徴です。その結果、この強

意語は “feminine ‘so’” とさえ呼ばれるほどです。

最近のアメリカの「解放された」女性たちは、こうした “femininity” を売物にした女ことばを使うことは自らを卑しめることだと意識的に使用を回避しています。又女性は感情の爆発を “damn,” “hell” などの言葉で表わしてはならないという世間にあえて挑戦する気配もみせています。世間は男性の “foul language” の使用には大目でも、女性の場合にはまだまだ拒絶反応をおこしますから、ここにも男女のことばの区別を認めるべきなのかも知れません。

世間が拒絶反応を起こすのは、女性の “foul language” の使用にだけではありません。男性が女ことばを使えば、ある意味でもっと否定的反応を起こすようです。大分以前、社会人用の英会話の教材作成に当たったとき、私の書いた男の会話の部分を読んだアメリカ人(男性)に、「男がこんな女性的表現を使ったらことだ」と注意された経験があります。僅かな違いのようでも、その言語社会で守られている暗黙のルールを破ると、予期しない反応がかえってくるものです。その意味であたなのような疑問をもって英語を見ていくことは大切でしょう。

(小林祐子)

---

### 國弘正雄先生への3つのお願い

先日、西宮の立聖館での先生のご講演をお聞きした者ですが、先生につぎの3点を是非お願いしたいと存じます。

(兵庫県立御影高校・金谷茂男)

#### 第1点 教師の自己研修について

英語教育に限らず教育の場では、教師自身の研修が重要であるのは自明の理である。一人一人の英語教師が、まじめに研修し英語教育のあるべき姿を追求してゆけば、現在心配されている英語教育界の実態も相当改善されると思う。だが現実には、かなりの英語教師が、まともな意味での研修をしていない(私もその一人)。これには、現場の忙しさ等色々の理由があるが、最大の理由は教師の怠慢にあると思う。教師はよく「今の生徒は恵まれた環境にあるのに勉強しない」と批判する。しかしその教師自体はテレビもラジオも利用せず、英語関係の雑誌等殆んど読まない。彼らにとっては、教科書と受験用の参考書・問題集の英語がその触れる英語の殆んど全てである。そして教科書も「教師用書」がなくては困る有様である。立派な授業をしている人もいるが、非常に悪い意味での日本的発音で、後から前へ返り返り英語をいじくり、英語の授業なのか日本語の授業なのかわから

ぬような教室風景も珍しくない。従って、心ある人々が、関係誌やテレビ等で有益なことを述べられてもそれが伝わらない。見・聞きしないので知らない。お話しにあった平泉・中津両氏のことで、何も知らぬ人が私の知っている英語教師の中にならかなりいる。私達は自己反省をしつつ、このような状態を脱すべく少しは仲間と話もするが、力不足で効果が余りない。そこで、いかにすればこうした怠慢教師に接近して自己研修が一緒にできるようになるかをご教示願いたい。これは私達現場の者がやるべきことで無責任なお願いであるが、事情に通じておられる先生に取って聞いて載せました。

### 第2点 大学の先生方の態度について

英語教育の理論面の指導をされるのは主に大学の先生(時には県・市の指導主事)だが、この方々がもっと堅実な地道な態度でことに当るよう訴えて載せたい。種々の理論、学説を研究・紹介することは大切なことではあるが、それを現場に下ろし実践する時、極めて慎重な態度がなければ、まじめに勉強している現場の人(多くはないが)は混乱させられる。英語教育関係誌でこの20年程の動きをみる時、信頼できる人もいる反面、もっと責任感をもってよいと思える人がいないであろうか。ある時は pattern practice, ある時は変型文法と現場に流し、流行が終わると余りかえりみない人がいるのではないか。振りまわされぬよう現場が注意するのも必要だが、大学の方も、地道な息の長い研究、実験を指導されるよう努力して載せたい。

### 第3点 各出版社の英語参考書類について

現在の中・高生は教科書以外に少なくとも1冊は参考書・問題集を利用している。しかし、その内容に感心できぬものもあるので、もっと質のよいものを良心的に作るよう出版関係者に訴えて載せたい。特に大学受験のため多大の精力を費している高校生の場合、折角憶えるものが「間違い」や「不適當」なものを含んでいるとすれば不幸である。いくら商業主義とは言え、出版社・著者は大いに反省する必要がある。

以上3点お願いしましたが、3点にしたのは次の2つの理由からです。

1つは、現在の英語教育改善については種々の問題があり、いずれも重大で解決困難と思われるが、上記3点は、その気になれば直ちに手のつけられる事柄だからです。

2つめの理由は、英語教育に関係している者が、それぞれの立場で自分に課せられた責任を着実に果してゆくべきだということです。私達はこの種の問題を論ずる時、社会が悪い、大学が駄目だ、高校がなっていない、と責任を転嫁し他を責めがちです。しかし、自ら反省し改めようとせぬ限り、事態は進展しないでしょう。中高の現場の教師、理論・実験の指導的立場の人、そして出版界の方々、それぞれの場で少しでも良心的になれば、英語教育も着実に前進してゆくと思います。「目ざましい成果」など無暗に期待せず、地道に前進するのが本物の教育と考えています。

### (p.23 からつづき)

っと導入すべきであるというような技術的な面よりも、日本語と英語がそれぞれ異なった文化的、社会的、思想的な土壌で培われた言語で、またその差異をいきいきと表わしているということに、教師陣は意識的にせよ無意識的にせよほとんど、制度的には全く配慮を示していない点にあると思う。

入試のための英語、施行側からすれば、あくまで screening の手段として難しくせざるを得ない。学生は、全国的に画一的回答技術を要求される。英文和訳、英作にも一語一語画一的に訳していく能力が要求され、学生も、それを「理解できた」と誤解しているのである。たとえば「この本は良いから君も買えよ」と「これは良い本だから……」とは日本語では utterance の頻度はほぼ同じだが、英語では “This is a good book. You should buy a copy.”の方が “The book is good……”より頻度は大きいと思う。後者には、「この本は良いが

あれは良くない」という対比の意が含まれると考えるからである。しかし、この頻度の違いは、受験勉強を経てしまうと感覚出来なくなってしまうのではないだろうか。

2. 英文としての頻度、英語でこそ表現しうる内容、西洋の考え方等を学びとる感覚を、十分養えないまでも、せめて麻痺させてしまわないことこそ、万人に対する英語教育の minimum requirement であろう。英語を話す国々の社会的、文化的側面、その人々の生活意識や考え方を理解する材料を数多く教材に組み入れ、我々の言語、文化との差を浮き彫りにすることにより、言語、しいては日本語に対する繊細な感覚を高揚することになる。

なお、平泉試案の「国民の5%に英語の実際能力を」という点、大いに疑問視したい。どういう規準で人選(試験官、学生共)するのか、そしてどのような教育をするのか。道いまだ遠しの感がある。

(ケミカル・バンク勤務/日米会話学院講師)

『文法論Ⅱ』 英語学大系 第4巻

太田 朗・梶田 優著

大修館, A5判, XIX+741 pp., ¥3,700

SAITO TAKEO

齋藤 武生

本書の出版はもう何年も前から待たれていたもので、この度、ようやく期待どおりの立派な本となって世に出たことを喜びたい。

この労作を読み終えたとき、まず、頭に浮かんだのは「文献の読み」という基本的な問題であった。多くの学問分野において、資料としての文献の読みは研究活動のいわば基礎であり、言語研究の場においてもそれが重要な役割をもつことは明らかである。そうした読みの大切さを、両著者が対照的ともいえる「広い読み」と「深い読み」を展開する中で、本書は改めて教えてくれるものである。

太田氏が担当された「新言語学の文法論概観」は全体のほぼ4分の1を占めるもので、アメリカのいわゆる構造言語学から始まって、生成文法の主張、言語学の分野、文法モデルの色々、といった形での議論が展開されている。更に、付録の部分では単位、構造、体系などに関する問題がかなり詳しく解説され、本書が一種の辞典としての役割をも果たしていることがわかる。

文法モデルとしては変形文法のほか、タグミーミックス、体系文法、成層文法、依存文法、範疇文法などが扱われ、更に、有限状態の文法、合図文法、連鎖分析といったものも適切な解説を受けている。こうした多くの文法理論の概観という仕事はだれにでもできる、という性質のものではないだけに、本書の記述はたいへん貴重なもので、今後のいろいろな文法研究に寄与すること大なるものがあると思われる。

言及されている論文の数も、著者の広い読みを反映して、驚くほど多く、1973年ぐらいまでの主要論文のほとんどすべてがなんらかの形の言及を受けている、と言ってもよい。もっとも、なにかの理由で省かれたと思われる論文もないわけではなく、例えば、成層文法についてみるなら、初期の段階での前置詞の具体的研究として知られる White (1964) やわが国から出た Ikegami (1970) は言及されていない。また、解説づきの参考書目 Fleming (1969) は取り上げられているが、同じ JEL の

Algeo (1969) の解説はない。更に、タグミーミックスについては、翌年の JEL に載った Algeo (1970) だけでなく Brend (1970) の参考書目も削られている。

本書における文法理論の概観は単なる紹介、解説を旨としたものではない、という点は特に注意が必要である。太田氏のそうした意図は私見という形をとった議論が多いことからもうかがえるもので、例えば、「ある種の方向性」という観点から変形文法を Halliday, Pike, Hjelmslev などの理論から区別しようとしているのはその例である。

著者のそうした見解の中から、いくつかの重大な問題提起を読み取ることは比較的容易である。例えば、「Chomsky などの文法は、現在のところ「その言語の規則」の解明であって、これを「能力」をあらわすものと考えすることは誤解のもとになるだけで、余りプラスにならないと思う。従って実証的裏付けがもっと得られるまでは、能力と運用のかわりに、code と message を用いた方がよいかもしいない。」(p. 37) という発言もその例と言ってよいであろう。この考え方は Chomsky 個人に対する批判であるだけでなく、変形文法の根底にある(人間)科学観そのものに対する批判でもある。この問題を深く論じようと思えば、例えば、Chomsky の “The transformational basis of syntax” (1959) なども考慮しながら、変形文法のいわゆるモデル論(この場合、特に model of competence の議論)のあり方を問うことから始めなければならないであろう。換言すれば、変形文法が人間を扱う有意義な科学であるための条件といったものが改めて明らかにされなければならないということである。この種の議論はいわば純粋科学にかかわる議論であって、経験科学としての変形文法が依って立つ基盤が論ぜられることになるであろう。太田氏の言われる「能力」と「規則」の関係も、また、実証的研究のもつ意義も、そうした議論の中でおのずと明らかになってくるものと思われる。

本書の残りの4分の3は「変形文法」と題して梶田氏

が担当されている。まず、概論から始まって基底部門、変形部門 I～IV、変形部門と基底部門の関係、句構造規制、全体的派生制約、統語部門と意味部門の関係、といった順に論が進められる。Chomsky を中心にすえての慎重な議論展開はまことに見事なもので、拡大標準理論に至る過程も十分理解できるようになっている。

今日のように、変形文法学者間に厳しい対立がみられる時代に、一人の変形文法学者が変形文法を語るということは決して容易なことではない。例えば、生成意味論の立場に立つ人、あるいは、それとはやや別なものとして格文法を位置づける人があるなら、それぞれ、その人なりの議論展開ということも可能ではあろう。しかし、そうした人たちをも含めて変形文法の一つのものとして語るとなれば、最も説得力をもつのは、本書のように、変形文法の基本に立ち返って議論を進めてゆくやり方であることはまず疑いない。

梶田氏の論文に注目すべき点は多々あるが、その一つは、変形文法学者にこれまでほとんど読まれる機会がなかったと思われる Chomsky の *The Logical Structure of Linguistic Theory* (1955) を変形文法の出発点にすえ、それを基に、厳密「変形」の定義の必要性を説き、更に、「可能な変形」という概念をどのように狭く限定していくかという基本的課題に正面から取り組んでいる点があげられる。変形の定義に関しては、今日の変形文法学者が実証的研究にのみ走りやすい点を戒め、プールの条件とのかかわりで導入された AND の使用にからむ諸問題を取り上げ、私案を提出することで検討を加えている。また、可能な変形という考え方については Emonds (1970) の構造保持の仮説に注目し、その問題点を指摘したあと、代案としての表層構造規則を提案している点は特に興味深い。

本書のどの議論からも著者の深い読みと深い思考とが感じ取れるが、例えば、受身変形の適用可能性を動詞の属性とみるかどうかについて、Chomsky (1970) のわずかな発言の中に「規則を統率する位置」との関係で重要な意味をくみ取ろうとするところなどそのよい例であろう。また、語彙記載項の記載法に関して、それを素性の集合とみるかプール関数とみるかで Chomsky の同じ論文の注での発言をとらえ、発展させているが、これなども梶田氏の深い読みを切り離して考えるわけにはいかないであろう。更に、Austin のいわゆる 3 種の発話行為に言及して、従来の訳語の誤りをさりげなく訂正しているあたりにも本書の性格の一端はうかがえる、と言ってよい。

極めて慎重な筆運びで書かれた本書を、ここでの書評のように、限られた時間とスペースで論ずることは必ず

しも適当とは思われないが、取りあえず、著者が示唆している基本的な問題の一つだけ考えておきたい。

まず、著者は資料、言語、文法、言語理論には徐々に抽象度が高くなるという関係が存在することを認めているが、これは、ある意味で、重要な問題提起と解釈することもできる。例えば、付与変形というものを考えた場合、変形という文法規則が意味情報を付け加えるとみるか、それとも、文法規則によって生成される派生句構造という言語構造が意味解釈を(部分的に)決定するとみるか、という議論にも、そこに含意される言語構造と文法規則の抽象度の違いがなんらかの形で考慮されていなければならないということになるであろう。また、変形の条件とか句構造規制といったものがここでの抽象度の議論にどのような結びつきをもつかも問題である。更に、そうした条件、規制の類に関して、個別性とか普遍性ということが問題だとするなら、個別性、普遍性が含意するある種の抽象度の違いが言語、文法、言語理論の抽象度の違いとどのように関係しあってくるかも問題になるものと思われる。このように考えてくると、抽象度に関する問題は見かけほど簡単ではなく、結局のところ、人間言語を扱う言語学が抽象度に関してどのような動機(motivation)をもっているのか、という基本的な問いにまでさかのぼることになるのかもしれない。

以上、それぞれに優れた 2 つの論文を極めておおざっぱにみてきたことになるが、どちらも言語研究の方法が大きく揺れている時代に書かれたものだけに、ある種の「時の制約」を強く受けることがあるのはやむをえない。Ross (1967) を批判して一つの方向を模索した Grosu (1972) が十分な扱いを受けていないのは著者の慎重さを反映したものと考えればそれでよいであろうが、Ross (1973) の non-discrete grammar が扱われていないのは明らかに執筆時期の制約によるものと考えられる。また、昨年あたりから一部の人の間で話題を集めている Postal, Perlmutter を中心とした relational grammar は、すでに、Johnson (1974) のような博士論文も生んではいるが、本書に言及はない。これなども明らかに執筆時期を超えたもので、本書の価値を低めるものでは決してない。

最後に、全体を通じてまず誤植が見当たらないこと、術語の統一がきちんとなされていること、訳語に工夫のあとがみられ読みやすくなっていること、更に、索引が正確にして適切であることなどが本書を一段と優れたものにしていく事実を指摘しておきたい。ただし、「或種」(p. 275他)、「或る種」(p. 248)、「ある種」(p. 299他)は「ある種」に統一したい。(筑波大学助教授)

## 『英語前置詞活用辞典』

小西友七著

大修館書店，四六判，1,548 pp., ¥5,800

KUNIHIRO MASAO

國 弘 正 雄

大へんな力作である。ひとりの真摯かつ秀れた研究者が、全力投球した跡が1,500ページを超える大作のどのページにもにじみでていて、繙くものをして、肅然たる思いを強いる労作である。われわれはまず著者の小西教授の労苦に対し、心からの敬意を払わねばならない。

日本ではとかくこの種の手がたい著作は低くみられがちである。コソコソ時間さえかければ誰にでもできる、と人は軽くいなしがちである。でもはたしてそうであろうか。才気煥発な論者が、軽快なレトリックを駆使して、思いつきを書き流したたぐいの書物は世間的に高く評価される。人は、その才気のほとぼしりと、軽快なスタイルに魅され、ジャーナリズムももてはやす。その論者は一躍マスコミの寵児になる。

でも英語関係者を称していながら、その人の英語自体に関する知識や運用能力が、ジャーナリズムももてやす程たしかなものでない場合が、ままたることも私は経験的に知っている。かりそめにも英語を出発点とし、英語について物をいい、それがその人の市場価値の重要な一部であるのなら、いまま少し英語自体を勉強し、力をつけて欲しい。これは私の僭懐(けんわい)である。

小西教授は恐らくは地味な方であろう。世の中の動きはおろか、日本の英語教育のあり方などについてすら、あまり発言をなさらぬ学究の徒であろうと思われる。小西教授のその種の発言を目にし耳にした経験があまりないからである。

世の喧騒をよそに、英語教育云々についての「こちたきさかしら」の横行をよそに、同教授はひそかに、着々と、この力作の筆をとってこられたにちがいない。単に既成の研究書を広く渉猟されるだけでなく、前置詞という一見ささやかに見えながら、英語研究者にとっても学習者にとってもすこぶるつき的重要性をもった言語事実を、英米の文学作品や大衆小説や雑誌など、つまりは文字どおりの「原典」の中に求め、それを着実に捕捉し、記録してこられた。その拮据の努力の跡が、本書を手にする私の感動をさそってやまないのである。その点で本

書は、故勝俣詮吉郎教授の『英和活用辞典』や、井上義昌氏の数々の労作と同次元にならぶ、まれにみる金字塔である。本書をもった日本の英学界——あえて英語学界とはいうまい——は、その篤実さ堅実さを広く世界に誇ってよい。明治百年の日本の英学をかえりみて、真に誇りうる収獲は、斎藤秀三郎氏の数々の著作であり、勝俣氏や井上氏の作物であるというのが、日頃から私のひそやかな思いだが、小西教授の本著を新たにこの系譜に加えたことを、われ人とともに喜びたいのである。精緻をきわめつつあると聞く日本の英文学界や英語学界は、はたしてこれだけのソリッドな業績を世に、いや世界に問いつつあるのだろうか。

とはいえ、本書は単なる好事家の収集癖の結果ではない。何といっても小西教授は、れっきとした英語学者であり、専門学者——単に英米だけでなく、伝統的に英語学のメッカであった北欧やドイツ、ないしはオランダの専門家を含む——の所説にも十分にあたり、これを取り入れておられる。日本の名だたる研究家の論文や著書も参照されている。

かくして本書の一大特色は、「原典」的なものからのふんだんな言語事実と、専門研究書の解説とがみごとにないまぜになっている点である。私などは英語実務家の一人として、前者については接触する機会も少なくなく、かなりの用例の収集もあり、一応の理解と認識もっているという自負もあるのだが、後者となると素人の悲しさ、若干の例外を除いては親灸するところまことに薄く浅い。それだけに、豊富な用例に加え、適切な専門研究者の意見に触れることができるのは、ばらばらな知識を整理し、しかるべきパースペクティブを与えてくれる点、大いにありがたい。これからは、英語を書き話す上でしばしばぶつかる疑問の際には、ためらわず本書につくことにしたい。自信をもって決定ができるのみならず、全体像の中に特定の前置詞を位置づけることができ、しかも文体的な配慮をすら払うことが可能になる

(p.47 へつづく)

## 『閉ざされた言語・日本語の世界』

鈴木孝夫著

新潮社、四六判、240 pp., ¥750

SHIMOMURA SEIJI

下村 誠 二

近年書店の店頭で日本人や日本文化に関する書物が目立つようになった。鈴木孝夫氏の『閉ざされた言語・日本語の世界』もその一つに数えられようが、これは日本語という言語に視点をおいて日本文化及び日本人を見ている点に特徴があり、文化人類学とか社会心理学などのアプローチとも違った意味での日本(人)像を浮き彫りにしている。われわれにとって自明でありすぎるが故にかえって不明確なままに見過ごされがちで、日本語と日本人のかかわりかたにスポットライトをあてて、ある意味では意外な、しかし言われてみれば極めて当然な、いくつかの問題を提出して、われわれにあらためて日本語というものを考えさせてくれる面白い本である。

本書は5章に分かれているが、最後の第五章「日本の外国語教育について」を除いて、同一のテーマの二面を扱っていると見てよいであろう。その一は日本人の日本語観であり、その二は鈴木氏自身の日本語観である。

一について著者は2つの特徴を指摘する。(a)日本人は自らの母国語に対して何故か著しく否定的・消極的な評価を持っているようであり、(b)他方言語に関して自然状態とも言うべき無自覚の状態にあり、母国語意識に欠けているというのである。これらの現われとして、著者は、海外に在住する日本人が子供に日本語を学ばせようとしないで、子供が先進国の言語を習得し、日本語を忘れてしまうことをむしろ喜ぶ風潮があるといった事例をあげ、明治以来の国語改良論や国字改革論の根底にあるものが、日本語を西欧の言語に比べて劣った不合理なものとする認識であるとし、その極端な例として志賀直哉が昭和21年に発表した日本語放棄論を引用している。また外国人が日本語を流暢に話すのを聞いた時日本人が非常に奇異の感を持つのは、われわれが日本語を他の言語と並列に置いて考えることができず、それを全く特殊なものとしていることの現われであり、「日本人と日本語の独占的閉鎖的な結びつき方」に由来すると指摘する。これは日本人の外国文化との接触のしかたが、専ら書物を通した間接的な方法により、人間や物の直接的な交流

に欠けていたという歴史的な事情(その裏にはもちろん日本のおかれた地理的環境があるが)が大きな影響を持っているとする。

これらの指摘はいずれも鋭く、有益であり、またその多くは他の人々によっても既に注意されている所であるが、これに対する鈴木氏自身の解釈なり主張には、私として異論がないわけではない。例えば志賀直哉の日本語放棄論を単に言語的無知無自覚の所産と断ずるのは私には公正な評価とは思われない。昭和21年という年代を考えれば、志賀のみならず多数の心ある人々が、日本人及び日本文化について極めて悲観的な絶望感を抱いていたのは、ある意味で当然とも言える。日本文化の名でいかに野蛮粗暴な考え方が戦時中の日本を支配していたか、それが目前にどのような悲惨な結果を齎したか、そのような事態が生じたのに、日本語そのものではないとしても、そのある使い方が一役買っていたことは掩えない事実ではなかったろうか。「小説の神様」にまで日本語の放棄を考えさせた、この深刻な経験をわれわれは忘れてはならない。

これは本題をそれるようであるが、劣等感と優越感とは盾の両面であり、近ごろまた日本人や日本語を論ずる人の中に悪い意味の言語的ナショナリズムの芽がうかがわれるような気がするので、あえて一言ふれておきたいと思ったのである。鈴木氏自身は客観的な観察者であるという立場を何回か本書の中で表明されているし、全体として見た時、たしかに意識的に価値判断を表わす表現を避けていられることが察せられる。しかし以下に論じるように、氏自身の日本語観にはやや国語賛美の側へのかたよりが見られるのも事実である。母国語への愛情と言語としてのその特性の記述とが峻別されなければならないのは言うまでもない。また国語改良の議が母国語に対する愛情から発することもありうることをわれわれは充分認識しなければならない。

鈴木氏自身の日本語観は上記の「日本人の日本語観」の裏返しと考えばよいわけだが、氏が特に力説される

のは、日本語の表記法の問題であるので、この問題を取りあげてみよう。国字改革の立場からは当然であるが、とかく日本語の表記法についてその不合理・非能率が云云されるのに対して、鈴木氏は特に日本語の場合、文字は単に音声の代示であるにとどまらず、表記法が言語そのものの働きと本質的に結びついて、日本語の特質を形成しているのであって、安易な便宜主義や能率万能の考え方で軽々に論ずべきでないという主張を展開する。文字そのものの歴史において表音文字が表意文字よりも、単音文字が音節文字よりも進化した形であるというのはいくつかの点として、ある言語にどの文字が適しているかは、その言語の特質によるのであって、日本語の表記にはローマ字よりも仮名の方がはるかに優れていることを論じ、さらに漢字の音訓二重読みという独特の表記法がいかに「素晴らしい」かを論証しようとする。例えば言語学の通念からは、同音衝突によって淘汰されるはずの、同一意味領域に属する同音語が、日本語の場合には多数保存され併用されている特異な現象は、漢字による意味の区別が可能なるが故であり、また、氏の言う「高級語彙」が一般の人々にも分かりやすい(?)のは、音訓読みの習慣から造語成分である漢字の意味を知っているからであるとする。

これらの指摘は、既成の学問的常識にとらわれずに、生の言語事実を見つめようとする鈴木氏の姿勢の現われであり、それ自体は大いに尊重されるべきものであるが、そこから発展する議論や評価(それは氏自身の否定にも拘らず、やはり一種の漢字賛美論である)については、私は全面的な賛意を表すわけにはいかない。

いくつかの点をあげよう。言語における音声と文字の相対的比重について、鈴木氏は西欧言語学が文字を不当に軽視しており、それは表音文字を使用する言語を扱うが故であるとされる。しかし言語が音声を第一義とするのは、表記法の如何にかかわりなくすべての言語に通ずる真理であり、日本語といえども例外ではない。およそ言語が後天的に習得されるものであり、その習得が幼児期に音声を通じてなされ、日常生活が音声言語によって営まれるという基本的な事実が変わらない限り、これはそうでしかありえない。これと関連して、鈴木氏が表音文字を利用する西欧語をラジオ型、表音文字である漢字の視覚イメージを利用する日本語をテレビ型と表現しているのも適切な比喩ではない。現実には画面の見えるテレビと、各人が頭の中で勝手に好みの(?)漢字を音声にあてはめて解釈する伝達様式とは全然似ていない。強いて言えば、日本語は画像の出ない故障テレビということになろう。(私自身は時おり学生に、話し言葉はテレ

ビ的、書き言葉はラジオ的と、鈴木氏と正反対のような話をしている。電話などの場合を除いて、話された言葉の解釈には、聴覚のみならず五感のすべてを動員した場面の把握が、重要な要素となっているからである。)いずれにせよ、鈴木氏が文字に対して与えている比重は大きすぎると思う。日本語と西欧語を「まったく異なる原理で動いている」と言うのは、氏が克服しようとしている日本人の閉鎖的言語観に近いのではなからうか。

鈴木氏が漢字まじり仮名表記の長所としてあげられている諸点は、立場を変えればそのまま欠点と考えられるものであり、その他にも氏がふれておられない表記法の問題点もある。例えば、漢字語に比して氏が消極的な評価をしている西欧語からの借入語が、近年これほどの勢いで安易に流入しているのには、カタカナの存在が大きな推進力になっていると思われる。また、分かん書きがなくても困らないのも漢字とカタカナの影響が大きいであろう。さらに大きな問題は学習能率のそれである。試行錯誤を思考錯誤と書く大学生にとって、漢字を連ねた「高級語彙」が果たしてやさしいと言えるであろうか。trial and error ならば英米の小学生でもわかるのではなからうか。

鈴木氏が日本語の表記法を弁護されるのは、もちろん、従来それに対する批判や否定的見解ばかりが目立っていたことへの反撃であろうが、それが行きすぎて独善的な賛美論に走ることもまた戒めなければならない。表記法を含めて日本語はわれわれに与えられた宿命であり、良きにつけ悪きにつけ、われわれはそれを、少なくとも大々くにおいて是認しなければ、何事もなしえない。しかしそれは日本語をより良くしようとする努力を除外するものではない。鈴木氏が指摘された最も重要な点は、特に日本語の場合、言語全体の働きに影響を与えずに、その表記法だけを変えることはできないという認識である。それを充分にわきまえた上で、なお日本語の表記法を考え直す余地は決して少なくないと思ふ。言語は自然な発展にまかせるべきで、人為的な干渉は一切加えるべきでないという、一見科学的な主張もありうるが、義務教育をはじめとする一斉教育が行なわれ、マスメディアが存在する今日となつては、好むと好まざるとに拘らず、社会が何らかの意味で言語の「自然な」発展に干渉しないわけには行かないのである。現状を固定化しようとするのもまた干渉の一種であるのだから。

「外国語教育」の問題にふれる紙幅がなくなったが、これは本書の中ではやや異質の問題であり、鈴木氏の提唱される Englic 論は、本誌あたりで別個に詳しく論ぜられることを期待したい。(東京大学助教授)

## 新刊紹介

### ■『ことばの遊び』

—人が話すとき何が起るのか

P. ファーブ 著  
金勝久 訳

本書はアメリカの言語学者 Peter Farb の *Word Play—What Happens When People Talk* (1973) を抄訳したものである。副題が示唆しているように人間の言語活動の種々相がテーマになっている。したがって狭い意味のことば遊戯を連想させる「ことばの遊び」という邦訳題名は必ずしも原意を伝えているとは言えない。もっと広い意味の「ことばの遊び」とした方があるいは近かったかもしれない。言語活動というものが言語を使う一つのゲーム(すなわち play)である以上ゲームが成り立つためには言語の使い手たち(すなわち players)は一定のルールに従わなければならないが、そのルールは言語状況あるいは言語集団によって異なってくる、というのが原著者の基本的な考え方である。もう少し Farb 自身に説明させると「言語とは文法と人間の行動の組織に他ならない。それは特定の社会の全構成員相互に理解されているルールと慣習とを内蔵している。(中略)ただ人のみが生まれながらにして言葉をお話する能力を持っているために、人間のみが言葉のゲームをなし得るといふ事実を忘れてはならない云々」(序論より)。人間の生得的言語能力のとりえ方にチョムスキーの影響が大きくみられるが、ファーブは別段

新しい言語観を提示しているわけではない。本書は要するに諸言語についてかなり広い知識をもっているらしい著者が多くの具体例を挙げながら言語活動の本質を分かりやすく説いた一般向け解説書であって、専門レベルの研究書ではないのである。

評者が一読して印象に残ったのはタブー語についての考察(第4章)、アメリカにおける黒人英語と標準英語との関係(第7章)、それに幼児語が全世界的に多分に共通の言語的特徴を有するという指摘(第12章)ぐらいで、その他についてはとりたてて言うほどの読後感はない。

訳は上出来とは申しかねる。ご存じ Humpty Dumpty の名セリフ “When I use a word it means just what I choose it to mean—neither more nor less” が「私がある言葉を用いる時、私は自分の言いたいと思うことを意味する言葉を選ぶことだ——正に、私の言おうと思うことを言うことであって、それ以上のものでなければ、それ以下のものでもないんだ」(訳書 p. 182)となっているが、この訳文の方が原文より分かりいいと思われるかたには私はこの訳書をおすすめする。その他のかたは原書につくのが無難であろう。

固有名詞の標記法にも問題が多い。原書は一般向きの解説書ではあるが、そういう一般書といえども訳出にあたって専門的知識を必要としないわけではなからう。原著者と専攻分野を異にする訳者は、しかるべき専門家の校閲を仰いでから本訳書を世に問うべきだった。本書の出版

がその余裕を与えないほど急を要することだったとは思われない。

(佑学社刊、四六判、282 pp., ¥1,200)

(東京大学教授 平野敬一)

### ■『海外教育研究入門』

—教職員海外研修のすすめ

江淵一公著

今日、国際間の関係は緊密化し、イデオロギーを越えた相互依存の度合いは、ますます深まるであろう。国際社会のこの趨勢は我が国の教育の在り方にも影響を及ぼしてきている。卒業生が外国との接触をいつかは、どこかで持つ可能性の強い今日では、教育も地球的視野にたってなされねばならない。国際人として通用する真の日本人を育成するその責任の大半は学校教育にあると言えよう。このことは教師自らが地球的視野を持つことを要請していることになる。この自覚が高まり、最近教師の海外研修・視察・留学が増えていることはよろこばしい。しかしながら、海外に出かけ、自分の目で確かめることが、ただちに異文化理解につながらず、逆に偏見、誤解の種をまく結果にもなり得る危険性を有している点に、もっと注意の眼を向けなければならない。海外視察・研修・留学の技術的側面や各種のデータを提供してくれる書はよく見受けるが、異文化との対応の仕方や異文化接触に附随して起こるさまざまな現実の問題を解明し、適確な助言を与えてくれるものは少ない。

本書の最大の特色と推薦理由は、研修等の技術的・方法論的助言とともに、異文化に初めて接する者に国際適応の心構えを詳述している点にある。生まれて以来、慣れ親しんでいる自国の価値体系とは全く異なる体系に接することは、想像以上に不

適応・偏見・誤解の問題を引き起こすものなのである。この適応の問題はただ単なる言葉の問題以上のものである。異文化に接する際の際の要諦は著者の次のことばに如実に表わされている。『「学ぶ」ということは、『すぐれたもの』についてだけありうるのではなく、すぐれているかという価値評価を抜きにした『自分（自国）と異なるもの』から『学ぶ』ことも可能であることを忘れてはならない。むしろ、これから先の国際交流が必要なのは、文化の多様性・差異性に学ぶという態度だと思われる。『差異に学ぶ』というのは、自分とはちがった考え方、生き方があることを知り、それを認めることによって、自分自身を相対化してとらえる（つまり、自分の主義主張を絶対視しない）という柔軟な視点や考え方を獲得することである』（p. 29）

本書は1部＜海外教育理解の条件＞と2部＜アメリカの文化と教育＞に分かれている。1部は海外教育文化の研究の意義、方法、問題点に触れ、具体的な参考になる事柄が非常に多い。2部はアメリカ理解の背景知識を提供してくれ、巻末の教育関係用語集（英和・和英対照）は重宝で親切な配慮である。

できることなら、各所に散見される異文化への対応に関する著者の卓見を一章にまとめてほしかった。更に、著者が見聞している具体的な失敗例をもっとあげてくれれば、今後海外研修等にでかける人に参考になり、同じ誤ちの轍を踏まずにすむであろう。

本書は海外に出かける人にもそうでない人にも一読をすすみたい好書である。（サイマル出版会刊、四六判、230 pp., ¥890）

（西南学院大学助教授 吉武利和）

## ■『呼吸と音とくちびると』

中津燎子著

『なんで英語やるの？』を世に問うて以来、多くの読者からさまざまな質問や意見が寄せられ、その中から主な反響をとりあげ、前書の続篇として本書をまとめられたようである。

本書は3章からなる。第一章は英語の音声について、前書で詳述できなかった腹式呼吸による発声の仕方、アルファベットの音作りを図解入りで説明している。第二章は子供たちに英語を教えた経験のある母親たちの「関西ガヤガヤ塾」での感想からはじまり、英語教育全般について、とくにその目的、思考訓練、幼児の英語学習などについての討論の記録である。第三章は高校の先生から寄せられた手紙を転載し、それを受けて日本の英語教育の根本問題を考察している。

日本には奈良朝の昔から日本独特の文化輸入の方式がある。漢字やポルトガル語や英語などの発音をすべて日本流に変えてしまう。私たち教師はそれをはっきり認識してかからなければならない。また日本語そのものの発音の問題も抜きにしては片手落ちになる。『もう少し国語の方もしごいて貰う教育法』（p. 81）を要望する著者の意見に同感であるが、国語教育者も英語教育者も日本人の言語教育という立場からもっと協力し合うべきであろうと思う。

前書で英語は自他を明確に区別する言語であるという立場から、英語学習における思考訓練を強調してきた著者は、その後日本の子供たちは「思考をするという精神行動が稀薄なこと」（p. 153）に気づき、英語以前の問題、「日本人が人間として生

き延びてゆくための最低量の思考力、そして国際社会の中でうまく生きてゆける思考力」（p. 164）の養成をいっそう力説している。詰込教育の方向転換はまさに急務である。

著者は最後に、指導要領にかかげられている四技能の習得という目標について、最も肝心な能力、すなわち、「理解する」という総合的な能力がぬけていることを指摘している（p. 208）。ことばは人間と人間の間で成立する社会的な言語である。聞いた、読んだりしたことを理解し、話したり、書いたりしたことを理解してもらうものだという言語に対する認識が不十分なところからきている問題である。国語の危機を経験したこともなく、上から下への一方交通的伝達に慣らされてきた私たち日本人は、言語による伝達の重要さ、またそのむずかしさについていつの間にか不感症になっているのである。この際広く言語教育の目標を再考してみる必要があろう。

以上紹介した以外の多くの点でも、本書は言語教育にたずさわるすべての人に読んでもらわなければならない本であると思う。（午夢館刊、B6判、226 pp., ¥870）

（都立第二商業高校教諭 名和雄次郎）

## ■ *In search of What's Japanese about Japan*

by John Condon  
Keisuke Kurata  
with photographs  
by Yasuo Kubo

Perhaps everyone who has been in Japan for any length of time has thought of writing a book about Japan. We begin by listing things that seem particularly Japanese or at least unique in some way. My list includes ads in trains for a conversation school

which enticed students by promising to teach them such "catch phrases" as "Your fly is open" and young ladies barebreasted on late night TV who cover their mouths with their hands in embarrassment. Most of us never get around to converting our lists into books, but we all enjoy reading other people's, especially when they are as well-written and cleverly presented as this one.

A major feature of this book is the great variety and thorough presentation of the topics. This seems to be the result of the incorporation of ideas from some of the best sources: perceptive young Japanese. According to a student in one communication course taught by Mr. Condon at ICU, their assignment was to look for "what's Japanese about Japan" in their daily lives, and then they discussed these ideas in class. From these basic concepts, the authors have carefully selected ones they feel to be most important or most representative of Japanese social and cultural tradition. For example, the contrast between "ours" and "theirs"

is discussed first in terms of the strong family ties in Japan and then treated in relation to the feeling of separation of things Japanese and foreign things in the minds of most Japanese: Japanese mannequins for kimono but western mannequins for non-Japanese wearing apparel; chopsticks and a bowl for *gohan* with a Japanese meal but a spoon or fork and a plate for *raisu* with a western meal.

Such difficult concepts as *jimi*, *hade*, *yabo*, *iki*, and even *shibui* as well as such elusive things as smiles and laughter are presented so that the feeling comes through along with the meaning. We learn that in Japan perhaps more than anywhere else, a smile may be a mask which cannot be taken at face value.

One reason for the clarity with which such concepts come through is the photography of Yasuo Kubo. His camera has captured things and people in the middle of living their lives in such a way as to isolate the very concepts being presented and freeze them on the pages for our immediate understanding.

I have been using the book as a stimulus for conversation in my advanced classes at ELEC. I first read a section aloud as an oral comprehension exercise and ask questions to determine understanding. In the discussions which follow, the students think about their own cultural environment and also learn how Japanese and western cultures differ. This understanding helps them in their language study.

This book would be a fine gift for friends outside of Japan who might still have an unclear image of Japan, an image warped by an overdose of Mt. Fuji (which is not so beautiful up close), geisha (who are no longer accessible except to the very rich), and cherry blossoms (which are truly beautiful but which have a very short season). It would be an equally fine gift for friends in Japan who have not yet gotten around to writing their own books. It would also be a nice gift for yourself. (Shufunotomo Co., Ltd., Tokyo, 148pp., ¥1,800) (Instructor, The ELEC Institute  
**Cathy Clark**)

(p. 42 よりつづき)

う。小西教授も恐らくは山田孝雄博士の説を援用して指摘しておられるように、顔洗う前( )ほたるが三つ四つ、の句の括弧部分に、に、へ、を、の何れを挿入するかは、語法次元をこえて、文体次元、文学次元に迫る高踏的な問題だが、日本語のみならず英語にもこの種の選択は当然存在するだろうからである。

前置詞は冠詞と並び、お互いにとってはもっとも厄介なネックである。能動的に英語を使いこなすことの重要性が目を追って高まりつつある今日、金口儀明教授の『英語冠詞活用辞典』という好著を出して夙にわれわれを裨益してくれた書律が、本書の刊行を手がけてくれたことに心からの謝意を表し、本書が英語の運用能力の涵養を願い、通じればよい式の実用英語の粗放さにあきたらぬ多くの英学生の間で広く行なわれることを希望してやまない。前置詞のみならず、前置詞にまつわる連語関

係に関連して冠詞や単複の区別をも周到に記録した本書を備えることは、勝俣辞典とともにできるだけ正確に、英語を書き話すことを希うものにとっては、不可欠な準備であると信ずるからである。(国際商科大学教授)

(p. 25 からつづき)

(5.1. の補足。他の教科ともに真の教師を養成し、サラーをもっとあげること)

望蜀の言を吐けば、交換留学生をもっと増やすべきだと思います。また最近の中学・高校・大学をみて感じるのには、英語なら英語の、数学なら数学の「本質」からはずれた教育が、ほとんど全般的に行きわたってはいないかということですが。

私は特に英語に関して、高校の受験英語に巻き込まれ(ていないつもり)ずにすんだものの、教育とは何か、を常々考え、愛読している本誌を契機に「体」で書いたつもりです。



## 展望 通信

### ▶ELEC 夏期英語講習会

ELEC では一般成人を対象に「夏期英語講習会」を下記要領で開催する。

#### 1. 英会話集中コース

会期：7月28日(月)～8月15日(金)

#### 2. TOEFL 受験コース

会期：8月18日(月)～9月5日(金)

いずれも午前の部(9時30分～12時20分)と夜間の部(6時～8時45分)が設けられている。願書は20円切手同封のうえ、東京都千代田区神田神保町3の8 ELEC 英語研修所「夏期英語講習会」係あて請求されたい。

### ▶English Galaxy

トミー植松語学センターが主催するギャラクシー(実用英語および口語英語実力養成を目的とするゼミ)が今年も研究社協賛で奄美大島と都下八王子市で開催される。

#### 1. 奄美ギャラクシー

会期：7月24日(木)～8月3日(日)

場所：奄美大島名瀬市

費用：86,000円(旅費、宿泊費、講義一切を含む)

対象：中学生以上、教職員を含む。

申込締切：7月10日(木)

#### 2. 八王子ギャラクシー

会期：8月13日(水)～15日(金)

場所：八王子市大学セミナーハウス

費用：15,000円

対象：高校生以上

申込締切：8月2日(土)

申し込み、問い合わせは〒107 東京都港区赤坂 2-17-69 トミー植松語学センター (Tel. 585-9330) まで。

### ▶中学生のための特別英語講座

ELEC では英語の苦手な中学生のための特別英語講座を下記により開催する。

会期：8月18日(月)～22日(金)

時間：午前9時30分～12時

会場：ELEC 英語研修所

定員：100名

講師：國弘正雄(国際商科大学教授)

申込み受け付けは7月1日から、定員になり次第締め切る。詳細については〒101 東京都千代田区神田神保町3の8 ELEC 英語研修所「特別英語講座」係あて問い合わせられたい。

### ▶第14回 ICU 夏季言語学研究会

期日：8月29日(金)、30日(土)

会場：国際基督教大学理学館

詳細については、〒181 東京都三鷹市大沢3の10の2 国際基督教大学語学科内 ICU 夏季言語学研究会あて問い合わせられたい。

### ▶ELEC 人事

去る4月4日に開催された ELEC 第33回理事会および評議員会において、次の3氏がそれぞれ理事および評議員として新たに選出された。

理事：平野敬一(東京大学教授)

真崎秀樹(外務省参与、元特命全権大使)

評議員：長谷川周重(住友化学工業株式会社社長)

## 編集後記

◇國弘正雄先生が永井文部大臣にインタビューした記事を巻頭に載せることができました。題は「外国語教育の周辺」ですが、内容はその核心についていると思います。次号では、三木総理にインタビューした記事を予定しております。総理が英語教育についてどんな期待と抱負をもっておられるか、大いにご期待下さい。

◇前号において、小川芳男・平泉渉・渡辺昇一の諸先生による座談会を予告しましたが、雑誌『諸君』と企画がかなり重複することになりましたので、本誌では、平泉渉・鈴木孝夫両氏の対談に変更しました。(Q・Q)

英語展望(ELEC Bulletin) 第50号

定価 480円(送料70円)

昭和50年7月1日発行

◎編集人 中島文雄

発行人 酒井杏之助

印刷所 大日本印刷株式会社

東京都新宿区市谷加賀町1の12  
電話(266)2111(案内台)

発行所 ELEC (財団法人英語教育協議会)

東京都千代田区神田神保町3の8  
電話(265)8911~8916  
振替・東京11798

# ELEEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC